伊吹
狹霧
五十鈴廼川波

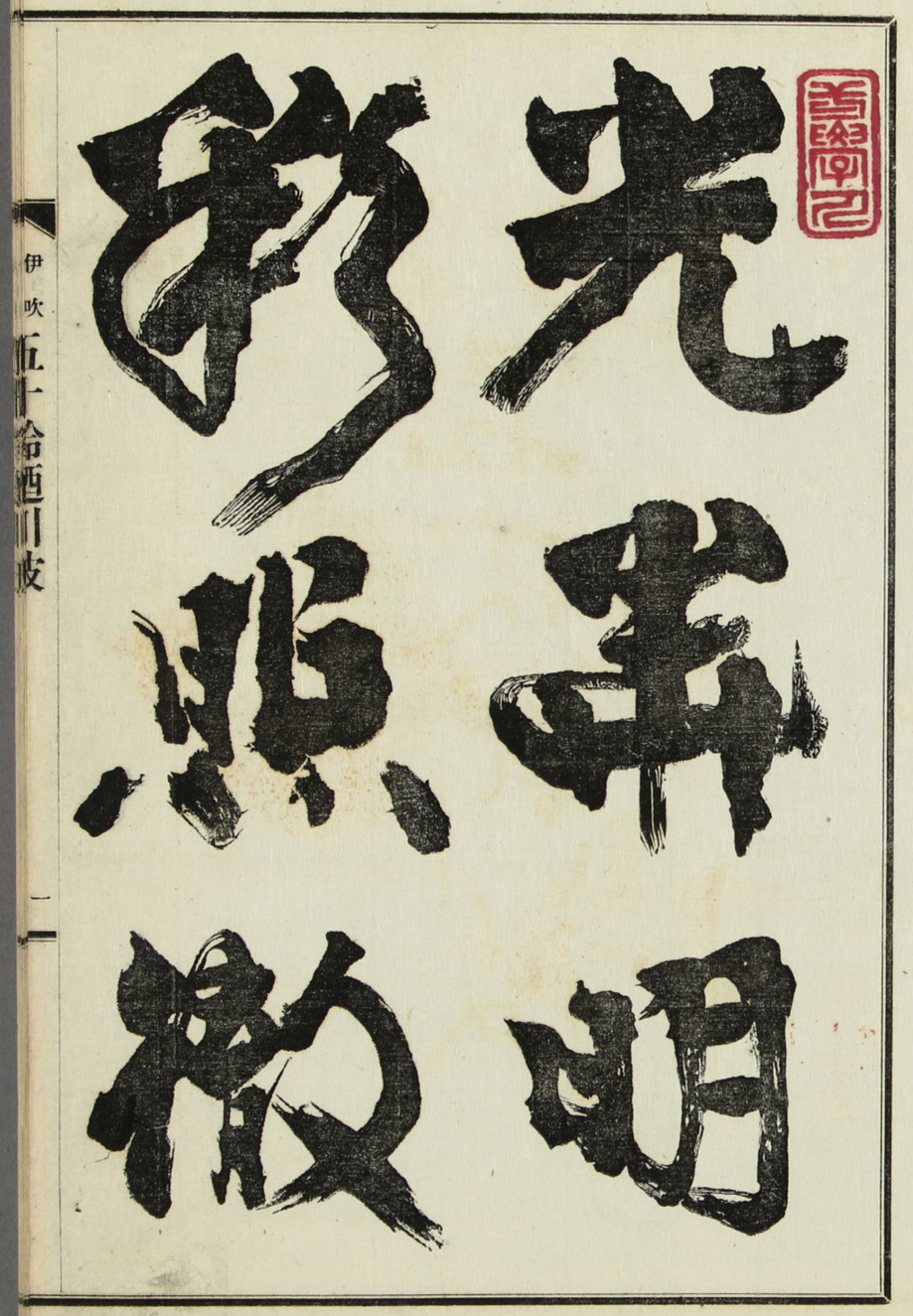
特別
イ4
3163
174

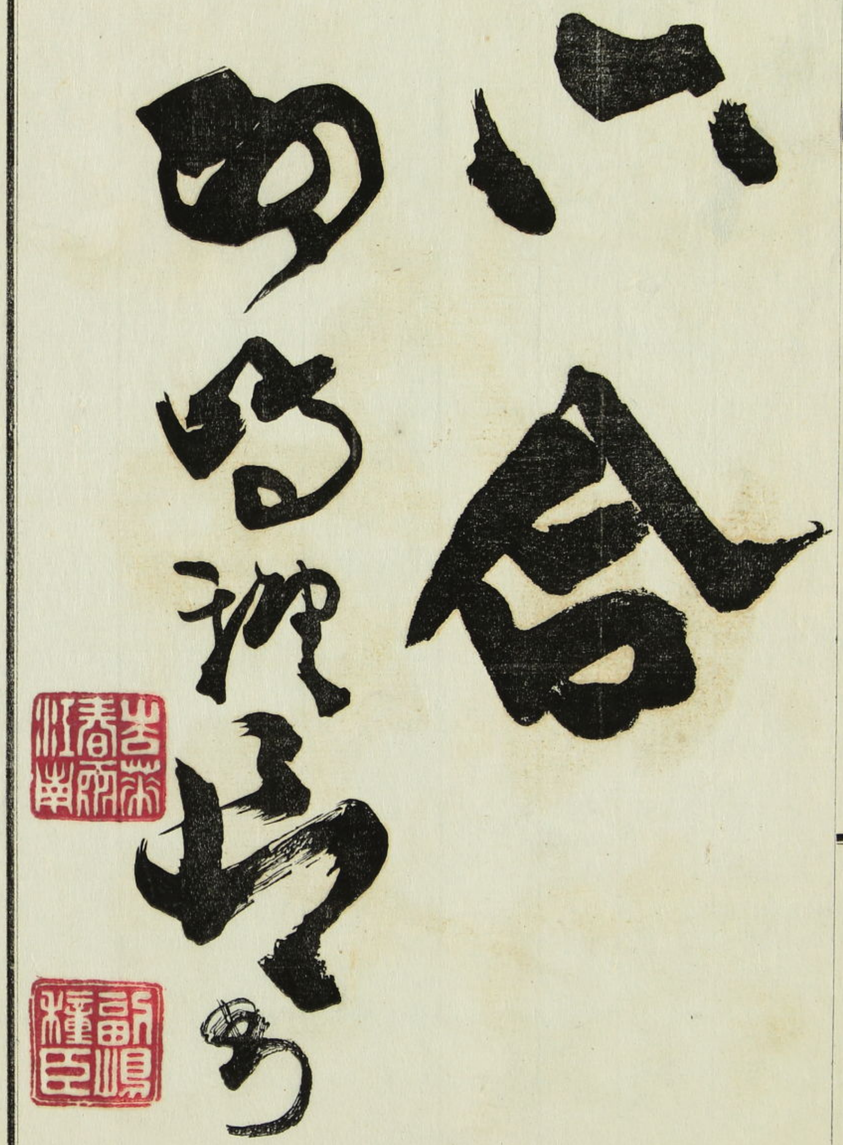
貴
イ4
3163
174

山本比呂彦

いゝ吹の
さきり
五十絵川波

晴耕雨
讀圖書





序言

はけくしき大御代の開けゆく道にて行るもこゝろかきハ和乃心を
究むる事ハとゝ詞をかゝるそゝり哀に計るされ婆先ハ大人たちの皇
國學の釋事よりのるかゝゝいハゆ抜し爲給ひつるいはゆる註大
方いゝ詞の上ゆのミ傾き今より利ゆる言むにあゝぬ所是
か神な幾年ゝ志賀ゆゝ靴地陽て辞きをかゝてふ心
地ゝ抜志ゆ事年ゝ家師山本大人はゝゝ言況乃八十乃
ちまたと爲るゝ爲志ゝ天地おゝ乃川か註形抜いゝ孫一言
ゆ草義の具りぬるよ利　理爲初爲給ふ神業ゝ爲ゝ爲
まゝ神の靈奇の御偉ゝて世れゝゝ外ゝもあゝた
と五十鈴川源遠く清き瀬乃音ゆ事爲孫ゝ耳ゝ抜ゝゝき
神路山志孫ゝ匂ふ日影に月須眼をゆ爲解衣のいゝま
をやかゆ性神の理を解れたるよ利皇國ハ國ゝふ國ゝ祖國

形容を皇下の蒼生の村獲の仏れ庶幾はけ又たゝ澄海
らゝ志て理想なのと流涕たる他〜國人此をかゝるき仏哉
さえ学う多くされはるいを生てゝい越乃浜山の以を志きと
此ヨこ毒あるけ者さて小彼兵書よいい曾る百戦百獲を善の
善ること能ずゝ仏つた志て戦いて人乃つをとのを屈志る者を
名将の譽れとを形利ける此文を謀り多き浜内外此人と乃出同き理碗きこてるを志海の八百路
よ拿喰攘ひ孫隆ふ大和魂此仏乃法柱ゝ出恢宇を
譽計蒼海を疾く馳行く船のこと いをきよく志みやけく明め
得らるへく形むを以と昇出多く以を宇を志くてかゝ一言戦を人ゝ多り

明治廿ゝ年七月の末五日

渡辺忠志謹
堅浮習竹書

伊吹 五十鈴廼川波

伊吹五十鈴廼川波

山本比呂伎謹述

緒言

つらゝ近時宇内の形狀につきて皇國の後來を推し思ふに太平洋の名のなたらに不二山の姿の向も背もなく正しく廣直く保ちもて往む事いとゝ難きことになむ今や我國は四海關鑰の開けてより茲に二十有餘年間百般の事物悉く其の媚をてらひ無數の教其の眞を紊し一得一失利害の相友なふは蓋し氣勢の止む事能はざる理數なるが故に洋潮の漲り溢れ來り腥き風の東天を覆ひ舊物と新物と化合的の親和力を失ひ衝突して交も相競戰するが如き現象ありされば今の世の最急に取構へむとする點は一ゝして足らすなむ有ける就中陸海軍備の如き或は物産殖民工業航海商業に又は政費節減に其他學脉精粹に稅權回復等數ふるに遑あらず是皆我帝國の最大樞要なる事業たるは勿論なれともこ

れ等の有形的事業を成就せしむる者は即ち無形的人心の和合的の力に基因らさるべからす。然るに二千六百年來涵養し來れる。神國の氣象は流行病に感染し。後來難治に立到らむと成り往こそいとうれたき限なれ。夫皇國の神民は太古より天地自然の秩序備はりて。之に薫陶せられつゝ。人爲的教化の力をからずして、忠孝義勇の風自ら盛なりき。中昔已降士風と云ものあり。以て國家の元氣を維持し來れりと雖も。畢竟是等を要するに。因習の力は十中の七八を固有せる那り。然るを近來其元氣絲の如くゝして絶るに垂とす。加ふるゝ外には英鷲魯獅佛虎獨蛇の四境を窺ひ。内ゝは黨派の軋轢よりして氣餒燼廢て。萬代山吾妻山等の變有らむと疑れつ。是蓋し其の黨の小義を盡すの至りより。國家ある忘れしむ。國家有りて黨派あり。黨派有て國家有る者に非ざるなり。何そ思はざるの甚しき。吁嗟斯の如くなれば假令百萬の鈍貅を養ひ幾千の艨艟を浮ふとも。豈千載東洋は浦安の名ゝ安むす可らす正ゝ細才千足の名との實を擧けさるを得す。試に思へ維新以來都鄙庠序の設あり。普天の下恩惠を被り。學校設立。知識發達。隈々至らざるはなし。然れとも忠孝義勇地を拂ひ片々散去する是の悲風の折まあひて。卒

然顯れ來れる者は。最も欽拜すへき教育の勅語に非ずや。爾後日淺し。而して是を口に云ふものと。身に行ふ者と。其量何れか多數なるや。今や我が國の民情。義を後し利を先にするの習俗を成り。是をその儘に放任し去らば。假令英邁なる人の後日ゝ傑出すとも。如何ゝ詮すべなからむ。之を矯正せむとするは教育の力よく其功を奏すべしと雖も。その大和魂の氣象は素より國家の元氣固有の物にして。輸入的教科なとの能く盪し得へきものにあらず。故に須からく内に存する所を發揮して。天地自然の人性なる理數を知らしむにあるなり。その所謂人性の理數なるものは。即惟神の大道を云ふの外ある事なし。其大道の源則を知るは。大御神の御上を一速に辨ふるにあり。そは是迄皇學を推し擴め給ふ。大人達の說も有と。按ふに絶對の邊に至りては。餘りにおほらかに說なし道理もなく。ひたすらに信せよとのみにては。かゝる理窟世界には。信を置く人の少かきものと推し思ひぬれは。比呂仗晩學を不顧。管見を憚らすして。國家の忘れ難くて。本編を著述して。博雅の君子に質す。

噫夫我日本帝國は皇祖　皇宗極を立て統を垂れ叡聖神智と坐す。　皇上繼々萬世に照臨ありて今や憲教の二勅は四維八荒至らざる隈なし而して此の二勅の由來する所遠く建國の昔にありて宏模を紹述し給に外ならず故に是を欽拜明知しまたよく國首の神理より敬神忠孝の序次を逐ひ前途の急務樞要は不求して得へし上　皇祖の神靈及　至尊の制裁よ適へなば自ら下萬民の調和融暢せむこそ頗る要點なれ茲に比呂仗負けなくも思ふ所ありて神國の繼織は外國と異なるを知るに有り其種々有るが中に一速に知るべきは畏くも　皇祖即ち天照大御神の御盛德と御恩賴は五十鈴の川霧に氣噴絶ゆる事なく川波清き誠の大道を知るにあり夫れ　大御神は宇内の大主宰に坐す幽顯の神則を辨知せざる可らず其は萬國の上古史みな造化の大神を主一とす其如何にも天地を鎔造し給ふ御偉業の大德はいと然るべき事は更なるが幽に現れ幽に隱れ幽現の大活機は諸ろの命もちて悉々諸冊二柱大神に托けまし〳〵隱御身矣と古史に見たる理由ならむが茲を以て諸冊二柱大神は統緒を次ぎ化工鎔造の事に心力を盡し給ひたりしが幽現兼備宇宙無窮の大主宰を生産し修理常しへに固成の道を全ふせんと神量りに量り至誠懇禱の祭禮によりて　大御神の生坐し給ければ二神は更に大權を大御神に讓りまして高く安く日の少宮に御魂を鎭め現世には亦御身を隱し給ふも萬斯を維持し給ひぬるは神則の自然の運機による に外なければなり皇國は建國の眞理此に基礎し公明、無窮なる惟神の大道之に根據し正しく朗らかよ皇統の無窮之よりて保ち外邦の侮り跡を絶ち浦安國の名を博くするも國初に天地の大主宰萬代無窮の至尊と　大御神を仰き奉る神律の培生鞏固なる習ひなればなり其眞理等はまくはしく拜てくはしく知るの難きものから下に條件を立て說き明さむとす茲に此釋を成に當りて宇宙天然の形象を聲音と神理と天壤無窮なる皇國の組織に準據し畏けれと萬代かけて動きなき天の御柱と建て搆ひ給ふ道の瓊矛の靈運活機傳より天津日を敬慕するならはせの伊勢の　大御神を無二の至尊と奉齋皇國の國體又天性のまに〳〵神さがに率由する自然適の緣由より釋き分け起し繼て日球の不動位と御

光の靈德と外宮の恩惠と。齋宮は一速く可建理由とにひき及し恐けれと。大御神の御盛德を陳述するになむ。

五十鈴川。清きなかれの。水上は。氣噴。のさぎり。わけてこそ知れ

いふきのさきり五十鈴の川波

總論

山本比呂伎謹述

つら〳〵近時宇內の形狀につきて。皇國の後來を推し思ふに。太平洋の名のなたらに。不二の山の向背なく。正しく廣く保ちもて往むこと。いと〳〵難きことになむ。あはれ我國四海關鑰の開けてより。茲に二十有餘年間。百般の事物悉く其の新らしきを競ひ。無源の外教其眞を紊し。一得一失利害の伴なふは。蓋し氣勢の止事能はさる理數とするも。今や洋潮の渦き溢れ來り。腥き風は東天を覆ひ。舊物と新物と化合的の親和力を失ひ。衝突して交も相競戰するがことき現象あり。加ふるに外には英鷲魯猊佛虎獨蛇の威勝を振ひ。潛かに政略手段を施し。內には黨派の軋轢を釀し。氣焰はほとはしりて。萬代吾妻山等の變有むかと疑はる。され婆今の世に最急く取搆へむとする點は。一にして足らすなむ有ける。就中て陸海軍備の如き。或は物產。殖民。工業。航海。商業。學術等。數ふるに遑あらす。是皆我帝國の最大樞

要なる事業たるは勿論なれとも是等の有形的事業を成就せしめむは即ち無形的人心の向背を一統し和合的の力に基緣せざるへからず然るに本邦二千六百年來涵養し來れる神國の氣象は流行病に感染し後來難治に立到らむと成行こそ憂たさの限りなれ夫皇國は太古より神氣自然の秩序備はりて忠孝義勇の風自ら盛なりき試に思へ維新以來都鄙庠序の設けあり普天之下恩惠を蒙り學校設立知識發達隈々至らさるなし然れとも忠孝義勇の風は日に消亡し月に散去する觀を呈せり此の悲風の折にあひて卒然顯れ來れる者はいとも〳〵欽拜すへき教育の勅語にあらずや爾後日なほ淺し而して是を身に行ひて口にいはざる者と口に云ひて身に行はざる者と其量何れが多數なる蓋し空論するのみならむかと憂慮に堪へざるなり今や我國の民情義を後にして利を先にするの習俗と成りにけり之を矯正せむとするは教化の力よく其功を奏すへしと雖も幾雪霜いく星回を重ねず婆成し得る事能はさるましくこそされとも情況は既に危運に迫れり此の燃眉の急を救むとには素より内に存する國家の元氣固有なる大和魂を養育發揮せしむるより急なるはなしされば之を導ひくには天賜なる人性自然的の理勢を以てするの速かなるに若くものあらむや噫夫我日本帝國は皇祖皇宗極を立て統を垂れ英聖神智と坐します　皇上繼々萬世に照臨坐して憲教二勅は四維八荒至らさる隈なし而して此の二勅の由來する所遠く建國の時に基因せる宏摸を紹述し給ふに外ならず故に上　皇祖の神靈及ひ至尊の制裁に適ひ下萬民の調和融暢そるは要點なり此の要點を言行に遂け果さむとには神國の組織成立の外國と異なる天眞なる神律を辨ふるこそ主一なれ中に就て一速に至極大道の存する天祖即ち　天照皇大御神の御恩賴を畏み御盛德は五十鈴の川霧の氣噴絶ゆる事なく清き眞砂の數ふ可くもあらぬがまづは鎔造化育國家統治等の主權は悉く天津日に歸着すべき神理を知るそ緊要なる是れ自然的の眞理にして培養順致因習教育等の說は聊か之を他借するものに非す此の眞理をまくはしく知り易からしめむは吾曹皇國學者の任なれは勇進して論辨せざるべからず故に下に條件を分ち立て即ち宇宙天然の形象と

神理と。天壤無窮なる皇國の組織を。準據して說き興すに。專ら天瓊矛靈運活機、二に天津日向ふ神習ひ。三に神性のまにま率田する性情。四に外宮の恩惠。五に齋宮は一速く建へき理由。六に天象日球の位置。及ひ御光りの靈德化育の元素。七に諸册二柱大神の懇禱により。　皇大御神の生產坐し給ふ神蹤論。八に　皇大御神御名の傳を陳述せむとす。天晴れそも神のいふきの朝霧に匂ふ朝日の宇ら〳〵と川波さえて音ふにいかに久しき沈痼と成れる諸人よ。嘗て癒との此れの五十鈴の川波を「五十鈴川清きながれの水上は伊吹のさきり別けてこそ知れ」あなかしこ

五十鈴の川波

山本比呂伎謹述

○第一章

皇道は惟神なる瓊矛の靈運の活機の隨意成立ぬるを釋す

言卷は綾に恐き　天照皇大御神は。造化大神達の御上までをふゝみ。別に皇國にい造化大神達を主宰として。奉齋ぬ御手振なるが。其理由抔を解かむに。今日近く之を譬へば。是は衣の領よ袖よと。きはやがにさし定めて譯き分けむ事はたやすからず。邂逅裁ちもし縫ひもして釋き成すとも。ゆきたけしたらに强からむ事のみに傾きて。惟神の道は仲々に言ひ當て得む事難くなむ有りける。かれ神典にたゞり基き。專ら是の瓊矛の神靈の活機をしも。道の標準ともちいつくと。また天津日に向ひて。萬物の皆悉其生を遂げ。蒙むる御恩慶を。了り得るが。即ち天眞の道の元たると。また神伊佐奈岐伊佐奈美二柱大神の（下には諸册二柱大神と書し奉る。）神人の性情。天津神より純粹なる性情を受け。其素質のまゝに萬代の規律を樹立し給ひぬるとが。惟神の道の根幹枝

葉と發揮したる神理は。我皇道の三大要點にして道の大本なるを以て。即之を我國の三大綱領と稱すべきにぞあなる。されば　皇大御神は。開闢より一括りに彌常とはに。天地の大主宰とまし〳〵て。其の垂統の國即我大日本帝國なれば。臣民たる者の最も崇敬して奉齋るべきは。天則にして更に造り搆へたる道にこそあらね。されば彼の外國より入來れる人爲的教育のみにふけり。傳染しぬる人々の心經病を救ひいやさむは。此綱領より掲けて釋き起し。論辨矯正せざるべからざる勢なれば。遠く古史に遡りて淵源たる水理に隨ひ。本條より漸次に流れをさらひ歩を運び。現在又將來を警誡せむとす。うは天瓊矛の靈機神功なる事は。太初の時天津神の。諸册二柱大神に諸の命のありしが中に。一きは尊く重き物たるを以て。殊に標稱し授け給ひぬる瓊矛にしあれはなり（古史を按するに。瓊矛の事のみ有りて。餘は諸の命とあるにて知れたり。）皇國は古より言行一致淳厚の國風なれば。名稱に基き其言魂を糺しなば。自然と實理をも說き明さるべきものなり。名稱言詞の本たる太古の言の葉は。主とゆるかせにすべきものにあらず。別て單言にして一辭と成れる所は。よく〳〵調べ正さゞれば。眞の理を知る由の

得べくもあらず。さらば上古史に見えたる言辭には。一層心を注き必すしも五十連の聲音に付て定むべし。（言詞成立たるを類に觸れて說成すも。其言詞の元は一音より成立たるを。是迄の大人たちの考への疎きは如何そや。）宇宙間に觸れて鳴り打ちてひゞく自然なる音聲にたとり基くぞ。學者の專務本領なるべき。さるを日本紀瓊矛の注に瓊此曰努とあるを。近來の大人達の奴と訓付られしもさる事なるべけれど。愚按ずるに或は本義に差ふべくや。又神理も訓切も詳かならじと思はる。そは古本に止と訓み來りぬるは。必す假名日本紀よりの事ならむと知られて。殊に正しき訓み方なるべけれはなり。そも〳〵奴音の意義は何れの處に從かひ綴れるも。力少く鼻にひゞきねまれるものより續きて。全く弱和なる氣象を免れさるものなり。（沼。ぬるし。ぬける。の言葉の組立に心を付べし。）それと引きかはりて止音の意義は同一にして疆なく。さしも敏捷の氣勢を帶びて力太しきものなるをや。（止むところとぢる等の言詞の組立を見よ。此の止音の意義の事は。トフカミの太詞考中に釋せると合せ考へてさとるべし。さて又因に云はむに。カムナの意義の釋言に付て。平田大人は假名と云へる義は。音の印を假に書て。象形の字の。眞に其物の形を畫きたる。字に對へたる稱なるべし。今の世に用ふる假字は。漢字を借りて書る故に。それに心を引れて。假に漢字を用ふる故に。假名と云ふなど思はむは未しき事ぞかし。さて字を那といふ義は名なり。名とは師說の如く。業の省言にて。事物に負たる符印をいふ言と聞ゆるを。字をも名と云ふは。事にまれ物にまれ。此い某の事。其は此事と知

るべき科に作れる故ならむ。又案に。成りの畧語にて。事を志るし成すより。皇國に本より字の無らむには。唯に漢語のまゝに字と云ひて。那といふ訓の有るべくも非ずと言れつるは。よく考へ說れたりと雖とも。假字の意義い。案ふに占形。また萬の形の名より繰せるにて。名の義は。實に對へては。內はうつろに外は正しき義にて。神字象によりて探りなば。いとよく悟らるべくおむ。此事は下條皇大御神の御名の所に說べし。神代より和字の固有なるは太諄考。平田大人の本辭經開題記等ゑ付て知らるれど。或說に名の義は神の敎ふる名なり。故にカムナと言へるもよき考なりと覺ゆ。夫れ止の音義たる底根剛强なる母の才音の質を帶び。連續絕ず萬古を變替なき。父のツ音の性を稟けて成立つ物にして。その太く强く連續する基勢が。やかて大同の精力を基因養生するを以て太しく一つらにいつも常にして。初中後調、正ひたるものと可謂なむ。說分け推持て行けは造化大神より諸册二柱大神神靈の同一なる活機を。此瓊矛に胚胎せられたる神器にして。決めて常の器にあらざるべし。換言すれば即御矛に憑托たる造化大神の分魂の添り整ひたるにこそ有りけらし。故に止の同じ義なるこゝろ。天地自然なる動かぬ形聲に基ける訓なるべき事。理象の上にて明かに知らるべけれ。いでやかは其理義を言むに。物の數の一は元數にて。一に一を加ば二となり。二にまた一を加ば三となり。漸次に如此加へ持て行かば。十の數に至り其一と十と。理象。其名の同一なるは。彼の漢音の如きイッチフてふの名稱を。異にするの雜混せるさま

にあらず。皇國言魂の幸ふ正しき國なれば。理象名詞の同じき限は。單音義の一理貫徹したる風にして。またその理象のはたらきて。言魂の助くる國風とはなれるにこそ。ヒトと。ヒ音の添りたると。十にトヲとヲの添りたるは。一の用のヒロキよりヒと云ひそもトヲのヲの音いをはりの義なるを知らせたるにて。言魂の助くる一例をみるべし。大同の意義の活用たる。漢の書經洪範てふ書は。儒家の原則ともてはやせる其が中に。同の義を論じて。汝從。龜從。筮從。卿士從。庶民從。是之謂大道。身其康疆。子孫其逢吉と獨り已れのみか。永く吉事の子孫に波及するを大同と述たるなり。易てふ書の同人の九五の爻の辭に。同人先號咷而後笑。子曰君子之道或出或處或默或語。二人同心。其利斷金。又共と同とは同心之事。其臭如蘭と論賞せるにて。同の要訣なるをも知るべきにこそ。おなじ意義なるが。諸册二柱大神の國產の時。立於天之浮橋共計曰云々。二神於是降居彼島。因共爲夫婦云々。日大御神を生產給はむと共議曰。吾已生大洲國及山川草木何不生天下之主者歟。於是共生日神と言へるを初めにて。共にともに同くするの言魂にて。かゝる大事業には必ず此の止と共にするの言魂の精神の立添りぬべき筈なれば。そを言語上の唱呼にしも知らゑめ給ひたるなり。これ止の意義の本體よりぞ有けむ。共に日神を生むと宜賜へる意義の殊に勢力あるをも思合すべし。さて音

義にモ音義の添りて言魂はもろ〳〵のものにして則一方ならぬことなるは誰も知れる事ながら。トモのトの同の本義なる事を或は疑ふ人もあるべければ。そを又説むに。皇大御神の皇孫を天降し給ひし時に。御魂を御鏡に取付け祝ぎ給ひぬる。纔か二句二十字の中に同床共殿以爲齋鏡(イハヒカミトナセ)とある。同と共とを重疊して宜給はせたるい。千載一日万政同規に傳へ給はむさまの著明なるを知るべし。あなかしこ此に天地の總主宰たる大君を無終に定め給はむ事は無上の大典なり。かゝる大典をしも短簡なる神勅にて盡させ給へるは。實に　皇大御神の大御神に坐す所にや。神靈の妙運にして。いとも恐き極みなり。かく共同の言詞を重ね綾(カヤ)し給ふにて。其事の鄭重に尊嚴にせさせ給ふ深き親愛の御心こそ。天壤無窮の君德万世一系の皇統ましますに程も共同の言魂の要義に含まりて明且大なれ。皇國の忠孝一貫の孝敬の道もト音義にふゝまれる事と知られていよ〳〵尊し。努は字書に平聲戮力暖古切とあり。されば二神の協心戮力を明さむ料に許多の字數の有るか中に。努字を注者の撰み書き成せるものと知れたり。支那に同の字にトウの音を託たるも。大古の代皇神等の彼國に行來し給ふより。自ら音訓の殘りたるにやあらむ。此類なは多し。增して彼國に大古より文字の有りしを。後も彼國に往來多なるが。かく便りよき文字の皇國になきと云ふ事の有るべき。文字有りし理りあきらかなるも推して知るべし。さて其の止の形象はいかさまなりしと言むに。大國主神の皇孫に讓り給ふ矛を廣矛(ヒロホコ)と稱し。また伊佐奈岐大神の御珮(ハカセ)の御劍を伊都の尾羽張と稱す。之を要するに總てきさきの横にひろらなる姿なる事疑なし。而して皆是の瓊矛に基準を取りたるものと思ほゆ。されば此瓊矛もほさきの形は三角形に横又廣らにして穗末(キツキ)の方より漸次に細らなるか。今の劍の穗先廣らなるとに異る事無かるべし。故三角形は算術の元則にて。大小の別なく如何なる積算を成すとも厘毛も違ふ事なく算し得べし。鈎股は算の元矩とは稱するなり。うが形象より論らはむにはそも物をゆるがしめしとには。鉾や杭の穗先を三角と成すなる事も古傳とこそ知れたれ。止の形象三角なるは。自然和字(ム)の象惟神の形象なるに。僧空海が作といへるいろはのとの字形は。神字三角を本にし。漢字の止の草體に混合して製作せりしものも。素より論なし。釋紀に是の昔より傳來の和字を以呂波に作り成せる起也と言れしも。蓋古傳説の存れるありてなるべし。視よ後の以呂は字体にのつへ等の字は。漢字中に似る字のなくて。その神字形のまゝなる事を。又其外書き改めぬるも元體を存したるにてよく考見バ思ひ半はにすき那む。あはれ恐こけれど今より天の瓊矛の活機の事を聊か論

述はむ。それ太初の時國稚くうひ〳〵しかりしに。此瓊矛にて漂ふ大地を畫き廻し堅め成し給ふ大功績は申すも更なるが。それ幾萬世の後までの神人の道のもとると。國の眞中に衝立てられ。天地の御柱と見立られ。夫婦の大禮を初めて斯の道すぢのこまやかに彌廣らにひろぢりて。君臣父子の親愛敬禮等より祭祀の孝道とは成れりけり。作らぬ天地の道は端を夫婦に初む。及其至也察乎天地なる抔のいひごとは。惟か〻神の滯礙なく一理透徹して。活潑なる運動の元則を發起ぎたる事なりけり。れば天地といや遠長に。大統を總括せさせ給ふ。皇大御神と天津御位に上せ擧げまつり給ふに。此れの御瓊矛以て神業をこそ成給ひたりけめ。か〻る盛なる大御所業までに預れる功績は。神典に何くれ著れたるにて其の活機を知るべし。神典に御矛にて天に奉上と有るを。心せてなはざりによみ過すべからず。さてかく廣く深き神運の千々のかしこきさまも。うまらに知り得らるゝものは言語になむ有ける。かくて此の御瓊矛は玉もて飾り裝ひ給へるは。先哲の說にて論ふべき事なきが如くも。そが理由を試に云むに。五百箇の玉を貫繩を以て貫き鉾に取り垂でたるものなるが。うるはしくかゝやくは申すも更なり。そが御匂は正かにして倨婉曲らず斷す。嚴にして温き。垂れて流れす。聲こそ高

からぬ響の鏘々と遠く。さしも靜けく奥ゆかしく。音さへ光さへ物の類ふべきものに非ざりけむ。又そが元質を言へば。水晶の如き至精至明なるものゝ結成したるなり。此の御瓊矛の性情にひかれ畫廻し給ふ神律の粹韻に觸れて。漂へる清濁二物の堅固て或は天此に天と言は聊か論の有るあきつ。或は地となれる事。古傳及ひ先哲の言の如し。其の然りし所以の者は。鐵玉互に引力ありて。流動體をして凝結せしめたるなるべし。そが眞鐵と靈玉やがて坤輿中に聳え立てる山嶽の形と成り。そが精髓となり炭氣を拂ひ養氣を集め。又よく神代の始地球上の磅礴たる瓦斯を地心に鎭厭し地熱の運轉を成さしめ。無比の猛火と變易せしめて。萬物を養生する元素と化成しつるもみな此御瓊矛の力。よく生々化々の功を成すも。靈氣と神響とによりて成立てるものにして。唯に飾りとのみ思ひ過さむはいと淺はかなりかし。さて此瓊矛は眞鐵なるは申すも更なるが。他し國の鐵とは痛く變りて。皇國の鐵性は取り分け精良の質を具備し。鍛煉するに良工を得ては。無上の寶劍と成り神靈を兼備しては。日本刀の高きにはひは言までもあらぬが如し。此に一つの國風に關する哲理學に屬す

る神理あり。其事追々下に云べし。今茲に續きて鐵の能功を聊か論らはむに。近時地質學士の說に。地球の內部は悉く鐵を以て成ると。而して曰く鐵の比重大にして。七己上なる事隕石主として。鐵より成ると。及ひ數年前グリンランドに於て。火山岩中に鐵の大塊を發見せしこと等により。其說を成せり。隕石は諸天體より來る事は。今日學者一般の許す所にして。又天體の地球と同樣の化學原素を有する事は。近來學者の唱道する所なり。然らは此說亦理なきに非ずと和田氏神保氏等の說なるが。萬古の創に早くも之の瓊矛を地心に衝立て給ふ故にうの眞鐵の餘勢の殘りたるにて。泥沙岩石の別ちなく靈鐵の孕胎する素より怪むにたらず。是をもて下條に萬國の學理皆な悉く寄集ひ來り。そを磨き砂と成して初めて我か神典の神物にして人造に非ざる事。萬理に萃出して眞秀國の名あらはれ。神理神典の說の不動を信すると共に。是皆神謀の外ならすと。言擧すなるは實に然るべき理ならずや。（また地心の高熱地質の重層那る土水石炭礦石等の組立も。皆な是瓊矛の神運に隨伴するが。事長けれは畧きつ。次て大土御祖の傳を物せむ考なれば合せ見て然る所以を知られよ。）鐵は尤も腦及ひ貧血球を增加し。神經の力を剛强ならしむるものにして。黃疾青病等の病に

著しく功驗ある事。は醫書に譯るにても知べし。しかのみならす。收縮の氣質をも胚胎して。土塊食鹽等に和合する時は。忽ちに錆を生し。引集力ある御瓊矛を坤輿に衝立。かき廻し給へるより。修理固成の盛業を遂け給ふは。偏に鐵華の吸取力の富る。幽理に誘れつればなり。（また此御矛衝立給ふ御跡の吸取力の氣勢に引れて。小山の成れる事もあれど。事の長ければ此には畧きつ。又地中に金玉藥味の分孕分娩集類するも。蓋し此に基く事明かなり。）夫れ人々の資質も。風土の品格につれて氣質となり。一方の習慣をも蒸發するものなるが。皇國は鐵中鏘々なる眞秀なる氣を稟け。精鐵の萬國に勝れて至純至精なるものを生產するは。此の御瓊矛を衝立初給ひたる神從遺跡なり。また是の鐵性の地中に含藏りて。雲往き雨施し空氣と流動磅礴して。生きとし生ける宇內間の人は申すも更なり。禽獸草木穀果に至るまで其の氣を吸收して生長する物なるが。皇國の御民我等は近きその本つ地に生れ。自然其の鐵華の神氣を直ちに呑吸し。いささけなる血を生する理も知れて。いとも〳〵悅しき事にこそ。故皇國の人の特殊に淸潔を好める俗あるも。皇國人の神に肉食を奉らぬ國風にも。聲の太く鴻きなるも。天地の創二柱御祖の瓊矛衝立給ふいと近き處に。養育せら

るるに基縁する耶いや炳焉なり。今や昌平の好運に屬し。體力を養ふ事を不詳より。歐米人に健康も不及と思ひをる人もあるべけれども。きはめて昔を知らざる俗考なり。故に今天正以前の人を起し來らむには腹を抱て一笑すべし。されと體質に注入しては。清らなる血となるが輕捷の風をも生し。進化しては思想外の變害をも來し。今時疾く流行する尊外病に薫染せられたる人を鑑みでも。血腋の敏捷なるをいとよく知られぬべし。また一速く改良せしむるも甚敏捷なるは。また氣血のすこやかなるの成す處ろなり。輕躁浮華に看過ぐさず人々能くこそ神理にたち入るべきなれ。さて神代より眞鐵の精華を吸收し。不識不知も進化し來ぬる御民我等が。純粹の氣血を含みて一朝事ある時は。君父のために身もたなしらず。務めいそしみ。いと潔く快く命をも惜まず身を致すへきは。國人の正氣本色即ち大倭魂の成立つ。處にして。是ぞ開闢の時神化の御瓊矛の神鐵の首として。皇國に衝立て給ふ餘澤なると知られて。いとも勇ましかるを思へば。神の御賜の深きに感佩止むこと能はすして。我なからもおぞろ〳〵ばかりの恐き神の眞理は。誰れか然ならずと言はむ。近藤芳樹大人の道の釋に天皇の大御血筋の絶ぬよりの名と言れしは。一渉りは去事なからもミとチとの單言義の。言魂の組立より論せずば如何にあらむと思はゆ。因に言むに鐵にさへあれば。貧血症に有功なりとかたみに思ふめるも。鐵に種々の品あり。藥用抔にはよくせずば功少なかるべし。養生家は鍋釜にまで注意を要するものぞかし。かゝれば止の意義に言魂の稱と。器形と神字及ひ數理象と活機と神德とは。其の元は連續して。萬古を同一に達貫する動かぬ止音。是れこれ惟神の神理なるものから。瓊玉はおのずから道といふ言葉の冠と成り。遠く上りたる代より言持ち傳へ來し國にして。所以謂以行事負名國なれば。眞秀國又親國など賞稱へつることいと〳〵諸なりけり。されど洋氣に迷へる人はなほ信ぬ者もありぬべし。こは習ひの性となる諺もあれば教の不善は如何にせむ。神の道は明らかにして隱れ。靈しくして顯れ。自らなるものにして。作り設けたる道に非ずて。なか〳〵心にうまく取り入れて見るへき事もたやすからねど。さりとて打捨ておかむは。學者の本意にもあらず加之皇國は神の修理固成初し國にしあれば。神代の初め瓊矛もて畫廻らし給へる勢に引れ誘れて。末つひに清き血すぢに流れ歸り行かさらめやも。嗟乎止音の神運なる解釋のかく云ふも中々に及ふ限りにもあらさめれば。猶漏れたる事多かりなむ。あな畏こ茲に人あり同一なる活力を左右しえなば。其が利は金をも斷つべきものぞ。何に況や務を開き業を成すに於て

をや。あな大なるかも至れるかも。思はめや惟神なる道はまた天の瓊矛にたが堅めけむ」

○第二章

神國の道は天津日に向ふを標本と成すを釋す

凡天地間にある萬の事物として。本末あらぬはなし。諸册二柱大神の天の御柱と見立給へる御瓊矛は。造化御神の御魂のふゝまりぬる神器なり。また五百箇の御統の胸懸玉は。即御倉棚神とも奉稱る靈德を具備し給ひ。彼の天津神の神靈を奉招れる御鏡は。左に振て　日大御神の御尊影を化生し賜へるものにて。そは天鏡尊の鎔造給ひし眞澄鏡にして。即宇宙大主宰の表証なれば。專ら　日大御神の御殿に今に嚴然坐して。大稜威を奉祐れる無上絶對なる珍の御寶と持ち齋き給ふは云も更なるべし。されば。こは後に　皇祖の皇孫に三器を讓與し給ふ御式と同氣一元たる緣と知られていと〳〵貴し。御倉棚神の大元に坐す本は。史書に明かなれど。瓊矛は天に奉送る後は。諸册二柱大神の御本に返りぬと見えつるも。こもよく〳〵史書の意を探りて考なば。皇大御神の御本に留り給ふ神理は可丁得なむ。況して奉招る白銅鏡の奉添る由は。皇祖に　日大御神より三神器を天降し給ふと一例なるを以て明らかなり。書には明かに不見ぞも。もの學ひすなる者は。類に觸れ理を推して其事の由を闡明にすべし。神典は簡易なれバ眞理の有らむ限りは。意義を通はし心を潛めて明すべき事なりがし。

さて天津御國は。有るが中に國のまほらにして。清く明き　皇大御神は無上の至尊に坐して。高御位を常盤に日球に知聞し。其若宮は天津神達の留り給ふ處なるを以て。日の御光に光りを重ね一層の彩華を添ひ。萬の物の心も軀もひたなたりに靡き傾き向ふは。自ら神氣の化々によるものなり。かくて人々之を敬慕尊重するぞ道義の標準にはありける。さて是の方向の神蹤は。伊弉諾大神の日向の禊秡に成り初め。猿田彦大神の皇孫を日向に導き給ふに顯れ。神武天皇の　皇祖大御神即ち　日大御神を奉齋しゝに成り整へるものにして。皇孫瓊々杵尊より代々天皇の受け續き奉祝奉尊りつゝ行はせ給ふ大道の準據にて。一日も忘れ怠り給ふべき事ならじかし。故に宮社おぞは。主と朝日の直さす夕日の日照る日高見の處をえらみて建て。祝詞のほき言にさへ奉稱れる事となりたるを見ても。天津日の向背を愼む風なる事

知られて恐こくなむ。あはれ爰に日の向背を謹み給ひぬる證をしも擧むに。そも神武天皇の吾は日の御子なるに日に向ひて戰はむこと不幸と。ばる〳〵木の國より廻り打入給ひたると。雄畧天皇の若日下部親王に婚せさせたまはむとし給ふ時に。親王の日に背ていてませるを諫め給ひしを。恐み惶み給ひつる事なぞこれなり。日の向背は主と東より南の方を申すにぞありけらし。然るに宮造は。乾燥の地をトして作り。軍は日に向て戰ふは不利なれば。之を背後にし給ふものにして。他事なからむ抔いへるい。聞くも片腹いたくなむある。若日下部親王の背日のかしこみを言立たせ給ふを。何と誣ひつけめや。そも神武天皇の軍畧のためとのみならば。日午には日影を負ひ戰ひ給ふべきを。などて遠く大和より回り討入給ふべきや。是誠に上古日向之神式深きを可知ものぞ。

大陽も宇宙間の一つの國にして天然の火焔立つ御國なれども。その内にて山川萬物備り。地球と敢て異同なしとは古史の趣にて知れつ。前にも云へる如く正しく清き所なるべきが上に。生ながら御稜威の御光りの六合を照燿し給ふ　皇大御神の宮敷坐し。若宮とて造化の大神より諸册二大神まで御魂鎭め給ひて　日大御神の政道を輔翼し給ふものから。日光の殊更に煥發して靈光となり外面空氣の相反照するより溫度を生じ。ます〳〵輝きわたるものなるを。唯火の國とのみ夢な思ひ違へそ。常の溫度と思はむ事はなか〳〵にて。

究理家抔の伺ひしるべき事にあらざるなり。只の火光は影くらし。只の火溫に炭氣の嫌ひあり。萬物日の光溫二素の發輝稾篇に掛り。生養仁育を蒙るを始め。皆光線溫氣の神物あり。萬物日の光溫二素の發輝稾篇齒牙にかけて論ふに足らずなむ。未離東海陰先伏と潛庵の吟咏は理りに叶ひて面白く。大陽は　皇大御神の御生產の前より火光いありつるも。御生質のまに〳〵大御身に御光りの備ります大主の君臨ましゝより。光りのいやまし盛りになれるい。此を重光とも稱すべきか。詩に傾業戴重光又靈光出海騰重明等の句あり。よく吟し出したるやうにはあれど。例の支那流行のからさへづりのたまさか當るものなりき。それはた堯の時十日幷び出つの故事よりとせば。きくにも足らぬ事にて。周易てふ書に帝出于震と。天帝の座す處を大陽とす。易書いさすが古傳の殘れる事もあれば。心を留めて可見ものぞかし。其智如天と稱賛する堯帝すら。唯天爲大唯堯則之とやうにおぼろけにいへるは曆數を推す基本とするに過ず。されど彼國は少彦名神等の開き給ふ國ゝしして。日神の扶桑に生產する故實は傳へなから。早く其傳へは失せぬるゝや。況哉其外の國は。後に開け德を後にせるをや。されば外國の學士が。大陽は一の火塊とのみ見定むるも深く尤むるに足らぬものなりかし。されど皇國にい神代よりかく道の基礎明に史の傳來正く。備り足らひぬるを悟り得ぬ徒は。一般漢洋の熱に浮され。固有の神理を忘れ行きつるも。却て歐米の究理哲學指激の爲に稗益を生じ。光を起す時機とこそ成りにけれ。天晴れ皇國人たる者神蹟を探索して自らなる道と理とを發輝し。萬國に輝すべき神慮の存する事を夢忘れす怠らすして其の德を伸張すべきなり。

されは神道は雲をとらふるが如きおぼろげなる道にあらず。また右を指して左を令知る囈語なるものにもあらず、比喩にも及ばず近く知り易き道にして。日向ふ現象は眼の前に炳焉たり誰も平旦に夙く起いでゝ觀よ。金雞の一聲に山河みとりに明け離れ。横雲の隙白み行く朝風に。いと涼しくいと快く。曖々たる旭光の榮昇るに

あひて。心も軀も爽快に一點塵埃だにある事なく、一抹の固我の靄も消えうせ。冷然として行き心にかくろき邪のかけなく。天眞爛熳景色の溢るゝを平旦の氣と稱す。そも此の氣の中に滿るを造次顚沛煉りにねり凝りにこらし。順序不違して不厭不屈常とし成たる時は。自らとはがらかにさゝやかに成り立て。他の此の氣に觸るれば。料に疾病も憂患も消ゆゆく物ぞ。まして白刃を踏み爵祿も辭すべきは更にも言ず。王侯も富もて淫し威武もて屈す可きなく。優游自暢神域に登壇するも。ひとへに此の氣の日光の照育の化育するにつれて成り立てる神の氣嘖なり。是れ此の實象は皇道發露する眞像にして。爽快なるこの氣象の外に別に理象の有る事なし。理象の他に可求ものなければ。此の氣象を得々維持伸張をるを神の道と稱す。かしこくもさゝやかなる神氣にあひてはひとり葵藿の心を傾るのみか。萬物蕃息の御惠を奉戴するは天地間自然の理象自是著明の憲章ある事なければなり。賤の男ならねらかなるにめでゝは。思ふ人に參らせむとの心ろ堰あへずてなむ。希臘の賢者と聽へぬるダイヤコラスなる人は。常に大きなる桶を携帶し。其中に起臥し日光に暄(ヌクトマ)るを。越なき樂しみとして世を過ぬるが。或る日其桶を修繕に掛り居る時に。歷山大王のそが日表に立てのたまはく。聘に應しなは汝が望みに任せたらむと有るに。答つるに。大陽の光線を賜へと言つて桶を負擔(ニナヘ)て何處へ行しとかや。げに大陽の光線を賜へとの一句の至味は。色をも香をも知る人そ知る。是の氣勢に神習ひ從容として世に立ち。宇宙間皇國の皇國たる所以を發輝表示して。富國强兵の實を擧げむこそ倭男兒の本領にはありなめ。玆に聊か續きて言まほしき事は幽現の事なりけり。幽現の理は三段に區別せらるゝ事なり。幽と現と又其幽現を一にするとにて。造化大神達は天地の基ゐを開き。總ての神性を化生配賦し給ふなるを幽と稱す。抑も質ありてこゝろ素より質も可成ものなれ。さるはこれ物を生むの理なる可きわけなるを以て。諸册二柱大神に寄さし奉り。修理の功を遂げしめ。幽現を兼ね御たばかりはたらき給ふを。幽現兼備と稱す。物の物を生ずるを現と稱す。この三區別の其一期に際して。造化大神は最も其大根たるべき元素を作り。其二期に際しては。其成業を諸册二柱大神に讓り。二柱は眞理を受け繼ぎて生々化醇せさせ給ひ。產のいや果てに。皇大御神を生產ましかくて　大御神に萬の統治をよさしまして。功績を遂げ給ふ物なれこそ。造化の元神達は御名のみ傳りて。其の御事跡は　皇大御神の大權中に含有せられつゝあるものなりけれ。さてこそ神典に天津大神等は獨神成まして御身

を隱し給ひきとは云へるにや有けめ。第三期の現とは。人を始め萬物の現世に在る限り。目擊し得らるべきは即ち現なり。されはにや幽現兼ね備ふるを神と稱す。大御神は申すも更にて自餘の神に坐しても。神運靈機の活動を自在にし。如隱如現洋々乎として天地の間に不坐る隈なく。巍々乎として仰けばいよ〳〵高く尊とくて。其の仕業の現世より伺ひ知り得ざるを云ふ。就中　皇大御神の如きは神靈により化生的の御分身に坐しませば。御いさをしのすぐれて尊く坐しまして。洪大無邊の御盛德は稱賛の及ふ可くもあらず。また御生質（アレマシナガラ）にして光華明彩六合照徹の御稜威を備へ給ふ事は。如何なる神も比べ類ふべきふしもなきは論もなき事なるが。天地をさへ構造し給ふ。二柱御祖大神の御盛德の御上にすら。いとゞ驚きいたく悅び給ひて。如此珍の御子を生めりとの稱賛あるにて知られたり。是はた御祓式の至誠に造化の大神の御魂の成り出で給ふものにて。其神蹟は下條に述ぶるが如し。然れば御祖諸冊二柱大神の荒々に修理固成し給ふ。地球を始め。萬國も十分には成り不整（トヽメヾ）前に。　大御神の天津日の御國に高御位定めまして。そが光温二素の鎔造に掛りて成り調へる御恩賴によりて成り出でざる物なく。洩るゝものなきにても實理現象に徵して。日向ふは皇國の標本たるや明晰なり。げに幽現兼備の最上無比の　大御神に坐しけり。かゝれば其御正統に坐しますのみか。殊に　大御神の鐘愛し給ふ皇孫の御上にはいとしも尊み敬て萬の事。また大御身の取扱ひの點に於ても。日の向背を謹み給ふは。上古よりの國風になむありけらし。されば幽とて不可知とひたすらに片付べきにあらず。眞理の有なむと思ふ程の事は試に推し究むべし。（支那の昔盤古氏の眼の日月と成れりと稱し。女媧氏石を練りて天柱を維持すと云ふ論ひ。又外教の何日には何を造り何日には光りを造るとやうに想像に推量なし。所謂見て來たやうの詐を突と云ふが如きの寓言とは雲壤のけ去めなり。）現物も幽中より生れ成り出で。現物もまた幽に歸る事は諸子學說同論にこそ。これ有聲は響き。有形は影あるが理にして。生者寄也死者歸也と云ふもさる故なりかし。造化大神の御事業は。人の知り得ぬ上に神機を運し給ふ御稜威の深遠にして。無聲無臭言詞の傳へ得ぬものにぞあなる。扨又　大御神は大御祖の諸冊二柱大神の御業を受け續き坐して。現幽全備せさせ給ふ神勅神業を基本と建て給ふ故に。歷代の聖上も亦是に法りて祭政を行ひ給へり。後世（朝廷の御政制高天原の神式に法り。神幽の大勅

を確守し給ふいと著しき祭祀を初め。万事すべて神理傳來に基因し給ふを云ふなり。祭祀を分けさせ給ひて殊更に嚴重にし給ふ御手振なるに。其の大御祖の御祭祀の見えまつらざるは。造化の大神等を日の大御神に籠めて別に祭らせ給はぬにや。是誠に幽現一體に總宰せさせ給ふ理由あればなりかし。そは　神武天皇の御卷を繙き視よ。天皇の御稜威に抗ふ奴どもの有りつるを。日大御神の葦原の中國はいたく喧きて有けりとて。神靈の御劍を天降し。又は八頭烏遣して導きまし。はた祭器を造らしめ給ふ等の神業は。幽現の隔なき神蹤ならずしていかでかさあるべき。以て幽現を一体に兼備し給ひたる事を了得すべきなり。さらば道理は無形なるも日に向ふ方針こそ明らかなれば。なり。されば

皇大御神の憑托け給ふ和御魂　伊勢大御神も。一端日向國に天降坐して。後に今の五十鈴の原にませまつれるも。國の最中にして其の天津日の直指東海の國に移り給ふ幽契は。萬代動かぬ神蹤とは知れたり。後世吾々神孫なる者は。天津日に向はむをり心に加黑き隈を置かず。偏に伊勢の大宮を深く畏み敬ひ奉齋べき事になむ。是を惟神に萬の物の性情の向ふ所の標準と成すと言ふにはありけり。

○第三章

皇道は性情のまに〳〵成立たるを釋す

夫れ人の性情のまにま。親祖を孝敬する事誰か之をいそしと愛ざらめやも。己が子孫の安寧を祈る誰か之を惡しと咎むべきやも。茲れ茲の情愛なる靈魂は皇産靈大神の産び與へ給へる物なるが。和魂荒魂幸魂奇魂の和み睦み。程よく釣合ひ調ひてこゝろ全きものにはあなれ。今性情知識感應と分配りて聊かそが大概の要領を述む。そも和魂は正しくさゝやかなる能且良なる性にして。萬の生物に差等ある事なし。荒魂は乃ち情につれて本領の和魂を助け。化醇生々の德育を安く全からしめん活運をなし。天授の神靈を輔翼し功績を擧くべき强性なり。幸奇の魂はなほやに志すまに〳〵應用して。天理の有る處を知らしめ。萬の務を開くの媒介者にして。智識を練磨する料の神授なり。されば心正しければ應響も亦正しきなり。例へば影の身に

伴ふが如し世に卜易家など適と不適の差違を分つ者は大概此ゆゑなり。誠一なれば違ふ事なきは論をまたざるものぞ。かゝる奇しき働きを成をもて幸ふ本領なれば。神の奇魂幸魂と名け給ふにそある。此に國体の基因につれ生物住食等の養血に依り。肉食穀食國の情に差異を來す事のあるは下篇に詳論す。變更を生ずるものなるが。情のよく和魂の本領に順從し。幸魂奇魂の感格を甘らに廣らに純粹に應用して。動て墨繩の直きに適當するは所謂情の本體にして。其喜怒哀樂の惟神なる則に契合するを聖智と稱ふにはありけり。誠の辭義の解釋も約り是なり。支那聖人などの從心所欲不踰矩。又曰以大事小樂天之道至德之譽あり。聲爲律身爲度如き聖哲は。苦慮安排をかり來らず。渾圓として左に提げ右に傾るも從容道にあたり。與性終始神調して天眞爛熳たるものなり。總て快恬ならざるはなし。誠者は不勉してあたるると言も此に外ならざるべし。茲に情愛の發達と。共に情の勢とも可稱ものあり。俗に見識といふ是なり。人は萬の物の長と否とは知らねど。自稱して萬物の長と誇稱する識見を有するが。自からなる勢力にして。生物中牛馬雞犬必しも牡にして牝の下にかゝみ居る事なく。愛情と共に雄の勢を持たるは。強へきことならぬをや。我創世の時。男神の女神の言先たち給ふを。不幸と咎め給ひ。更に改め左右禮節を守り。此度は男神先唱ひ女神後に和し給ふ。正に愛と敬と同時に振り起りたる國體にて。所謂樂て不淫。和して不流。情に發して禮義に止ると。稱ふ可き倫理の神則と顯はれ來ぬるなり。そも世に見識と稱する矩模も全く情の勢なるが。開業成務に關してはそも〳〵大なりと可謂も。聊けたりとも忌みきらふふしの心に一物ありて。進むで省りみざる僻しあるはまた畏るべし。さてしも須佐之男大神のはじめ荒魂のすさみ給ふや。其のかみいたく清きを好むの僻の進み過きぬるが。小康小清を事とし給ひつるにて。大道をそこなひ給ひぬれど。夫れと引換へ大御神の友愛憐恕の御情。又或時の御怒のさまなど萬古の龜鑑たるをも思ひかはしてよ。後ち情の本に歸り御心も安く廣らに眞の清地に透徹しずが〳〵御心の潔よく成り調ひ給ひ。夫婦の情子孫の榮を萬代ゝけて垂統し給ふは御歌の風情を伺ひ奉てはまた聖而不可知の大神の域に登り給ふたるものから。撰者の此に至りて此大神と大書したる神傳の殘りたる嚴筆をも尊重すべくなむ。強たけれと因に言むに。古人有言人は無過を不爲大改過を大とすとかや。うのかみ御祖二大御神の妖妹至愛にすき怪しき御子を生産し。又穢れに觸れ給ひぬるを明め給ふは。人は過ち無きを必とせぞ。たゞ過を一速に改め。業を開き務を興すべき物なり。情は兎にかく過不及のぼだし勝なれこそ。後來の戒めと。神蹤を書き傳へるには有りけめ。天晴れ天地すら四時の序次寒暖に過不及無きを不免るも。萬斯の維持結搆には更に窮乏ある事なし。御祖二大神及盞素雄尊の一時過不及有せらるゝも。その改るや盛業開務し後來に垂統し給ふ神慈神祥は。萬代に流れ溢るべき古史の顯彰なり。我が神

典の爾に隠し飾る事なきは。天地の書籍なれば。なりと伺れていと尊し。後裔の爭を鎭め給ふ神量とて。天地の大主宰を定め給ふも。神人性情の永達に安寧なる本情に基き。大主宰を立て給ふにて、情は永安を主とする物と覺るへきは。大御神の弟の命の荒魂の進みを容恕し。其本質に欲令歸を待ち給ひ。暫し許し置き給ふ神恕の深き厚きは。果せるかもやがて清地に到りて後裔の大安至道を悟り給ふ。即彼の八重垣つくるその八重垣をと詠し給ひぬる御歌のとじめを味ひ。性情の本有溢れ出たりしを知られてなむ。後世情に純雜混同するより。碩儒の聞有る人々の論述も。神授なる本義を誤り或は辨へぬが多かるへし。哲學者の如き性質の源質を論ずるに。多くは萬事善惡名刺おどの作行を皆已を利する料のものと認定し。深く德義を行ふを利益心の結果となしたるは。强て勉めて行ふものと見立たるに外ならず。蓋し形色も性情にして告子氏有謂曰形色天性也と孟軻氏も又曰く唯聖人然後可以踐形又曰舜明於庶物察於人倫由仁義行非行仁義と說きしは。よく言ひ當てたる言なり。神賜の性情にして眞理の備りたる概論は誰も知れゝば。利已など私心を挿みて說くべからず。既に利於仁義して勉行すると極處を論ずるが如き哲學者流は其性中已に混雜にして純粹の情ならざるを顯露するの結果にして。洋風の君臣親子の情に乏しき所以なり。湯武孟荀の如く賢者と稱するも民の塗炭を救ふのみにありて。後に天倫を釀亂する媒と成りしに非ずや。假令美を盡すと追賞するも。强ち善は盡したる事と誰かは夢にも見るべき。嗚呼口には如何に

說くにもあれ。其形踐を見たらむ時は。影の如何で直きを望むべけむや。見よ彼國の成行を。ルーソの自由說の勃興するや。忽ち妖雲の覆ひ侵し卷き來り。人々自由利己心生長し。耶蘇の博愛平等無節操無秩序の論に傾き。遂に爭奪を釀し一日も軌轢の止なく。たま〳〵患る者ありて君權を立て永持する論者あるも。血統專一に居らずして百年の安を保つ能はず。大權は多く議員臣民の手に墜ち。君主半は虛位中にさ迷ふもの丶如し。人民は己れの存亡の極に至り。身を以て國に殉する兵隊の外は。到底勢力の立たざるが如きは。習のあしきには素よりなれど國の基礎確定せざりしにありけり。飯食養血の運用にもあるかは知らねども。之を要するに多くは國初に神聖なく眞則を辨せず。惟神の性情の本源源質をも不了より。雜情未開の進步をなして漸く性情半純の域に到達したるものにして。皇道より之を見たらむには半開明と言はざるを得ぬはいと憐なる事になむ。皇國は不知不識も　天祖の冥助により。君臣一体の孝理にさとく純粹の情に率由するより。君子國の外評を博し。浦安の名實を得て覬覦する惡熱に侵されず。萬世無窮に安寧なるは。皆盡く創制の大御神達の永遠大安の御恩賴にあらざるはなし。豈喜はしき極み樂しき限りにあらずや。次に個人的自由主義の盛なる雜情野蠻の國たる支那に於ける。近來尤も甚しき佛國革命の行はれつる國柄に於ける。利己主義の盛なるより。英雄の民を塗炭に救ふを名とし。姦智にそそのかさ

れて。時々革命を事とする如きは。日前一日の小康を求めむとして無窮の大安をそこなひ痛く國安をきづゝくるものにして。聞も悲しく言も穢しきものぞかし。夫れ一たひ野蠻の雜情に馴れ染みぬる時は。眞の神理は闇く成り行き。倍々天賜の性情如何なる活潑神機を成す料に神授せられぬる理象の。明けく開け行く時運は無かるべし。あなうとましき事ならずや。正に是れ原情の安康を求むるの情勢を不悟して。約り目前に利ありと見認むる時は。忽ち博愛平等説をも忘れ。腐たる靴を脱捨るでと忽ち後害を顧みずして。激動大過し欲の嚮ふ所。何事も作さゞるなきが如き傾きを成し。血は川をなし骨は山を作るの慘情を生し。湯武すら己れ獨り得たり顔よ。後世以予恐爲口實なぞの言を容易くするこそ片腹いたき限りなれ。見よ〳〵小人の自ら一悪をなすに當りて。初發の念の小安を求むるより差の起りたるも。其際自らも認めて善き事をすとそ思はざるべし。情の本來を熟視せば小康を求るにていい。其基源の不善より起りしにあらざるをも酌して知るべし。其の故は彌益に忍び〳〵潛み隱れて作すにても著るしきものをや。これ善き事に非ずと自ら認めぬるものから。闇所に働くは幸奇御魂の天授知耻の情を

視るに足なむ。罪過となるは大康と小安の分るゝ岐（チマタ）を行き違へたるにして。寔は可憐事なりかし。そも〳〵人の性情は良らに安きを好み永遠に可望は勿論にして。實は目前の小利に安せむがために。私欲の動くは智識の蒙昧にして奇魂の幸を自ら失ふものにして。豈賜の咎ならむや。賢哲孟軻の性善の説を立てゝ四端の發情を論標せしは。支那の大てき物にして大道の濫觴を探り得たりと可稱も。國柄の本據確固ならず。慣習より君臣の際を語る只に一の義を以てすと言の外なきぞ如何にせむ。襤褸の其綻を繕ひ覆ふ可きかは。寔に憐むに堪たり。皇國は本末一家の成立にて代々繼續し。祖々の遺志を心として其の誠情を盡せり。別て臣民と稱するも本來は諸冊二柱大神より出て來り。君臣序次は即て本分幹枝の實理たる名實を存せり。道義を論するも名分を正すも。天地の氣象に照すも音義形象に比較するも。一理貫徹して性情に基くべきの理は。諸冊二柱大神の我等祖々の親愛の餘り。兄弟墻にせめぐ患を除むと創世に於て。遠く深く諸神と神量り成立せ給ひたる道の緊要なるものより。反覆重疊して云へるなむ。宜しく其子孫たる者は宗家を翼賛し忠勇を盡すの

至情は血統上奪ふ可からざるの神則なるを銘すべきなり。是れ遠く萬世我々に普く及ぶ神慈深愛の性情に源基する惟神の道なるを。君臣有義など其宜しきを推量りて進退すなる外國の道は。痛く違ひぬる所を一洗して。今より神習ひ眞秀の國人たるに耻ざるこそ願しけれ。式の祝詞中にあり天津次手のまに〳〵瑞穗の國を安國と知らし食せと勅り給ふ。安の一言は。神人固有の性情はしも長しく安きを企望をるを萬古に見貫き。元根を知し食して天縱のまた〳〵に引き立て其が本體を墜さしめずとの神勅にぞ有ける。或人問けらく御說の如くならば。荒魂は則ち情にして善きも惡きも兼たるを。如何で產靈大神の授け賜ひぬるぞやと訝しみぬるも去事なれば。いてや其ゆゑよしを聊か論らはむに。或曰性は天神に稟け情は氣質に稟ぬと分け說くは。情に過不及有り勝なるに眼を傾くるものから。情は性を補祐縱橫する働を成し。その過不及の誤りを奇幸魂の輔助する神賜なる理を辨へぬ非事には有けり。夫れ情の右にも左にも働きてこそ靈物と稱ふなれ。善の方にのみ活動したらば善柔に墮落し陷り傾き。物を開き務を成の業は絕に果て。人界も無用に屬し。無我境裡枯木竿頭暖氣なきの觀を呈出し。素より智愚の別ちもなく。玉石混同しぬれば。善と名く可くもなく。天地未開の混沌たる創にひとしくして。神わざもまた止みなむ。此に生物にして是の愛欲苦樂の情を賦與せざるを得ざるは。神務の然る理と知るなり。されど惡を作せよと授け賜ふにはあらぬをや。此に情の過不及を輔祐せむと。靈智なる幸奇魂をまた佐使として添へ給ひて。私欲私愛の末遂に果すべきものならぬを。令感知るための用意懇切なれば。其天神深志の辱けなきも窺れていとも〳〵恐し。譬へば耳目雙ひ有るも。一途精心に掛け視聽するをりは。両つにて視聽せずして。聽明なるは一意に凝りては一方を去り棄るゆゑなりかし。人に男女剛柔あると一例にして。諸色を具備するこそ眞の寶玉なれ。況哉世に善とする處未だ必しも善ならず。惡とする處も强ち惡ならず。故に中和の正鵠を射當るの要とするの聖訓あり。皇國の如きは。一條簡易の惟神なる眞理の存する有り。萬斯不變の神傳有りしも。埋みに埋み隱れに隱れたりしも。今方文運の盛昌萬國哲理の大集する神量の時機に會て。和魂荒魂幸魂奇魂の。神授妙訣を分明に理會し得て。此にそが區別按排を氷解しなば。眞情の本領を了得する蓋し思ひ半に過ぬべし。顏淵の孔子に仁の道を問ひしに。一日克己復禮天下歸仁と答へられたり。克己とは小愛小利に引されぬ義。復禮とは視聽言動天理に適するの謂。さて仁は主名にて迎意して之を言はゞ愛の理と稱可きなり。愛は情の尤もなる物にて眞愛を天理に契るものから。眞愛の道い神人ともに賛助するは疑なし。是を歸仁と述べ釋れた

るや論なし。情は産靈の大神の和魂と同く授け給へるものにて。更に惡きものと夢な思ひ違ひそ。性情が一朝の欲を忘れて。永遠の安きを嗜む理りは。父祖の孫子の料に身もたなしらず勞動儉勤し。子孫の安康を求ると一例にて。諸人が常に目のあたり見る處なり。人の子たるもの祖々の志を。須臾の間も忘れず。生時には身を致し。亡(ミマカラ)後ては志を繼き。報本反始するはすなはち精情より發揮する大孝なり。此れ是の精情の則りは。天授の性情に基くものにして。諸册二柱御祖の。惟神に變らぬ道を人の眞心に衝立給ふは。安國の實体世業の實狀なり。かゝれば眞情は孝に顯る事を論はむに。古。神武天皇中つ國御平定の後。逸早に立靈疇於鳥見山中祭皇祖天神(是ぞ報本反始の孝敬の盛典にして。皇道は祭祀を重するの一大原則なりける。)詔曰我皇祖之靈也自天降鑒克助朕躬今諸虜已平海内無事可以郊祀天神用申大孝者也とあるこそ。一方に日に向ふ皇道の世に顯彰せるものなれ。其御祀を輔翼しその戰役に服從して身もたなしらず勤めいそしみ給ひし。神々の。我々等は子孫にして姓氏錄にいはゆる神別と皇別との分脈なる事は論なし。祖々の忠勇の名實ある歷史も。即て其祖神とます諸册二柱御祖の御勅を奉戴し。日の

大御神の功業を翼賛し來れる道なる故に。其子孫が今日なほ天皇に致身に義勇奉公すべき眞理は古今一貫にして甘し國柄のしからしむる所。そも此道や眞情至孝の大本にして國體は神道に立ち。神道は孝道に基けり。婦の夫道を扶くるも。其夫の忠孝を全からしめむとなり。弟の親愛朋友の信義も此の孝道を根源となす。而して此の孝道の成り調へるは。祖々に向ふ勤め即國體を萬世に鞏固ならしめむとすると一義一理にして。上下同体君臣一氣の名實を盡すは。祖々の志を繼くの孝より出つるものに外ならず。彼國の如く君臣は義を以て合ふなどゝかり初に作りたる道にあらず。(外國はえげ〳〵討罰革命の行はれて。姓氏血統の繼續する事なきより。君親一理なる道を失ひぬる爲に。義と稱し君臣となる一時の約束の如くなれりければ。少しも心に不叶時は。寇讐視し是の日何日か亡むなど。口に憚る可き言を容易く言放ち罵りゐやなくいといきたなき國風なりけり。能く〳〵思ひ味ふべき事なり。)されば皇國の道は一言以て之を蔽ひなば。即孝と云ふの外なきが故に。他の國情と相同じ。と心得るは甚(イトイト)非なり。我か所謂孝心は。天津日に向ふを標準にて。余々の太祖諸册二柱の大御勅を御則とするが。上にも述たるが如く緊要の事なるをもて。重ね〳〵煩しきを厭はず云へるにこそ。坤輿を固成せられし倫理標柱と可稱き瓊矛を以て。日

大御神を奉送るに始り。猿田彦大神の天の八衢の問答。大御神を奉敬し。天孫を日向に導き。御身は伊勢五十鈴に鎮り給ひ。後また日大御神を奉迎る。至大の幽契を盡し給ふ狀は即ち天地の眞孝に顯れ。神武天皇の日大御神に大孝を申べ給ふ祭祀にも彰然たり。單純なる本質の性情のまに〳〵。神道は　天津日を標準とし原則とするが。神理基本なるに依りて。諸册二柱大神の萬古一貫に視察し給ひ。かくて神人性情に基き。日大御神を宇宙無二の大主宰として。八百萬神に敎へ計り。萬世の下も軌轢なく。彌常しへに民安かれと統べ治め給ふ。血統連續不磨なる大典の基礎を開き。安國と知し食す無窮の神量。祖々に親む至情。即ち孝敬は。皇道の標本。神授の辱けなき譬へむに物なし。或る人。翁の性情は平安を基素に立てられて釋れつるも。哲理より論ひなばいかでかは。人の安康を願ふは。やかて已れを利するに過きじと云へるは。そは一通り耳近く聞く時は去る事のやふにはあれと。心を潛め古史に徵し思ひをこがしてつく〳〵考ひなば。君親または子孫のために勤むるは。天禀の性質に備るものにして。助け長するにもあらず。脇よりとらかし强るにも非ず。愛敬の赤心は眞情より面目に達するものにて。外より掩ふはむとするも難き業にて。塞ぎ止むべき物にはあらず。敎はその固有の資を導くの外ならざるなり。家隆卿の歌とて「おほかたの秋のねざめの長き夜も君をぞいのる身を思ふとて」と咏せられしは。徒人の情をひそかにきためられたるにて。彼の哲學者流の底樋ゆく心の流れと通ひぬるを。千載に掛けて見破られたるにこそあれ。天晴楠公の家をわすれ身もたなしらに。大義名分の本性をはぶらさず。家産を費し封邑を枯らし。山はさけ海は淺せむ世にも固く忠を執り守り。子孫におほし給ふを。いかで利己主義となすべき事かは。此事を讀る歌に「身はふりぬ行末とほく仕へよと子を思ふ道も君をこそおもへ」とありかくてこそ雅味も發揮ぬるものぞ。管見の人より見たらむは。性情は惡とも利己主義とも思ふへけれど。なか〳〵にまたき說にて。そはたゝに眼前なる理りに惱むものにして。惑ひもまた甚しと謂つべし。そも仁義は。性中に備れるものから。その仁義のまゝにより行ふにて。仁義を利のために行ふにはあらじと。孟軻氏の說れしに心を注きて味ひなば。自ら了解すべくなむ。性情に存在しぬる靈機を。序に聊か論はむに。皇典に和

魂荒魂幸奇魂と。三種に區別し。和魂は本性にて良能を備へ〳〵さるものなるが。荒魂は進取の勇氣を帶びて。務を開き萬物の調和に誘れ。立ち進む物なるが。いと怪し。荒魂の活動によりて。惡き事をも助けぬる奇魂の働よ。いとも止む事を得られぬにが〳〵しきにもつれそひ。心に心よからずとは此事なりかし。されと善き事業には。いと心よくさやかにたち添ひて過ちなく。業を遂げしむる力を加ふるは。神代より事實に徵して可知ものぞ。事に觸れ惡き事は深く耻ち。自ら隱すべき智識を備へたるはさすがよ良知とも可名にて。奇しき御魂には有けり。此の理は大國主命の自らの奇魂との問答又仲哀天皇の韓國を討ち給ふの條にも言ふへし。此の三種を惣稱して心と云ふ。コヽロの釋は下條日の御光のところに照し視るべし。さて和魂と荒魂と精一凝固して。奇魂の幸によりては。大神達は造化の妙用を興し給ふは申すも更にて。神をも吹きうつる氣噴の狹霧に產み給ひぬるは。至盛の御稜威とひたすらに貴く恐むべき事。言理の及ふべき限りにあらず。神典を繙き奇しき御働の坐すを不信輩は。到底神典は知りうる事難くぞある。易てふ書に天地絪蘊萬物化醇とあるは。生續の義にあらすして天神の萬物を造化し給ふ理を說きたると合せ。また器も道道もまた器等の語より味ひなば。理り丈けは聊か胸つくべきにや。さてしも此の荒魂のすさむ飲食用料に關して大なる差を生する獸肉と穀食とに依る獸肉の熱また濁れる氣血を起す不知は有る可からす外宮の釋に合せ見るべし。さて怪しきかも。三魂調和

力の働きにより。種々の惡念と凝り。また戀ひ妬み甚しきは。生ながら浮れ出て。遊魂と變化を成すなどは。左氏傳を始め種々の古書ども。よも炳焉たり。それと換りて本有の三魂を。無垢清潔に磨き鍛煉し盡し果なば。精氣物となり幽魂變を現し天翔り國翔る事も能すべし。また坐しながら山に隔てを置かず。海川に船をからで渡り。千里の外まで見さくる通力ありて。世の中の事憧々と胸裏に往來感應しぬるを。神々の御上とのみな思ひそ。人は神裔なれば性理を明め。身を清め心の金木を本刈り切り。末うちたちて祈るの久しからば。影の形に從ふが如くその程々に應映感通の無らましやは。中庸てふ書に能盡人之性則能盡物之性。能盡物之性則可以贊天地之化育。云々又曰禍福將至。善必先知之。不善必先知之。故至誠如神とあり。萬古に卓出する聖人のいかで後生を欺むかんや。かゝる學は佛理哲學のみならず。孔夫子も時ありて機に應し。性と天道とを談せしにこそあれ。只其說の高尙にして蘊奧。子貢の才學英敏を以てすら聞き得るに惱むと言ふが如きは。言論の外にありて默識心通すべく。人々をして求めて得せしむると云に外ならざるなり。されば身にも心にも少し

の穢をおかず。こおろ〳〵自らに煉り凝し。清操一貫。勉めて不息る時は。素より心は神の舍なれば。虚室生白の諺にひとしく。などて心の底樋ゆく水とて。曙のほがら〳〵と明往く空に光を生せさらめやは。かくなり行かむも奇魂の幸々かゝる靈しき神訣理性は。たやすく徒人の耳には入り難たくあなれど。驚し言はざるもほいなければ聊か因に述るにぞあなる。さて立歸りて和魂奇魂荒魂の三魂の神より受る理を約めて一言にいへ放たば。大安息なる事を永遠に保合せよと授けたまふに外ならず、故に御賜物なるよりたましひとも名づけしなり。人々君と親とを愛敬し。夫婦契和し行くべき道を一身に備へたるは我國一系の氏族にして實に樂しき限りにあらずや。「子等かため身もたなしらにいそしむは神の御魂のふえにや有らむ」しかにはあらじか。

予嘗て神武天皇の御紀を繙きて。皇祖天神を祭りて大孝を申ふべしとある條に於きて按らく。本邦特殊の神祇の大典は即孝道を儀式上より現示せりし大禮なりと。故に彼の漢籍に所謂る山川原野を祀るの類にあらずして。血統上の關係より起りて。社會の秩序を明にし上下の制裁を正しくし。道義的の觀念を強固にするものにして。父祖に對するの孝も君主に對するの忠も。古今一氣上下同体の種族なれば。忠は即孝。孝は即忠なりと云ふべし。今山本比呂伎翁の本論を見るに。予が意と相互に類似するものあり。よりて聊か玆に奥書する已矣。

明治廿六年九月廿八日　　逸見仲三郎

凡天地の間感情より貴く且つ盛なる物は蓋しある事なし。都て萬物の成立も大なる功も。魂幸ふ神の氣噴になり出でゝ。人の感情に發達を促し得らるればなり。そも感情は愛を專らとすなるが。そが端緒のいとみるべきは。親子男女の交情より越なきものはなかるべし。されば此の親愛よ。紫のよかり色いよく匂ふと否とによりて。麗はしき花とも咲いで。また醜き實をさへ結ぶものなれかし。かくて各國の榮枯盛衰よりして。社會にいかなる狀況を及し。如何なる變遷を與へたりと見たらむより。きはやかなるはなかるべし。そも外國創始の情勢は。一時の榮花を全ふするに止りて。遠く厚き至情に非ず。約り薄弱輕浮と云の外なかりき。皇國

は橿の實のひとり拔でゝ天地の初諸册二柱大神の相愛し相和し給ふ御心の綻ぶると同時にそが親愛を萬古にふさね保たしめむと神はかり謀り天瓊矛を標柱と下津磐根に太敷たて左右唱和の禮節を糺し千代を振ひて感動を與ひ給へしより産の子の八十續きひとしく直く順致涵養せられ古今に相通じて本に報るの志厚くなむあなる此道哉發しては祭祀孝敬と顯れ政綱と繫れ遠くは天傳ふ日向の典故に應じ近くは神賜なる性情の大源を流暢すなると是の釋言なむ恰もよし是の粹然至醇なる感情に咲き匂ふ花實を一貫に集めて三津の大綱と世に引き渡されたる師翁の文は若草のいやめづらしくかも

村山惣作謹誌

○第四章　外宮の御神德を釋す

内宮の大御神即ち　天照皇大御神の天地の主宰のおほん德化は豫め上項に言ひつれば引續きて御名の釋をなすべきなれど なほ後章に委しく釋す可ければ玆には暫く置きて まづ外宮に齋き祭れる豐受皇大神の御傳を明辨正記せざれば論趣の順序立たざるを以て聊か其の御傳今より云ひつべし そも皇孫瓊々杵尊の此の外宮に鎭り座すは天上よりの御掟なれば素來しるべきことわりなれど 何つ頃よりか豐受大神と同宮に合せ祭り來給ひつらむ は確に知る由なし 又此に造化元神を合せ祭るや否やとさき竹の節も高けれども 予が中年の頃の考より一渉り言はむに 彼の幽界の造化元神達は 皇大御神の外宮に孝敬祭祀し給ふべき理りと ひたすらに思ひなりぬるが上に 彼の五部の書に或爲天御中主大神或爲國常立尊素より是の二柱大神は終始にして實は御一柱の御名なるが其事は他書に言ふべし。また元弘建武大亂の時に際して 神皇正統記を北畠親房公の著はされて 外宮は天御中主大神也との事までに說及ばれしを憶へば さる古傳のありつる事にや さて本書は皇室の宗祠に向ひて精忠の志現れて いとめでたしともめでたくなむ 此公の忠義をよめる歌あり 「刈菰の亂れ果たる世中

にふみ著はしゝ道の奥かを（此歌の下のとぢめはいかがと首をかたむけらるゝも能く思へは深く嘆息する趣ありて其世の普通の事にあらず今一層道の奥を探れば正しき原因ありと云ふ意を含めて結びたる趣になむきこゆる）また橘守部大人の稜威の道別とふ書に豐受大神は國常立尊なりと釋かれし由如何ならむ。さはとまれかくまれ造化元神を祭ると不祭とはしばらく置て。豐受皇大神は即御食津神とます豐受姫神に紛れなければ。今より一歩を進めて其神の御靈德なる御食の上に係る管見を述べむ。そも〳〵皇大御神の御食の上に取分け御心を盡くさせ賜ひぬるは。神典にも著く朝廷にも祈年祭、神嘗祭、新嘗祭、神今食祭、廣瀨大忌祭、久度古閑祭、等の式ありて。代々受け續き嚴に執り行はせ給ふ重き部分の祭式なるになも。豐受皇大神の御稜威御恩賴はよく知りうべき物から。なほ茲に或人の說によりて辨へおくべき事あり。そは　皇大御神すら此の外宮を祭り給ふ事に說きなせしは。是れはた例の外宮を重くせむとする餘り。皇典に　皇大御神の識神衣居齋服殿と有を。登由宇氣大神を祭つる事と見成たるにや有らむ。御自服を織り給ふにも。稻穗を聞食すにも。齋と申す事にして御祭の事と見むかたや穩當ならず。如何ぞや。（强て御祭祀の事とせば。高天原にて日少宮に鎭坐す御祖大神等を始め。此大神も相嘗に預り給ふにて。言はゞ朝廷の御祭に案上案下相嘗あると一例にして。專ら豐受大神のみの御祭とは。聞ゑ難くてなむ。）さて大御神の吾祭奉仕之時。先可祭登由宇氣大神宮。然後吾祭事可勤仕也と勅ふより。外宮の事を先と成すは。朝廷の御手振と成り來にしを。外宮は內宮に劣らぬ宮なりと云囃す說は。取るにも足らぬ事なれども。　皇大御神の外宮の祭を先と勅ひしを正說（マサシキコト）として考かふるに。そは治國施政の要訣を誨へ給ふ御勅にて。施政の一大要務は稼穀を珍重するにあるより。安國の基本。此より大なる事なければなり。夫れ衣食は。顯蒼生（ウツシキアヲヒトクサ）の一日も欠くべからざる首要の物なるをもて。其神靈の御祭を先にせよと。いとねもころに敎へ給ふなるべし。其祭を先に奉仕ぞ。やがて皇大御神の御勅を。重みする理りなればなり。古人の謂へる衣食足れば。榮辱を知り。名譽禮節をも守り勝なるは自然の勢なり。子貢が孔子に施政の要針を問ひたるに先つ富して然る後に敎ふ可しとあり。是聖門施政之序次には有りけり。書經の洪範は。あるが中にも天樞を闢き。地軸を貫き。萬理の皇極と持いつく書なるが。其の洪範の第三を。施政の條となす。其第一曰穀。二曰貨。（金玉布帛の類）三曰祀。四曰司空。五曰司徒。六曰司寇。七曰賓。八曰師。とあり。注に食者民之所急。貨者民之所資。故食爲首。而貨次之

食資所以養生。祭祀所以報本也。司空掌土。所以安其民也。司徒掌教。所以成其性也。司寇掌禁。所以治其姦也。賓者禮諸侯遠人。所以往。來交際也。師者除殘禁暴也。兵非聖人之得已。故居末也。是其の事を叙する。官を後にして穀貨祭を先に書するは。そも〳〵深意ありて然るなり。それ有司は。穀貨祭の事を執掌(ツカサドル)にて官々(ツカサ〳〵)を設くるも。その素は萬民の一日としも離れ怠るまじき。衣食住の祭祀より重く且大なるはなきの理由を知らしめたるものなり。夫天下を治るは洪業なり。推讓は秩序の大事なり。堯帝の舜に敎へ誡めて。曰允執其中。四海困窮。天祿永終矣。こはいと易且簡なれど。其旨の深淵にして萬理を統轄して不洩。治國平天下修身齊家の要道にして。又施政の方針中首一たる業務を垂示したる聖言たり。若し天下困乏しては。治國執中の主眼も詮すべなからむと言ふの外なし。堯は其智如神と人の稱する程なるが故に。主として此の言を發せる歟。誰かは之を感(カマ)けざらむ。民の如きい恒の產なければ恒の心なし。如何はせむ。施政の策略に富むも。餓殍に陷れば水の泡よして。仁政は先經界より始むと言ふ。實に施政の實際序次にはありける。然るに支那學者等は。徒に執中の道義にのみ拘泥して。施政の方針の首腦は理財にあり。穀帛祭の治國の首一なる處に注目の疎きより。徒善徒行に流れて。施政の原則を猥りにするものは。遺憾の至りなり。神國は起元　皇大御神の。御食津神の御

靈と。齋庭の稻穗を合せ添へ降し給ひて。施政の基本は專ら厚生に有る事實を敎へ垂れ給ふこそ。誠に至れり盡せりと可仰ものなれ。此を以て朝廷にも天上の御手振に習ひて。祈年神嘗新嘗等の諸祭を行はせられ。殊に重且嚴にせさせ給ふには有りけらし。されと其の源遠く其の務の大なるを知らざる徒は。穀帛は我に備はる天賦の如く思成して。過ぎ行く風情の常あるはいと淺まし。さて大長谷天皇は。御性の勝れて猛く坐しませど。神の御心にかなひ給ひて。其御代には種々の神敎を蒙り給ふが中に。皇大御神の御告曰。吾高天原坐氐。見志眞岐賜志處仁志津麻利坐奴然吾一所耳坐波。甚苦(イタクワシ)。一所は一柱と同義と。荒木田末壽の言れきさもありなむ加以大神饌毛安不聞食。故爾丹波國比沼乃眞奈井爾坐。我饌都等由氣大神乎。我許欲止(モトニ)。誨覺支。爾時天皇驚悟賜氐。即從丹波國令行幸氐。度會山田原乃云々。(中畧)宮定氐。齋奉始支とあり。倭姫世記には姫御子より奏上し給ふとあり。されば此姫御子は。四百余年歷給ひぬと。荒木田末壽ぬしは其理りなきを論せり。齋宮代々の事を統て。此世紀に物せしものにや。吾一所耳坐波。甚苦と誼ふと。先可奉祭登由氣大神と。御勅を合せて大御心を畏けれと奉伺らば。躬自らの御ために言擧け賜ふ如く聞ゆれど。實は後の代のため。上は皇孫尊を始めまつり。下は我々人民の末が末までもれぬ厚き御惠にぞありける。日本紀の一書に

天照大神の種々田畑の種つ物を得給ひて。是物者顯見蒼生可食而活之者也と。いたく悅び給ひぬるは。萬代かけて我等蒼生の厚生養料を得給ふとてなりけり。かゝる慈祥の深きを聞きては。誰か九天の極み九地のかきり手のし足舞ひつゝ。謝するに辭なくなむ。宜化天皇五月辛丑朔詔曰。食者天下之本也。黃金萬貫不可療飢。白璧千箱何能救冷とあり。一升の米を百圓もて買得ぬ。奥羽天明度の饑に相考へて。此大御神達の御恩賴を。夢な忘れそ。是ゝ反して外國の風は。肉食を主となすより。肉とは魚鳥を兼ね言ふに非す獸類を專ら指す下も準之自ら殊別の情質氣象を組織釀成し。果ては自ら天然の如きに立ち到り。遂ゝ施政の標目序次を殊わし。德性を尊ばずして。法律を主とする慣習の國風となり果にき。視ゝ今時の御國の形況すら。紳士以上はなほ禮義の涵養する所となりて。法律のませの料に不德義の事を成さゝるに似もやらず。外人は資性の德義は稀薄にして。無形の德教には とても感化し難きを。寧ろ法律を以て防禦せざるべからず。されば性質を養生する肉食は氣血を混濁し。嗜欲の媒介者にして惡き人多きより。法律の彌繁きを視て醜き國と知れたり 新に今その一端をも論擧らはむゝ。肉は血液を滋養す。牛乳は一時の衰弱を補ふ功を奏するも。畢竟性命の有無は肯て高價の藥に限らず。性命を保養する點に至りては。米粥粟麥等は無害にして日ならず補祐しうる功力に蓋し及ふものあらざるへし。視ゝ野味山獸に遠隔する僻陬の民貧賤の人の延壽の多數を卜する事實ゝ。經驗に富ざる人も自ら知りうへきならずや。又稻に「イヲ」といへる名あるは「イキヲ」生根又「イノチヲ」命根の略語と聞ゆればなり。橘守部主の飯しねと云れしは如何に有む。粟は眼精を滋養するは現に余の眼病の時。親灸して其功驗の炳なりしをしれり。麥は御ほどに成りて腰氣、疝氣、水腫、脚氣、病等に著しく驗あるは。世人のよく知る所なるべし。さて肉食は血氣を蒸熱して然も怠惰を生す。米麥は淡泊の如くにはあれど。しみらくに精液と膏血を滋養し。胸膈清爽腹背調潤し。天然の養生たるは火食をたち過食を戒むる仙行者抔の。肉を禁する中昔の人に更に短命の少なく。今の世ゝ多き者は。古今實際の經驗上に於て疑ふべからざるものなればなり。獸は人に比すれば幾多の智慮も短縮き事なれば貪欲暴獰なり。人の肉食を主とするものからそを氣血に胎し。轉てます〳〵濁暴烈欲のつのるを穢と稱するか。蓋し穢れし血を帶ればなり。橘守部翁の論に。毛鹿物毛柔物は獸の大小を云ふ。祝詞の文に常多くして今釋するまてもあらざるべし。其中に毛柔物は鳥を云ふと云說もあり。兎なぞの類に小鳥をも兼たらむ。但し皇朝の古獸を食す事なし。御獵は專ら武勇のため。祝詞の文はただ海山の物を數へ立て敬ひのためのみなりければ神前に獸を奠る事をさ〳〵なしと說れしは。實に理りに聞ゆてなむ。今按に神代紀に山幸ましき又神武天皇の御卷に以其酒宍班賜兵卒と有るはいづれも武事にて非常の事、混すべからず。或人の出雲風土記なぞの說を以て抗ひつるも。そは事と時とをわいだめぬ論に

て。信を置まは足らざるなり。然る故に之を食し。之を喰する事の主とする國人は。表に仁義を飾るも口に友愛を述ぶるも。己が情欲を逞くし狂猛殺を嗜むの性質となりて。君父を弑殺する其數の過多なる所以。霜を履て堅氷に至る戒め無かるべからず。今もし肉食を常とせむに。毛物の流行病に遭ひまた野に青草おきの秋まあひたらむ時は。如何にそを防く手たでの有べきかは。國家を憂ひ慮る上位の士君子は。一己目前の奢侈をのみ主とせずして。宜しく身を率ゐて一國總体の上に心を注ぎ思ひをくばり。永全の法策に注目すべし。茲に坤輿中自然の定則あり。天生地植の理を以て測るに。百機中。人耶象耶鹿耶牛馬耶勇まして義ありて猛からず。性質暢然たる氣象を帶ぶるに。之に反けて鷙猊虎狼の如き。肉食を貪る獸類は。呑嚙擊攫猛獰貪欲にして。仁信の性情に乏しく。互に相食み。天地生々の大德に悖り。覆載の至惠を毀損ふ。寔に痛しからすや。有生中かゝる異情の顯れ出るも。蓋し血食と穀食の殊別に訟へざるを得さればなり。今肉食の流行につれ幾多の道義の枯れ行くに徵して驚しき餘にかくあむ。心ある人はよく〳〵思ひてよ。彼れ口に一視同仁を口實とし。小ざかしく言のゝしるも。内には利己主義の勝をしめむとするにあり。彼の侵

奪の國々を視よ。初の手振にふり代て。殘酷の仕業こそいとあさましけれ。夫れ事に緩急あり。用に輕重ありあなかしこ。豐受姫大神の作り出し給ひぬる。毛の荒物柔物は。補益醫藥のためなるは申すも更まて。虫の害腐朽の穢を除く爲に化成し給ひぬるをわいためもなく。驕奢に費すこそ大まの神慮の慈祥を毀ふものにしていと易からぬ。まして人の力を助け耕耘の勞を補ふ牛馬は。この神明の項きに化出でたるけじめ抔をいとよく不考て猥りにほふり殺すぞなげかはしき。げに昔ならむには大祓の科に負すべき事ぞもにや。そも軍用の御饗。又は武器を兼ね。藥滋又は民の害を除くためまに収獲する事はとまれ。角まれ。そを犧牲として神に獻供るなどは夢々御國には有ましき事なりかし。御年神に肉を喰しむるを。御祖神のいたく御怒り坐して。稻虫を吐き散し給ふ。是も神饌にはすべからぬ事いやちこなり。身の穢は水禊て可拂も心血の穢れはしみら〳〵氣質を變し。風習と化して清き潔き神の眞理に歸らぬに立ち至る。寔に怖るべきの甚しきものぞかし。皇國は各國の親國本津國なり。一時の吹風に浸染せで。本礎を失はぬこそ緊要なれ。自然の活理は世々經驗に富み。然して始めて神理の精確に達すべ

し清く潔き皇國の風は。穀果の淡泊なる濕味に伴ひ。自ら適莫なく義と比ひ神性に洞達する養料に叶ひ。肉食の結果は血液を熱蒸して狂暴なる慣習を釀すより。法律を以てませとし防禦せさるを得す。法律を以て干禦する人種のみ多く殖え廣でる國俗と成行なば。かゝる小なる國ゟして如何で外國對等は覺束なくなむ。義氣と暴欲とは養血に關する大なり。是の養血の說を成すに當りて。外宮の大神の洪慶は。身に浸みて忝なきを識る。寔に　天照皇大御神の穀種を得給ひて。蒼生の食ひて可生ものぞと。いたく喜ひ給ひぬるを。心に刻みて忙るまじき事なれかし。國を瑞穗と稱し其の穗を食して。慈仁清快の義勇。大和男兒の本性を保ち養ひ。萬世替ふべからざる神の經營し給ふ國の親國たるに耻ちされ。噫それ內外兩宮の神光は。億萬世を涉りて。不朽不變の神則洪恩は。山高く海深くも。丈けの類ひ言べくもあらずかし。

肉食は人類の常食にあらざることは。予もかねての論かりそも肉食は情慾を增し。清淨の氣を害し。時に慘酷の性を生ず。こゝを以て或は情慾のすさみゟよるか。もしくは過勞によりて身體ゟ欠損を來す。時にこそ食用すへけれ。肉食の民は殊更に勞動するに非れば。性を全ふする難かるべし。」我國を神國と稱するゆゑは。他邦ゟ優りて清潔なるによる。我邦の他邦に優りて氣の清潔なる。廉耻の心に富みたる。肉食にあらざるに起因するその多し。彼の國に於てすら。學士ゟ肉食を賛成するもの少なし。そを輕躁近眼なる我國の學士よ。彼の歷史ゟ眼光紙背に入らさるや。西洋に於てすら。その始肉食は人類の常食なりとして。獸を屠り肉を炙りたるに非ざるそを。」そも動物の不用とする所のものを以て。植物を養ひ。植物の餘す所を以て動物を養ふ。於是かその呼吸互に反對の働きあるを視る時は。植物は人類の常食たるを知るにたる。君が食を論する深く其當を得たり。以て一言を添るには有けり。

武居保

○第五章

齋宮の事を釋す

國家は國家の基礎たる祖々の紀綱を主腦と奉頂し。大孝を申ふる元氣即ち神祇祭祀の大禮。及神籬（ヒモロキ）等を鞏固嚴肅ならしむべし。大中小學生文武官員に。朝夕の神拜勅語拜讀式等を授け。又神祇官を再興する等種々あるべし。その部分多き中に。伊勢齋宮（イツキ）を興起するより先務なるはなかるべし。抑齋宮は其實神代より有りつれど。其名の史上に確固と顯れたるは。崇神天皇の大御代にて爾後後醍醐天皇の御代皇女祥子内親王（御母は藤原の嬉子と申す）まで七十一柱（伊勢齋宮部類に據る）立ち給ひつれども。逆臣どもの波立て。此内親王齋宮に立給ひなからも。伊勢には參向ひ果てさせ給ふ事のあらざりしは。いとあだしき事なりけり。されと亂世の事と治世の標準たるべきにあらねば。皇政維新せさせ給へりし今日の昌平ゝ於ては。溫古知新して國體のある處を顧み。祭政の基本なる國光を發輝せむ事を務めさるべからず。其の方法手段一にして足らずと雖。まづ是の特殊なる神國の。あだし諸國に首出したる成立ち。名實は全く具りぬるを。海外に知らしめ心服せしむるにあり。されど茲に一の異論あり。そは如何にと云ふに。誰も一通り知りえたる如く。皇大御神の御神體は。同殿同床須更も不可離の御教なるを。崇神天皇の御代に方りて。大宮を離ち出し奉り。天下に疾疫多く。朝威に背反するものゝ出て來ぬと。思ひ違ひたる是なり。こは皇典の前後と。文例とをつぱらに辨ひ調べたらむには。此の天皇の御代に。國内疾疫の多く。民有死者且大半矣かごあるは。同し帝の五年までの事にて。大御神を豐鋤入姫に奉寄り。清き宮所を求ぎ給ふ事は。同し六年此姫御子の事を錄せる序次に見えたり。こは皇典の書法にて。後の事を前に及し廻したる迄にて。珍しからぬ例どもなり。さて肇國しらす崇神天皇と奉稱る御謚名に心を付て見る時は。そも當時ゝ於て叛者有り。疾疫あり。故に多くの法畧政畧を以てせられしも。蓋し及び難しと御悟り坐しまし。晨興夕惕請罪神祇と有るにて。祭祀を先ゝして政事を後にせさせ給ふ太古の例に則らせ給へる聖旨神業は。崇神の名實誠に茲ゝあれば。これ此の天皇の御盛德を擧けたる大綱なり。其他い細目と見るも不可無かるべし。或日には自らの罪を省み給ひ。神床に坐々して神々の御心を伺はれ。又た七年ゝは神淺茅原ゝ皇族群卿を會して大祓し。八百萬神の御心を伺ひ給ふより。倭迹々姫命に大物主神の神憑托（カムカカリ）ありて教へ給ふ事あり。是

に於てや　皇大御神を豐鋤入姫に大國魂神を淳名城入姫に奉寄り清き宮地を求ぎてこの二柱の神をも祭祀する事と成りしは皆七年頃の事なり。此をり日葉酢姫に豐氣大神を丹波に祀らせ給ふ。此時此大御神を同時に禁中より出し奉らせけむをも思ふべし。　此天皇の敬神崇祖は他に比類坐々さぬを。世に離殿別宮し給ふ事を政治上の完全する結果なりと云ふ人もあれど。紀中に神を瀆さむ事を恐れ云云とあれば。全く敬神孝愛の御念の致り。山よりも高く海よりも廣き御聖慮ましまし坐すまなむ。まして最愛とせさせ給ふ姫御子を二柱まで分ち出して。敬神の實をあげさせ給ふ御心は。中々に云ふも愚かなり。かくて同しき年の八月に。夢有一貴人誨曰。大田根子命爲祭大物主神之主。亦以市磯長尾市爲祭日本大國魂神之主。必天下大平矣教へ給ふまにまに從事し給ひば。其が功績の擧りぬるにて其事實の概樣を知るべし。かく幽現隨伴する事あるが。故に神典は悟了し難く。人々の惑ひぬるもいとうべにはありけり。さて姫御子にして男神の祭祀奉仕を掌とれるは。崇神天皇紀に。大國魂神を皇女淳城入姫命に奉齋らせ給ふも。髮落體瘦て不能祭とあれは。神々の御心の上には。或は男。或は女又は其子孫と。神主祭主を好み給

ふ事の有りて。人の思想外にありて端睨たもすべからずなむ。大宮には太古よりの例として。天細女命の天上にて奉仕られし古實あるがゆゑに天細女命を大宮能賣命とも。又內侍神とも御名に稱ひ奉負事にてしるきものをや。　皇大御神は女神に坐々せば。內親王の奉仕るぞ惟神の理に適へ。歷史の事實をも貫くに足るべきにや。後の世となりても。賢所は女官の奉仕るを思ひ渡すべし。荒木田末壽大人は。天皇の直の姫御子をして立て給へる事は。天皇の御同殿にこそ祭り給はね。天皇の御手つからつかへさせ給ふ御心はべにてぞかしと言れたり。是れや是れ代々天皇の皇女をもて御手代と御櫛を御手つから遊はし給ふ。皇家の大典無窮の國體なるべき。されば武門治世の時代は止む事を得ざるも。今かく大權回復の　大御代にては。神人一和祭政一致なる邦家の眞髓。即ち神國の標柱と仰き來ぬる齋宮は。一速に樹て行せ給ふべきは言ふまでもあらぬか。施政上の御都合よりそゞろに謀り給ふならむも知るべからず。或人は治國の骨主は法律に在りて。齋宮の立と立ぬとは今の急にあらずと辨駁せり。これ一渉りさる事にはあれど。治國の要針を法律にのみ一任し

たらむには外國の治體と五拾歩百歩其のけしめは無らまし。そも此徒は神國の名實を存する何れの點にありや否を知らぬ者にして。あなうたて恐こき事にざりける。いかにも法律は施政の墨繩にして。是なくは棟を埋むるほどの書をひもとくも。君を聖明にする遂に術なしと。古りにし人の言けむも理りなりけらし。されど刑法は蒼生の惡を懲すまてにて。化して忠良の民たらしむる事難きものなるをや。法律はある程度まて惡を作すも可なりと敎るものと。罵ゝる人い痛く時弊を極論するにて。歎くの深きあながまや。

その上神武天皇より歷代の天皇の大孝を申べ。政を議るに神事を先に成し給へる眞律は。神々の御心を和し神人一旨を專らとし給ふ事いやちこにて。眞の智者の敎とふものは。鬼神を敬し之に遠りしそぎるやまふにて。彼の法の祖とも仰く。唐土夏の禹主は。飲食を菲し。孝を鬼神に致と言へるに非すや。況や神國と稱する皇國にして。古來よりの廢典の缺漏を補ふべきもの一にして足らすなむ有りけるを。今の紳士學士等が。或は神祇官を再興して神々の御心を慰さむるを主し。或は神拜式を新ゝ組成し文武官員學生をして朝夕拜敬せしめて。神國の風を隆昌にするを首とし。或は文部敎部の學脉を精練して。國體の基礎を鞏固し敎化するを急とせよといへるも。急は素より急なりと雖も、余が齋宮を再起せんと論するか如き。國本より押し來りて。天下を薫陶するの急務に非ず。蓋しこは有名無功に屬すと論ずる學士も多はなる。そは眼前の狹見にて起原より推究せる說ならねば取るに足らずなむ。かゝる眼を以てせば如何なるすぢに志し。如何なる學脉の學ひに入りぬとも國に益なからむ噫。抑も神國と自稱するは。他國に異る敬神の大典あるにこそよれ。支那などにも大宗伯の官は即ち皇國の神祇官に同しく。上は類上帝下は偏群神と稱し郊社禘嘗の祭事禮典は學生たるもの。學課中に存在して豈敢て皇國に讓らざるべし。

天祖大御神の天の璽と。傳授の神寶に傍て給ひぬる。同殿同床如齋吾前せよと有る大勅を。代々に受繼き給ひて。齋宮を振興して奉齋大御手振は。異國ゝ類ひ有る事なければ。神國と名ゝこそ負けめといかゝ論爭するも。同し心を表するもの世に少きこそうれたけれ。入江に漁する海士の。鯛にまれ鱸にまれ。難波に持行き。宇治ゝ持行きつゝ日を重ね夜經ぬる程に。途中にして餓れぬる心地するも如何に悲しかりけむと思合する。熟々比年の氣象を考ふるに。年毎の震災風水の變は如何なる祥瑞か。引續き國家元老の身罷らるゝは如何なる照應か。蓋し洋理に混醉して何事も皆數と論し去り。命なりと見過すが如きは。天地の影響應報の如何に垂示すなるも。恬として

知らぬ顔なるこそ怪しけれ。中庸てふ書に、國家方に興らむとする時は必ず禎祥ありと見えしにあらずや人は神明の幽律によりて主領せらるゝ所なり。人心の向背に因りて禍福自來るは幽理の免れさるものなり。それ即影は身に從ふ物なるか如き理數なるを知らず。假令變應は不可免の數なるも豈心誠に求めなば。神の助けなからましやは。人は神明の主誠意を盡しなば。いかで感動を格さゞるの理なかるべき。そも神の庫(オコラ)はよし高くとも人の梯(カケハシ)のまに〳〵奥深くも上り入る事もうべからむ。さらは中頃絶へ果つる齋宮を振興して。天下の人民をして祖々に敬事するはかくてこそあれと。申孝の道を知らしめ賜ひなば。風に草の靡く如く。下觀して孝敬忠義の教は不知不識の間に起り。自ら小民下に親み、國志民行同一にして。渙散の氣象を呼ひ翻し。化々然として眞秀の國とぬけいてたる美風をも移し得べし。かゝれば其教其令の不肅不嚴にして行はれ往くや。電氣の速達するよりも早かるべしとぞ思ふなる。昔慶應の初の頃とかや。吉野なる後醍醐天皇の御陵鳴り動き。御垣になる震りきて崩れつるに。是れはた如何なる祥殃にやと恐みつゝありけるが。その由幕府にも深く恐みて。御勘定奉行某大助を以て御修繕役を負はしめきと聞く。今や回想すれば是れ此の明治の維新乾坤王政復古の祥瑞にして、同天皇の積年の御鬱憤の霽させ御素志の。遂けさせ給はむとの大稜威を。振立賜ふ餘勢の發動せるまはありけり。あなかしこ。在天の神靈の坐すが中に。取分け目出度御魂を幸ひ給ひぬる事と知られて。泣にむせびもあへぬ程になむ。さらは其御心の晴させ賜ふとしては。其世に遂け果し給はぬ。此の齋宮御事よ。其の大御代より中絶して今ゝ廢典と成り來るを。如何に大御心にいとほしく思し給ふらむと推量り奉られていと〳〵恐し。國家は國家の眞髓一元の精氣あれぞ。そは素より常人の眼孔に視ゆぬものなれば。怠り勝に成り行くこそいと憤ろしけれぞ。彼の荒魂の神の長元年間齋宮なる嬪子女王にかゝりて。宣給へる事なぞを思へば。何ぞ愚かしまつるべき。よろしく源に遡り清き流を汲み甘らに嘗め味ひ。神々の御心を奉採りて。後害を未萌にふせぎ。忠孝の本因を明かにすべくこそ方今の急務なれ。法律を定正するもよし。神祇官を興起するとするもよし。文武官員及ひ學生の神拜式を立るもよし。教部の教化を新調するも

よきはよけれと。先つ人心を團欒し。一早に國家の精粹なる元氣を振り興すより緊要なるはなからまし。今や各國の制度究理倫理教育は。既に悉く集りて我が皇道を孵出する材料とかる。これ正に皇道の大成する秋なり。進め學生よ。起てや紳士よ鳴呼それ時は如何なる時ぞ。茲に一の利劍を鑄造せむに。先其初め衆鐵の剛なるもの柔なるものを集めて練りませ。うちきためいよく水火の度と。工匠の精神と相あひ相こりて。始めて寶劍をも得へきものなれ。凡そ物の妙處は言語の傳ふ可きに非す。唯さる伯の方へ送られし書翰に。刀劍の如きも切味のみにては上作とは申かたく。名劍は別に妙處有之是皆去る所に御座候。人情にさかひなかく久く行はれぬ歌の如きものにて。其うたはるゝと申處の妙處ハ。たゝ成熟の上にある事なるべけれは。今日の事も長く行はれぬ所はいまだ成熟に至らさる故なるべし。故におのれたふけなくも志を立るに。大理小理第一義第二義のけちめを分け申候。尤も造化主は此大理によりて大道を行ひ萬物生成してやます。萬古不易の大利を得るものなり。支那聖賢の道は眼前の常理よ基き。眼前の利害得失を見るやうにて終に亡國と成り。萬代不易の大利を得る事能はす。眼前小利を得て足りとせしにたり。すへて外國の窮理と云ものは。第二義の常理條理の上にして玄の玄なる大理によらされば。たゝかの刀劍の切味をのみ好むのみなるが如く候。故に英國隱士ハリス獨りかの玄天の大道を唱て。當時をうれたむよしなる事かと存候。開國未た遠からさる國々は。朝日ののはるが如き勢ひにて時運の然らしむる所なれば。時運數ありて一度おとろふる時に至りては。そのみき廢るゝ事なからめや。易道運數の說は信すべきことなるべし。されは今日のみちもかの歌のうたはるゝ所の妙用に至りて。のち活物とならん上には遠くれこなはれ可申哉。なに事も眼前の常理一通りの上に付ての究理は。造化主の本意に背きかの大利を得る事あたいさるべし云々と言れしは。物に事に妙用第一義の有るを釋れたるそ。いと面白き事にさりけり。よしや神代の石凝刀賣神のでと神匠は坐すとも。世豈に正宗吉弘の如き良匠のなからましやは。千古を維持せむ今日は宜しく國首の殊別原則理由を詳にし。精神の根さす何れのへにあると注目すべくこそ。重する所は齋宮をもり立て起し。神人一和大同の神律を標證して。國本を培養し國粹の元體を明やかにするより。他に重き事有るへくとも思ほひすてなむ。皇大御神の稜威を釋くに先達て。齋宮の樹立すへき理由を論するも敢て贅物に非るべし。覽者幸に了せられむ事を。

齋宮再興のことはをのかかねてよりの論なり今君の論をよみてそのこゝろいよ〳〵切なり一日もはやうこの論の世にをこなはれむと國家のためのうましうなむねかはしそなむ

落合直文

○第六章

皇道は天象のまに〳〵則りことを釋す

天晴れ國を治むるにも身を整ふにも。徒ら博愛とかいふめる一點の標準より立て來ぬる集合體の國柄の。其の實は個人主義にて長く一定せざるは論もなき事なり。そも愛は天性のものにはあれど。其の感情洞達せされは弊は免かれかたし、そも愛を永遠に維持し全せむには。必すしも同時に禮節の伴はざる可らざるなり。禮節とは日足を左とし美伎里を右とし。相易り變ずる事なき謂にして。禮と和と相應用して始めて萬の事の調ふべき理りなり。只に慈愛勇直のみにては。末は柔弱に流れざれ婆。狂暴に陷るなり。かれ革命の國々を視よ。利己主義幸福をのみ本とするより。いか程法度を建るも建ると共に不便のいて來て底止すへからす。彼耶蘇の徒の救之に博愛主義を以てすなるも。禮敬の薄弱なるより。また一方に傾き。異外の結果を見る事史乘の傳ふる處のでとし。皇國は諸册二柱大神の開闢の始を立て給ひ。既く遠長に後裔を達觀し賜ふ無上の國にして本かしは本堅き故よしは。天津神授の十全大同の御稜威を備ひし。天瓊矛を國中の御柱即ち標準と突立て給ひ。相愛し相睦み賜ふと同時に。左右男女のほゞを定め。夫先唱へ婦次に和ふ禮節を言舉け守り給ひ。次て神々を生産し給ふにつれては。やがてまた其緒を序てゝ。產の神々の御上より遠く後を見そなはし。相競ひ相奪ふの惡き習を閉し塞き。神人調和永安に住ましめむと。至愛の極み皇極の標準を立ざるへからずと。於是哉幽現一致造化の本位を知食す。　皇大御神の生產坐を事と成にたり。かくて宇宙の間に一條の倫理愛敬兩全なる方向も確と定り。天地中の大權は悉く　皇大御神の主宰し給ふ事とは成りにけり。故に天神同魂なる天授の瓊矛とて。終りに　皇大御神を天位に贈り奉れるは。終始一貫なる惟神の大手振の幽理と知られて。いとも〳〵悅し。（論語てふ書に。知及之仁能守之。不莊以涖之。則民不敬。知及之仁能守之。莊以涖之。動之不以禮未善とありて。動くに禮を主とする金言は神人の標準なり。挙々服膺せさるべからす。）是れ所謂天地定位。而君臣分定といふべき國なれば。實に此の眞理は宇宙の標準といふべく。皇國の本首も亦茲に基きて定めざるべからず。然るに異邦は造物主のみを祭りて。其の教の本を殊にする事を辨明分拆せず。猥りに對考して宗教的思想に

摸擬する者は何ぞや。抑皇國を除くの外。萬國は一に天帝をのみ大主宰と抑くを。皇國は　皇大御神を無二の至尊宇宙の大主宰と仰く。其神理の存在するところ實に此にあるなり。されば一大問題として須らく公平の眼を以て論定すべきなり。かくて今日の吾國民たる者は。疾く此問題の理由を辨知せざるべからず。紫髯綠眼兒の常に睨視するより。他日或は本末の抗論に及ふ事あらむに。正確なる神理を審明せずして曖昧に歸したらむには。彼の外教者の說に追立られて後悔ゆとも及ばざる處あらむ。苟くも我大日本の神德皇威を宇內に發揚せむと欲する烈士は。豫め彼說の似て非なる理由を會得しをき。此の岩垣を堅固に突立て。神律の澄繩を擴張せすんバあるべからず。予茲に聊か蕪言を吐露する者は。其所感に於て止事を得さればなり。然れど若し又予が說の正當ならざる所あらば。聊かも假借せず直に其欠を補ひ。以て皇國の爲に稗益あらむ事。素より比呂伎が希望する處にして喜敷ものよこそ。

偖　皇大御神の天地の大主宰に坐す眞理を說くに先立ちて。其知食す處の位置より云はざるを得ず。古史に所謂治高天原とあるを。先哲の大陽なりといはれしは其の當を得たり。大陽薰陶の大なる事は。荒木田末壽大人は此の御光あるによりて。春は霞とのぼり秋は霧とふりて。山常しへに川淀まずと稱へつるもげに然る事にて。誰も見放け奉るが如く六合を照徹して。水火風雨燥濕悉く御德に化成する光溫臭能の指揮を仰かざるは無く。又其照育を蒙らざる者無きを知らば。化工の元も大陽より承くるの恩賴原因を推知すべくなむ。故に宇宙に具備する所の物力は。光りと熱との二者の囊鑰に掛りて生活せざるはなし。然して其氣噴出現する事今に一轍なるは。實に靈妙と云べきものなり。光は無機物を變して有機物分子を生成せしめ。之を以て人畜保生の大本たる草木を養生し。熱は專ら無機物を化成し。穢を拂ひて清に皈する奇功を釀成す。また氣候を變生し水氣を蒸騰し大氣を流動し雲を起し雨を降らすも。素は炎熱の然らしむるものにして。皆大陽の左右する處ならざるは無し。光と熱とは共に其源を大陽より發す。而して大陽は古今多少の增減ある事なし。若し天に大陽なかりせば乾坤夫れ止むに至らむか。　日大御神の大陽中に高御位知食し。宇宙の生活を主宰し給ふ事なかりせば。萬の事物皆滅亡すべき歟。視よ日の中天に位して其處を移さず。月星地球等羅列して。　天津日を御柱となしつゝ順

環運行を爲すものなるを。斯くて宇宙の間に。不動位の所をさして經と云ひ。縱横回轉するを緯と云ふ。但し玆に於て不動と見放くるが如き北極星を始め。地軸の如く晝夜其の線維を同うするが如きも。今や更に然らざる理由ある事を知るべき也。然れば北極南極を地球上下の標目と定め云ふも。彼の二極たるや地球と一列して。日輪を巡廻するなるべし。是れまで經星と見認るも實は五星等に對する義にして。諸星も皆日輪を經とし。一致一列惣動して日輪を巡るものにて。日輪は宇宙の中間に自轉す。其の旋化の勢ふ引れて地球は自轉しなから。諸星と列を整理して。大巡りに日輪を廻り。自ら一軌道を成し。順行不定に似て又準則ある也。此等の星の外に彗星と言ふあり。其の通ひ長く楕圓に回轉するが如きは。蓋し五星運行の威力に推され。其勢に厭せられて。長き楕圓形回轉を成す物なるも知るへからず。斯の如き作用に依りて考ふれバ。天地間福善禍害の所生。運用の神理幽冥の神判恐るべし。神典に武甕槌の神。星の神香々背尾を誅すとあるも。善惡吉凶の因緣する所。皆神理に因らざるはなしと雖も。是亦非凡の眼を具へずば知る事能はざるなり 今諸星を概して。日の衞星といふも敢て誣言に非ざるべし。故ふ唯自動と公動と衞動と游動との差別こそあれ。天地間動かざる星一も有る事なし。今人經星と認むる地球兩極其他同し類の經星と認る星も。皆大君主と仰く日輪を大廻して之に臣事するふあり。然れば四時の氣候消長する理を推測する時は。是までの經緯說は立つべからず。況して衞游星の如きものあるをや。宇宙一言以て之を蔽ふ時は。唯日輪は經なり。星羅萬象は皆緯なり。唯緯星中に屬する星を衞星といふのみ。北辰の其處に居て衆星之に拱すといへるが如く。大陽は自から其所に居て天の中心に立ち。是までの經緯游衞等の星之に拱すと云ふより。他に推步の理は無かるべし。彼の理學日耳曼の博士と聞えたるカントの說に曰く。晴夜空を望めば。滿天星辰羅列せる。此等星辰は多く我が大陽の如く。全體熔解せる圓球にして。光と熱とを發して以て其屬星ふ與る所の恒星なり。此等諸恒星の光彩を分拆術を以て査驗するに。僅に其氣體たる部分を鑒察し得るに過ぎずと雖とも。深く推究する時は。諸恒星皆同一の元素より成立たる者なる事明かにして。各星各異の元素より成れる者にあらず。且つ其の形狀及ひ位置に就きて考ふる時は。諸星其始めは一氣體なりしが。後分離して巨萬の恒星となり云々。此の恒星の各〳〵分離して。其屬星を生せり。即ち我大陽系諸惑星の如き是なりと。湯本氏の日本開闢說とて。日本教育雜志ふ揭けられたるは。寔に近來洋醉

勝なる諸氏に獨り拔でていと其志のめてたくなむ。比呂伎謹て考ふるにそも我神典に。ククモりて含芽とおほとかゝ說たるやふにあれど。さすがは神業神傳にして不洩そいと蘊奧なれ。夫天地未開前には。大陽も恒星も五星海王天王地球も。一塊渾體たるを。ククモりの四音一辭に說き明されたる傳へにして。彼の天蓋地平須彌四洲六日萬象を造り終たる等の作說にあらす。百世實理を俟ちて初めて顯る。いとも〳〵高尙なる底深き神理なれ。さるを中昔し儒佛にとりてせられ。近時又もや耶蘇說にあざむかれむとせし折りにしも。天然と顯れ來ぬる皇典の神理は。理學輸入し來るに伴れて。彌々增す光輝を發揮するこそ豈に人事にはあらざるものなれ。さて諸星地球の大陽より一たひ分離してはは。其星質地質によりて遠近距離の位置ある解釋につき。近來小地質册子に曰く。我大陽系を見るに。大陽は中心にありて爛々たる光を放ち。金星火星地球水星等。其周圍に廻轉す。之等の諸遊星を見るに。皆同一平面中にありて。同一方向の廻轉を有し。又皆惰圓體をなし。恰も軟き土塊を取り。之に軸を貫きて絕へす回轉して得たるが如き形體を有す。今尙我地球を見るに。火山温泉等の如き。地下には大熱を有するの兆候を示す者あり。陸地山嶽等の如く岩石熔塊の冷却して。凝結したるの狀を示す者あり。之等の諸現象は。霞雲說を創意するの最大根據を與へたる者なり。該說に曰く。我大陽系は其初め一の氣體塊にして。絕えす廻轉し冷却するに從ひ流體となり。又半固體となり。其際一部分裂して天王星となり。又海王星となり。順次諸遊星を放出し。遂に今日八遊星を生し。之等は其小なるがために放冷すること早く。又殆と光を放たす。獨り大陽は其大なるがために放冷すること遲く。今日尙ほ光輝を有せり。斯く地球は其初め氣體にして。漸次冷却し遂に今日の有樣に至りしを知る可し。之を霞雲星說の概要とす。此說元と天文學に屬し其理論深奧且廣衍にして。初學者は俄かに之を信し難し、然れとも。カント氏等の創意已來。諸學者尙深く之を研究し。愈々此說をして確實ならしめたりと論したるも、比呂伎考ふるに。此說は皇典と大同小異にして。寔は我神典の正明なるを証明するにぞあなる。如何となれば。神典に清明(ミヤビアキラ)がなるはダナヒキて天と成りと有る。棚ひくと(なひくの字義は聊か意義を異にせり。ダは多き象。ナは虛體空明物に付添象。ヒは廣大無數なる星象。キ

は牙音にして其義を慥むるに添たる活詞なり。之のタナヒキの四音一詞に重々多々なる星象を說きたる神理言魂は恒星天土星天と夫れ〳〵高底棚の如き遠近有りつる森羅萬象の天體を包羅概說したるこそ著けれ。又重く濁れるはつゞきて地と成るとは。元來地球は大陽と一塊(クヅモヒ)なるも。大陽の廻轉する氣勢ゝ粉韲せられ。切れ離れたるもッ音の連續したる象。またチ音の圓れたる締りちゞみぬる圓形凝固を成すにて。ッチ二音の一詞となれるも。素は大陽と一塊なりしか離て一球隋圓形と成る言魂にして。神典は億萬の創に既に擧けつるひぬるにて寔は人意の表に出でゝ。更に人作に非ずと云ふべき徵なり。大陽は今に嚴然と宇宙の最中に位をしめ、萬星球を旋廻する根幹と成り。開闔集散物と理とを悉く神性所謂キザシに伴なはしめ。自からなる萬斯一定の矩準も立ち。欠けず崩れず神業も本末あり。易簡にして洩さぬぞ實に我神典の神典たる所。神統の祖國たる理由なる。あはれ甘し國なるかも

小異なりとは元來諸星地球は大陽と混同一物になるも。切れ離るゝの際清く輕き物と重く濁れる物とある差めい。數の免れさる理象より。地球の大陽より分裂する位置は。蓋し諸星中の中程に位せりと知りぬ。地球より重く大陽の距離彌々遠き星は。地球より一層重きと知られたり。輕重は游氣体中と雖とも。輕重ありて多少の遲速遠近上下位置を免れされは論なし。其他大陽い其大なるがために放冷すること遲く。今日尙ほ光輝を有せり抔といふ說は。心に任せたる推測にして信を置がたし。事長ければ此には畧きつ。　斯れば言魂の大源音理象より論する時は即ち大陽は宇宙間眞中に君位を定めて六合に照徹し。諸星は日を廻りて廻轉し。四時の序を成す事。群臣各分職して施政を補佐するに異らず。夫然り其然る所以のものは大陽中に斯く尊き大主宰の神の座して。その統御運化の勢力に引るゝに依りてなりけり。〳〵日大御神の大陽中に主宰しまして萬物萬星の標本と仰き。其の慈祥を蒙る自然の神象とを先つ了知し。然して其の高御位を定め給ふ。天象人理一脈たるを覺りたらば。皇國は造化主を不祭して。　皇大御神を無上の至尊と齋き祭る眞理を知る。さて造化主は　皇大御神の御上にふくまれば。別て齋き祭るべき眞理を不見れバ造化主が主と本と。取り構ひ給ふ大陽中に。御位を定め給ふにて。　皇大御神は宇宙の大主宰に坐々し。幽現兼備統御ます神訣を知らしめむと。大本たる天象をかくくだ〳〵しくも述るになむ。　地球は神典に大空無根懸久良氣成漂流ととき。ッチと名つくる言魂にて。皇國い萬邦ゝ先達ちて地球圓體の說の嚆矢たり。是れ原より神の御傳のまゝなるが故にして。外國の如き星學の推測などより。見出でたるにはあらざるなり。亦言靈の神理によれば。是にも圓体地理の音性形質の備はるゝ。ッ音の妙用に依りても覺らるゝ事あり。そい別に說かんとす。かゝる尊き神傳を恬として觀る者も無かりしは。我國は東首に在りて性質は直やかに大らかにして。自己を忙れて進化する癖あるか故に。善きも惡きも耳目に新

觸する事とし云へば珍らしげに移り。輕躁にして本を忘るゝの傾向あるを免れざれば。須彌の說による者あり。或は天蓋地平を信ずる者ありて。神典國史による事なく。年序を經過せしに。彼の普國の天文學士コペルニカスと云ふ者ありて。初めて地球圓體の說を發明したれども。當時耶敎徒は異端邪說と成して。之に嚴刑酷罰を加へむと成したりしが。今日に至りては彼の須彌說や耶敎徒の說は一笑に附するまでとなりぬ。若しコペルニカスをして我が神典を當時に知らしめなば。其喜悅して手足の踏み舞を知すあらむ。斯く新思想の一回世に顯るるに及ひて。撞突阻障其排擊を成すも到底神理に支配せられざるを得す。いで其証徵を擧けむには。神典中より日の御國は此の地球に異る事なく（天香語山。天之安河の類。亦佐々良之小野及家屋等も在り。）山川原野樹木禽獸及百般の事物あり。一として備はらざるものなしかゝれば日球中に。大主宰の神の座さで得あらぬ理ならずや。斯の如き神傳は外國などゝは夢にも見る事能はざるなり。天晴れ天上の生動物のみかは。其の祭事神式より彝倫孝敬秩序を受繼き給ひて。代々の天皇の天津日を尊敬し給ふ大御手振は申すも更なり。前にも述たるが神武

天皇東征の條に吾は日の御子にして日に向ひて戰ふは利あらずと詔へる大御心。若日下部王の亦雄畧天皇に夫婦は人倫の大本たれは。初より之を正しくせざるべからずとて。背日して妻問給へるを諫め。天皇にも深く容れ坐せる由など。いずれも日の方を敬ひ給ふ。大御心は一にして。其本深き神理あればなり。（然るを唯に戰畧の事ならむといひ。亦彼の宮敷ます所を撰び給ふにも。朝日夕日之直刺す地をトしてものせらるゝ神式を。或は旱燥の地をトする爲めならむと見成すものゝ。例の理想的推思に傾むくのくせになむ。）然れば日輪を一の物質とのみ見なして敬せざるは。神理に暗き異邦人の不幸なり。異邦人は然もあるべきも。皇國の學者すら今は彼の說に染みて。日に向ふ事を等閑にのみ見成す輩などには。伊弉諾尊の脩禊のをり。殊更に日向の小戸に御心を立花に薰せ給ふ神理。亦猿田彦大神の皇孫を日向の果てに導き給ふ。皇國無上の神秘の說。萬古に涉り後世を觀通し給ふ神則は。夢にも知り得べき事にあらずなむ。　嗚呼彼の大聖と稱する堯舜すら神人の際を語るを惱む。然るを況して凡庸の徒が哲學究理學上より神妙の理を推究せむとするも及ぶべけむや。是皇國の如き神授の大典なきが故にて。物有て始めて則を取る異邦の風習こそ憐むべき淺薄のものなれ。是より御光の御盛德を釋むに。　皇大御神の御稜威の漏れ出る。大陽の光線をヒカリと奉稱る。一音單義中にいとこよなき綾に靈しき意のくゝまる言魂の傳はなかく に會

得し難けれど。まづ一渉り五十連音の序位により。天地自らなる性格の備りぬる、そが進退延約生動の荒ましを言ひて。言魂の効用いみじき事を明かすべし。夫れ風に觸れは波に聲あり。伐木は谷彦響きあり。早苗田の蛙。花園の鶯は更にも言ず。玉や金やの音なひ觸て鏘々然と鳴る。是れはた天地の眞理にして何かは神律に契らざるべき。某の名は忘れたれど。金氣の精髄は笛の形象なりと聞きぬるは如何にそや。かゝる眞理は知る人そ知らむ。されはとて。阿行の如きは諸音の親なるがゆゑに。事長くしてたやすく釋き明すべからねば今此を暫く置き。次なる。加行に附て先つ試み論らむとす。茲に加行の上より降る音韻は、カンキンクンケンコンと次第に重かるが。是に反けて下より昇る音は。けさやかに轉て輕きを覺ふ。こを性智の發揮進運に準へて釋きなば。いと底なるコ音の單義は心の象なり。心は隱れて空中の火の如く。應映ては深淵の水の如し。強く牙喉の活機に顯れ出る韻にして。須臾の程も靜けき事なく有るか有らぬかそれかとしもなく。出入無時の感格を來す。奇しき物にこそあれ。さて。コ音は於音の底ひ深く太しく強き母の質を帶び。胸中にまれ殿頭にまれ。如何にも身体の奥まりたる方よひそみ位すと言ふが如く。音圖の最も下にありてその眞象の神字形に現るゝに眼を注きなば。出沒不滅強固無形の靈物なるを知るべし。此に或說にイキシチニヒミーリキを。第三位に置き易て父位と成す。約り意は同性なれば。今は試にウクスツヌフムユルウに付て。性格を立るになむ。久音の靈しく動きながら隱れて見難き。父の性を繼き生立てるものから。心の象とは自ら知られたり。心は和魂の一物あるが故に。コと單音に呼ひ成すべきを。ココとしも連ね唱ふるゆゑは。心は和魂荒魂幸魂奇魂の和合したる組立上の名稱なるが謂なり。性情と連ね魂魄と合して。徒に心と呼ふも同じければなり。それに良行のからみ締りたる口音を添へたるが。心の言の葉の組立にて。正しく惟神ある言魂とはなりにけり。因に言むに。神典に有一物其狀如葦芽とある一物はコとしも可讀付をちなるを。是れはた造化大神の御魂なるがゆゑにコ音の進昇純粹中正の音はキ音なれはキ音に移しキセシ。キザシと神代より口授し來ぬる神習は今更に驚きて、奇しく尊くなむ。カヒの約りもキと成るに心を着べし。亦一物のモノの二音の通ひて。コの一音本性を顯したるもわやし。神音は縱横りの源よ合ふ五十連音靈機なる。豈絶奇驚歎に堪ふべけむや。神國の言語は實物に付き意義を示す風なれば。誠生物と不言して物の物を生するは。理實の上には識り易きによりて。一物と言ひたる神代よりの習せなり。中庸てふ書に誠者物之終始。不誠無物。亦天地之道可一言而盡也。其爲物不貳則其生物不測と。物と誠と互に交するなり。莊子てふ書にも生物之以息相吹也とあるは造化主の性情純一無混の靈を物とも指すなるべし。偖一物とは心の意義なる徵しは。大物主神は大國御魂神と御同體なる和魂に坐せば。物と魂と變る事なきは明晰なるが如し。造化大御神の純一剛健に坐すより。サカと奉稱り。其盛德無始よりはカヒと稱ひ萬物化醇するよりキザシと稱る言

魂の働き。コ音を妙用に使用す。コ音義の生動する言詞の組織は。誠籠命事言此凝など
る。殊に綾しき神國の習せにや。コ音義の生動する言詞の組織は。誠籠命事言此凝など
他音と交るも。本つ心の義を離れざるにても覺るべし。さて此の一物が生育發達す
る勢ひ立つを。ケの象と成す。ケは江音の榮えはびこる母の質を帶ひ。久音の動めき
止ぬ父の性を稟け。隣行兄弟なるセ音に友ひ一たひ躍りて地上を離れ 即キザシケザシなど云
ふ音これなり いさゝけく蹴立昇る象なりケ音の組合の辭は。毛皮膚の上部に生立ち。血液の
逃去する勢象より云ふ。
烟。火勢に連れ。煤の曇り群ぬ嶮岨。斷岸絶壁見ては身毛立勢の立ちぬる象。ハケシ食。食物
るム音義を添たるより といふ詞を倒に唱替へたるにて同し義なり。 をケ
と稱ふるは。蒼生の食ふて生立つ。クは喉腹中に。滓溟たる宇音質を含み、自性の往來旋
その勢氣を體言とは成せるなり。
廻區別變遷の化力によりて。或は變生又は腐穢する。奇しき働きを備へたり。人靈の
登達するを。知命とも言にはあなり。去るを惡き 此域に
道に踏違ひなば。蟹か行横ばへ成すはいと醜し。ク音の働きの大なるは。先つ國常立尊
のクの言魂。及びクグモリ。玖羅計抔の意義より初て。其神機の活動は。日月星地と割
判し。また國と締りもしつゝ。千萬秋天地と生き働く靈運も。此のク音に胚孕しぬる
なり。其が辭の組立は。來往。ク音を只に來るとのみな思そ。動て靜けからぬ象よりユ音義
を添ふれば。往く義とあるなり。クの働は種々にして測るべか
らぬよりクスシき詞 黑。暗。雲。窪。暮。ク音は妙にして不測量
とはなりにけらしも。 より玄體とも成るなり。腐。生動する勢の他に塞かれて止む間に。クの勢の

去る時にサルと云ふ重詞の クッとはク音に浸みいる義。クッとはク音に付く義。いつれ
添りたるにこゝろを付べし。朽。クチとはク音の黑色に變化し。黑く醜き方に伴ふ象なり。
草 ク音の群り曲る象に。種々なる義よりサ音義の細微數多 沓加かゝる言魂は。神字形の一
なる象を添て。弱く不伸て久久廻遲ならぬと知るべし。方に傾きたる象をも帶た
り。形に合せ見べし。繰廻車鍬廓畔、田の畔をせき一方に口のあるよりアと稱するも。また水を 國。口。
堤みクロミたるより廓の義と同じ意の名義と知るべし。
栗故桃 圓ろらかに一体に纏りぬ るより生れたる義なり。 碎。崩。動きて不止は。果は破壞する 意象より。移りたる義なり。
の意の籠りたるは。恰も神運の不可思議的の本性たればなり。朝鮮にて神をクマと唱
の彼國に繁く往來し給ひぬるが。神語の働きの殘りしにはあらぬか。マ音義い虛なるが如 る。蓋し上古の時。神々
くにして。宇宙の間に充ち滿ちたる象にク音義の玄靈なるが合ひて。神体神理の象となる。
況哉カとクと通ひ。マとミと通ひては。約り神と同稱するをも知られて。いと奇き事かも。支
那にも其類ひさはなり。其の西するまにまに。遠けれバ漸々侏離鴃舌と。移り代り易く詮なき
ものなり。キは進達清直なるイ音の母の質を帶ひ。神備なる久の父の性を繼き。高く立ち
榮え、上部の中正に位を占め。御稜威の萃秀きと顯れては。恐けれど撞榊木稜威御魂
伊佐那伎瓊々杵等の譬るにさへ詞なき。綾に貴き御にほひと憲彰し大御名の稱と
成りにけらしも、清。潔。北、君。等の言辭の組合にても思ひ半はに過ぬべし。力は輕く立
ち揚り空明なる母の阿の質を孕み。玄妙神變なる。久の性を帶び。勝れて明かなる御
生質なる大神達は。一大壯明なる御薫を含みながら坐すものから。その他を照射し

給ふ御稜威のいやてりにかゝやき。發光の外射する赫々たる御氣を。ヒカリと組成せる言魂なり。其言辭の組立は。勝。堅。力。傾。人は胸中にかくろき事なく。内に顧みわづらはしき心なければ。天眞爛熳に天宇須女命の射向ふ神と面勝給ひぬる如くなり。目も両視せずして一方に傾射してこそ。明かなるものなれと言ふに心を注き考へなは。カ音剛強なると神字形に知るべし。赤。明。カキロヒ。神稜威い申すも更なり。人にも智德の備る時は、物に觸れ事に會て言行威勢ある擧動は。よそながら憚られてなむ。構。鎌。鈎。神字形象より來る。天津太諄詞考に付て。釋たるに合せ考ふべし。御ヒカリの釋に。先たちてかくくさ〳〵しくも音理を說くは。余すら倦む地心しぬれば。まして外眼に飽もやせむと煩ひつれど。言魂の正しき筋を一通りさやかにせむとには。天地自らなる眞理より釋かずては。神世の御林にはまだ世になき花の馨しきを折枝べき便りなければなり。是より御光の釋義に及ばむそも御光は一秒時間に。幾億萬四維八紘に薫徹す。電氣の速力も準ふ可き物かは。光中には亦諸德諸色の普く備りて。洩れ缺たる事なく。化育の至靈の根ざして幽現を兼て。眞の太極と敬拜する皇道實理の所發揮所基礎。廣大至機なるを。ヒ音義の言魂と知るべし。亦神威の餘勢の溢れて、上より下に眞赤に射照る光力を。力音義の言魂とすなり。彼のヒとカと。二音義の堅く結ぶ活用に、リ音義を添へ組立たる。神代より

の言魂にしあれば。皇典に　皇大御神の生質のまにま。大御軀より御ヒカリのうるはしく。六合に照り徹ると有に思ひ合せて知るべし。珍の大御子と。御祖も自ら仰き頂きまつりて。宇宙の大主宰と齋き。後にその日の御國の御宮に鎭りまして。大御政を奉保祐給ひ。御祖二柱大神も子とは申し給ひながら。奉齋り奉輔らるゝ事長けれは此にい別に不論れど。是の書を見渡したらむ人は。自ら悟るべきなむ。　されど此は一通の釋にて。ヒカリの玄義は盡せりと云ふべくもあらず。夫れ力音の强く且つ明かなるは。全く數重なり集積する義を主とすれば。加の訓をクハヒと言は。働きの上よりの移りたるにて。兼懸カヒソイ冥加等の言詞に參考してもカ音義に數多き象を知るべし。冥加を漢語となる思ひそ。寔は和訓にてクラミニ加ルを本訓と見るへからず。惟神に恩賴に懸ると申す意なり。　夫れ事物の健强なるも。またく衆理衆力の集ひ積りぬれはなり。此に一例を擧て言は。一二の箭は折るへくも。十百と積りては撓みざもせぬが如し。然れば譬へ小國たりともいやまとふ大和心の凝集したらむには。浦安の名實は全ふすべきなり。一つの光中に。諸色諸素を含藏して。有機無機物に論なく。萬化養育の太極と仰き成しぬるは。元來天津神も日少宮に鎭り坐して。　皇大御神を輔佐し奉り。八百萬神も。　皇大御神の大政を保助し奉れば。かく諸神威の集り凝たるが。廣らに太しく成り整ふが。ヒとカとの神代よりの言魂の組合せ。正しき條となれば

なり。さてこそ色とするも馨とするも。缺る事なき至盛至德は。形樣言稱の及ぶ限に非ず。近來理象家の發明して日光中に。五色七色の含むと珍らかげに言へば。識狹小よして驚く人こそ驚さるれ。此のヒカリの音義の本旨を辨へたる者は驚くべき事かは。又は色は物に備いらで日光中の物ありと論ふも。ふさはぬ說事ともなり。　されぞ　皇大御神の御一德に歸し奉るは。元來　皇大御神の生質ながら。大軀の御光り灼然くますが上に宇宙大主宰と坐して。天神地祇の翼贊し給ふ迄にて。日光は統御の御一權に奉歸る素より論なければなり。かく迅速なる光線と。至廣なる日球と。萬象無缺の威力も集り。靈德の溢れて射照り徹るは。理上より。名象より。天地自然の象より。神典上よりも。透徹一貫なるが。やがて國體にこそ有りけれ。或人夜中は如何にと。問へけるに答ひけらく。夜は月星に返射力を賦與し。奇しきかも怪しきかも。熱は冷氣と變更して。萬物收結して果實を堅固ならしむ。其他衆星に。山川海壑に注射し。風雨寒暖燥濕の作用する。かく有形上は言までも有らぬが。無形上の費隱なる事にでも。悉く光線の波及に賴り。感格を來す物なれば。無形上となく暗夜となく。餘光は宇宙間に磅礴しぬる理象を深く思ふ可きなり。或は學者の平生ロに誦する大極の動けば陽を生し。動き止み靜かにして陰を生すと言ふい。是れ此の御光の元則の觀察に乏く。架空の大極を模出揑造して。神園の蘊奧よ。日影に匂ふ世になき。花を知らされいなり。　皇大御神の天の石窟に隱れ給ひし時に。御招祝に奉鑄れる御鏡の事は。誰も知る事なから。恐けれど其神業につきて。神理を奉窺ば。八百萬神の。　皇大御神を敬慕する至誠の。相集り相議り給ふ御心を

惣括し給ひし棟梁と坐す。八意思兼命の思ひ兼ね合せ謀り給ふ事は。御名の上にて著し。また八百萬神の欽仰の凝固なるは。冶工（カナダクミ）の惣宰石凝刀賣神の御名のうへにて炳焉（ヘイエン）なり。かゝれば八百萬神の赤誠の兼ね集り凝り固る御にほひの。御神鏡にふくまりぬるを。　皇大御神も深く愛で坐し。自らの和魂を憑托（ツケ）坐して。天統無窮のしるしと皇孫尊ゝ授け給ふなり。されば御神體の元質は。諸神の精靈に成りたる集凝體。則ち廣く普く數の重るヒカの音義と幽契し。皇道は總て天上地下一脈の神理の貫徹し。天傳ふ照日の眞布津の鏡は。續日本紀藤原左大臣の。身罷給ふ時に。大詔詞給ふ時に政事をふさねもちてとある布は。普にして廣く多きよりの詞なれば。此の鏡を眞布津の鏡とは奉稱る理りと知られていと恐し。又統持をふさねもつと言ふにても。音義の普き意を可了。なほ天津太祝詞考の。登布のプの音義に合せ考ふべし。神風の伊勢に鎭り坐す神種（カムサチ）も。和光一體一理に坐す事の著るしく知られて。いとも〳〵貴し。さるを拙き物も隔なく。現蟬の此の身にして。大前に拜み仕る事の恐さよ。そも如何なる我等はすぐせの報いにや。よく幸福の廣く大いなる事を思へば。龜をふまへて龍の宮に通ひ。鶴に乘りてみ空翹るも仲々なり。かゝれば地上に生とし生る者。誰かは伊勢　皇大御神を奉祝奉齋の外。幸慶實理の視るべき物そなしと思

ふは如何に他し國の神佛は。人意の想像。また一方の信仰揑造に成出たるものにて。天象地理一脈の物に非らざれば。信をおかむとするも終に得べからぬをや。噫諸人よ道は八衢なるも。只天眞公道は。是れ此の惟神の大道のみ。故に死生を一途に安心決定し邪道に夢な惑ひそ。皇道は知り易く從ひ容し。眼の當り太陽の位置。光線の理を樹梯として。深くも高くも登り究むべし。彼の大極は無極。或は眞如實相抔の論は。空行く風の取らへかねて。身に添ふ影の逐ひすかるべからぬ說ぞもとは。霄壤のけしめなり。不可不思不可不察なり。此に近來尊外的不智なる乳香離れぬ幼稚の學生は。光線は徒に火塊の光りなりかぞ斷定せるは。笑に勝へず片腹痛くてなむ。よしはた火光とのみ見成したらむには。その大陽中の火力の。元質炭氣は何所より貢くものとするかと問ひしなば。それいかゞ答へむとかする。試に見よ。譬へば空中に打揚くる烽火や。遠く郊原を燒渡す火の形の偉大なるを見て。大陽に比したらむも。暑影も光射も類ひ似よるべきもあらぬをや。神理は深し肉眼の及ぶ限にあらず。須らくさからしら止めて神習てよ。また古來より漢學者の僻ありヒカリとは神聖の盛德を稱揚する辭にして。身體より如何て光の出べき。寔は智力の四方八維に施き及ぶ德を文飾に賞たるにて。堯典に光被四表。以至上下云ひ。或は觀國光。又は含光弘大抔の義と一例なりと云ひて說き得たりと得意面なるこそ。笑べき限なれ。聖人より貴き者なしと見たらむ心よりはさも有りなむが。全く程朱の虛熱に侵れ傳染しつる病ひにて。皇國の神鏡にかけて裡面より照されなば。其の眞僞のかけは赫然明白なるを不可免なむ。彼國にすら孟軻氏の如き大人聖人神の判別を立るを如何にとかする。皆古意を失ひ己が量に任せ釋き曲げ。自ら淺きを衒ふしれものなり。佛經中にも眉間の白光を放ちて世間を照すなどいへるは眞理にやゝ近くして。幽理に富みたる佛說は。心理哲學の一層高きを覺ゆぬべくなむ。されと今の僧侶はヒロシヤナアニチヤ等の梵音義の眞味眞相知るや知らずや。口に泡して高尙の理を談ずるも。例の假相方便に流れ。實相眞如の躬行に乏しく。況や易行他力に任せぬる釋事は。人をして怠慢に陷らしむる罪を免るべからず。一笑せむ瞿曇氏をして今の代に起し來らしめは。眞人面前にいかで夢を說く可きかは嗚呼。

さて大陽の溫光玄機靈運の活機を聊か云むに。萬物の集散離合。復剝乘除し。四時の序を綾織り。萬斯色かへず天地を經緯し永く持ち歷來ぬる神業を。此に類別せむには。此の類別に二種あり。所謂る心化と形化となり。心化とは靈機交蜜し神氣厚く凝り。稜威に化生するを言ふ。形化とは氣質より連生し相續するを言ふなむ。易てふ書に。天地絪蘊萬物化醇。男女搆精萬物化

生すと。分け言へる是也。先つ試ゝ形化上より説き作さば。此に一の炭火有り之を日光に曝して
は。勢力の自ら消だえぬる象を現す。又水は池にまれ流れゝまれ。陽光ゝ蒸發せられ
ては。虚空ゝ蒡湃しつゝ上下して雨露となり。萬物を潤濕す。又寫眞藥の日光に會て。
忽ち暗き黑き方に退縮する。現象を見ても知るべし 闇ゝ働くがぐろきうしろめたふ 醜めくも。之を本すくれば元來い
心化の惡しかりしよりなり。水火香色の。日光ゝ減殺破碎沙汰せられ熔解し。又涵育せ
心化は志しに顯る愼べし。
られて。生々男女和合して。生續するを形化といふ。これ其の一種の大類別にぞあな
る。さて心化とは天地開闢のそのかみ。造化大神の御魂の芽しが。萌え殖がる御稜威
の快速なる。自轉旋廻につれ。内外宇宙に充ち滿つるガス体は。紛壅破碎して。五星及
び天王海王衆星地球と分離しぬるが。神典ゝ清明なるは靡きて天となり。重くて濁
れるは地となると。おほらかに言へりしにはあなり。恒星の如きは。太陽系屬ならぬや
管の窺にて。太陽の衆恒星の眞中に位置しぬる元則を。知るや知らずや。彼れ此の地球は。大空に根懸る事なく。久羅下那須
に或論者は云へれども。寔はまた
多陀申弊流を。岐美二柱御祖の天瓊矛もて修理固成し給ひ。山川海陸五行神を始め。
數多の神々をも生給ひ。各々事物を持ち別けて主宰せしめ給ひつるが。理上よりも

心化に懸る化醇と稱すべきもの少なからぬを見て可知ものぞ。また天瓊矛も。造化
は論なきがうが器中に天神の大御魂の含蓄しぬるものから。計畫のまにゝ萬の盛業の成
大神の心化に懸る
り整ふを伺ふ時は。此の御矛は一の大神と坐して。天地の御柱と奉祀り。大御神を奉贈上れ
ることなき大御神の神寶にして。只の器にあらず。器とのみ見るは大なる非事なり。彼の八束水臣津沼神のもそろ〳〵と。國を
引寄給ふも。大山祇命の一夜の中に湖嶽を作り替へ給ふも。神機の心化にして。人を
して驚愕おくあたはざらしむ。誰か心化の靈運を。徒に桑田碧海須臾に改ると歎息
ゝ流し捨るものぞ噫。されと心化とてその理緒丈けは知るよしなきゝよしもあらず。
例へば火の燥けるに隨ひ。水の潤るに伴ふは更にも言ず。同氣の相集り相離れ一に
歸り多に別れ。春秋の榮枯復剝の氣數も。御光の調和にかゝりては。柳はたをやかに
梅はかくはしく。惣して惡しき者は果は倒れ。善き者は終に伸るは。天地の定理にし
て。心化の理旨とてもかゝる自然象より觀察したゞり行がば自ら知るべくもかな。
譬へば富有者の門には貧者の集り。英雄の下に弱卒なく。功笑眉目のみめよきを見
つれば。素きを後にするの感を來し。小人の君子に接するに。俄ゝ不善を掩ふさまを
視るならずや。自然の情象顯晦榮枯は數の免れざるものなれば。その小なるを

舉れば一身の勉强智識發達につれ。君子の域にも登り。貧困は化して富貴の壇に達すべし。その大なるを舉れば。支那周の代に在りて魯國の末弱なる。齊國の他に奪るゝも。立國の制裁に依らずんは非ず。神武天皇崇神天皇の御叡慮の好果は萬千秋の長五百秋の花實の咲き結び。神后皇后雄畧天皇の神化に浴しつるも。皆悉く至誠の感る所神智の發達に促されたるにて。之を要するに日光の黑白を分け照すより出づと言はざるを得ず。中庸に。唯天下至誠爲能盡其性。能盡其性。則能盡人之性。能盡人之性。能盡物之性。能盡物之性。則可以贊天地之化育。可以贊天地之化育。則可以與天地參矣。と有るに依る時は。神化の神機は誠の道を梯にして。登達すべきものあり。されば人は君臣。親子。夫婦の。天倫なる。親愛の本情を涵養し。日光の萬物を左右消長する理を推し。類に觸れて。格物致知の感想を伸長し。內は修身衞生齊家子孫の繁榮を心上に制裁化醇するも。外は治國施政四維八紘を經營計畫するも。皆悉く日光の類別より發達を促さざるはなし。皇大御神の生產する皇國に生を稟る我等御民にして。いかで終身盡力神化して神域へ登壇せずして可止かは。智德實學を修めむと欲するものは。宇宙の神象即ち大陽の位置。及び御光に眼精を注がざる可からず。今や儒に佛に耶蘇に究理天文地理化學哲學に。其他百般の諸學年を逐ひ。漸々に輻輯して我に備る。是の備る物を以て。我が固有の大和魂の惟神の道と和むみがく飛鳥砂と成して。礪磨せよとの大なる神量と知べくなむ。されば人には人の。天工に代り可盡き義務のありて。神にのみ一任すへきに非ぬをや。稚子も知る近時の洋勢は。始め其國と親和交易するや。衒ふに利を示し。怖すに炮艦を以てし。次て宗教を以て人の心膽を領畧し。果は驕奢と慣れ貧弱に至らしめ。手につばきして奪ふ。彼の天竺安南の手振にて著しきものを。されと彼れ可乘の勢は內の素より人心の腐癈したるにて。譬い藏を慢にするは盜を教の類ひにて。約り自亡自棄に歸せさるを得す。外は鎌いたちの道を遮るあり。內は小鮮の釜中に煎られ囂々沸騰して人心一まとひならす。さら婆學士よ。平常は。月にあこかれ花に浮るゝもよし。假名語格を糺すもよし。太和魂を誇稱し。また神風を賴むもよけれと。正に洋潮の底にさす勢の。他日狂瀾と渦卷つなみたらむとするを豫防もすつる雋傑もかな。今の學士にして神理の光彩を輝す志を捨て。心をぶらかす者には。眞虫の膽を一まけも。いましてしかな。此は八十綱かけて引寄給ふ。神量と恐けれど知りぬるが。その神理をいかにと考るに。古支那元の代に。强て和信を開かむとせしは更にも言はぢ。過きし天正の頃ホルトガルが來り後またロシヤの互市を請ひしにも。海關は堅く鎖して許さゞりしを。嘉永癸丑の年にアメリカの浦賀に來泊せしより。和親となりしを。志士は戰に訟へてもとまで爭ひしも。遂に通信互市の約相調ひたりしは。抑亦人爲なるかはた神量なるか。そも予は神量りにして人爲も亦預れりとす。續きて英魯獨佛の諸國も。往來交易

する代と成り。火術に化學に。其他百般の新奇を輸入して。ある場合に於ては我を侮り我をおどさむ氣勢あるより。大和魂を備る天の益人等は。如何で負くべき劣るべきと。反動力の募るより。却て彼の究理學を礎き砂と集て。大成する秋を視るや近きにあらむ。是れ此の人智の發達につれ神化の運轉妙機の有る處を窺ふに足る。視よ神化もまた序次あるを。神代の昔より人皇の始にかけて。神人の西なる常世の國より渡航。彼の國々を開化せしめたりしを。それやがて西へ〳〵と波立ち及びて。天竺小亞細亞より歐魯巴と推移り。而してまた西して。今のアメリカを開き更に精功を加へて彼が西我の東なるアメリカのたやすく我と和親の開き初めしを見る時は。神量りの地球自轉の序を追ひ。大陽の光に礎き出づる神化も。秩然として序有ものと知る。　皇大御神の御傳に先ちて。日球は萬象の本根及び天の中心に位すると。御光の稜威を下解の料に一渡り釋くになむ。或る歌に「西北の風は東にめぐりきて朝日かゞやく日の大本の國」と祝れつるぞ。さりともと返す返す思ふなる。

山本比呂伎主の。天象に基く皇道を釋すと題せられたる。此論說は。予に於ても最も同感なる所小からず。然れども其恒星も亦皆。我大陽系中の物なりとする一事に至りてハ。今一層講究研磨を盡しゝ後に非されば。容易に同意を表し難し。如何となれば。猶臆測の說たるを免かるべからざるの感有ればなり。然れとも大陽を以て。此宇宙の中心とし君主とし經とし。又其大陽系中の諸遊星が。其周圍を輪轉運行しつゝ有るを。其隸屬とし。臣僕とし。緯とするに於ては。又更に問然すべき所有る事無し。因て今之れに一言を添へむに。抑々大陽は恐れ多くも。生坐(ナレマシ)なから六合に照徹するの大神德を具有し給へる。我　天照大御神の主宰し給ひて。宇宙より照臨し給ふ一神域にして。即ち天の中心君主の位に安んじ。自轉して止むこと無く。又彼、水星、金星、地球、火星、木星、土星、及び、天王、海王、等の。吾人人類の既に測量し得らるゝ限りの諸遊星が。各々多少の衛星を率ゐて。遠くも近くも其距離を違へず。自轉して日光に對する方は晝となり。背く方は夜となり。又公轉運行して。譬へば臣、隸の君主を圍繞し守衛して止まさる如くなるは。縱令億萬斯年を經過するも。決めて變易すること無き。此天體の現象なり。此現象に依りて之れを推すに。君主

は常に君主として臣隷は常に臣隷たるべきは實に眞理の粲然たるものに非すや思ふに我　皇祖天照大御神の　皇孫邇々藝尊を降して下土に君臨せしめ給ふや其立極垂統の始めに當りて即ち此天體の現象に基きて　皇孫尊を皇位に即け奉り給ひしより君臣の大義定まり上下の名分正しくして寶祚の隆天壤と共に無窮なるべしと宣ひし神勅の今日に至るも更に變易すること無きは是れ即ち我皇道の淵源にして皇道は此天象の眞理に基く所なること火を見るよりも明かなりと云ふべし若し之れに反して彼ノ海外諸國の如く屢々革命有るを以て眞理とすと云はんか宇宙の現象に於ても時としては諸遊星の内或は一種特別の運行を起し然も大陽の如き光明を放ちて宇宙の中心に浸入し以て大陽に代りて其君位に主たるものも無らざるを得ざるべし而して斯の如きことは決めて有るべきの理なきを以て又決して有ること無し其決めて有ること無きは即ち其無きを以て眞理とすれはなり然れ〻臣民が勢ひを得るに任せて君主を放逐若くは殘害して弑逆簒奪を行ひ以て之れに代ること有るが如きは決めて眞理に背きたるものにて天象に基かざる無道の所爲たるを免かれざるを知るべし是れ既に無道たらば前に述べたる我皇道の天象に基きたる眞理なること又何ぞ疑はむ是れ余が此論説の後に此一言を添ふる所以なり

宮地嚴夫稿

第七章

皇大御神は諸册二柱大神の懇禱に生産し給ふを釋す

伊邪那岐伊邪那美二柱の大神の　天照皇大御神を生産し給ふおほん理由は前に簡畧に説成せれどなほ足はぬ心ちすれば亦重ねて言むとす　そを言むとするは前立ちて先　皇大御神の生産座さでは皇極建ざるのみならず且末世に到りて倫理紊亂秩序錯雜し人々自主の權力を爭ひ互にのゝしり合ひて上下の差別もなく各自が向き〳〵に標準を立てゝ彼に傾き是に流れ利の極端に走り行きては放縱に

法律を作り眞誠の基本たる所を行ふべき由なく。平等自由の論に墜り己々か心ま
かせの說のみ廣まり。果ては不平を釀し競爭となり。放伐と變態して。甚安からぬ世
と成り行かむ事を御祖二柱大神の神代の未發に知ろし召して　皇大御神を生產
し坐せばなり。されはこそ遠き神代の始に。天神の大詔を受けて大八嶋を修理固成
し給ひしも。地質の軟柔を固め成させたまふ所以は。其中に幾多の動物を住しめ。其の安寧を計り給ふ御寄しとこそ知られたれ。されば其國中の衆物に付て主宰を持別け定め。又大統の大君をも可奉產き運びなれこそ。徒に土地をのみ固むる事と見たらむは。古典を見るの甲斐やはある。なほ萬斯不變天地統一の大主宰存在て。唯に一時の愛情にのみすがり成立つ典故は虛禮にして。無窮に萬生を護持し難を見晴し。此に大主宰生產ざらめやと深思はし立たゝせたまひてそ皇大御神の生產し給ふにはありけめ。是そ我惟神大道磐垣の萬邦に獨り拔け出て。堅固に粹出する天眞煥然なる神業には有けり。先二柱大神の御心を碎き給ひし御功業より說起し。それより　皇大御神の大御名の義に及さむとす。蓋し神業は奇毘なりといふも決して義理の外なるものにもあらされば。神理神靈の上をも悟り得らるゝ限りを悉して。論らひ見むと思ふなり。扨諾册二柱の大神の八百萬神千五百萬の物を生成化育し給ふにも。天神より命せさせ給ふ修理固成の御言寄を。千萬に遂げ全うする事能はずと厚くも思はし振立坐は。上下に論ふ如く營み終ひたまへし事の。吾皇國の眞粹なる大基礎となれるものにして。神道惟一の掟なれば。外國の如き何事も天に托し。或は博愛主義として。朝君暮臣の革命を傳へ。帝王と雖も姦雄の爲に驅馳せられ。瞬時も安からぬ國狀と成行く類にたくらべては雲泥の差別あり。そも外國は修理固成に類せる神典もなく。徒ら才智のみに偏倚し。合集体組織に成り立ち輕躁浮薄なる空か國柄になむ。されば吾二柱御祖神はかゝる患苦をはやく千よろづの昔に知し食し。天壤無窮の大主宰を生成し給ひ。上下の差別を正定し萬古大御寶の安寧を思はし給ひぬる大慈祥の大御うけびに。感動神化せしなるべし。不幸ぬ神を生產し給ひてすら天上に登り御議り給ふ抔言る事は知らねども。かく無上至尊を生產給むとの至重なる事は。徒にせさせ給ふべきにあらず。先御占にもうらべ給ひ。亦身禊祭式をもおごそかに行はせられて。天神の御敎のまに〳〵なし給ふや明らけし。神典に何不生天下主者歟。於是共產日神とあるに心をつけて熟考するに。何字に深く力あり。又於是の下に事ありげなる文勢にて。自ら祭式身禊等の神式を執り行はせられたる。易簡なる神文の味をも覺り得べきものゝなむ。なほ委しくは下に云ふべし。　さて其の御計畫の典禮は如何ならむと推し考ふるに。二柱の大神の至誠懇禱千載一貫

の御精神を凝固し給ふ上から。先一速く身禊の式に取懸り給ふなるべし。然はあれど此度は常ならぬ神事なれはとて。緩急中正日向ふ位置等まで。いと懇に探り給ひ。初め速吸名戸を求給へども。こも御心に不祥として。終に筑紫の日向の立花の小戸の檍原に到り給ひて。筑紫に種々の説あり。昔時人を取り盡す暴神有るよりの名。又鴉鳥一名ヅクシ國形の似るよりと云ふ説あり。近來は姫神達彼國に鎮坐ますよりウックシの約りなりともいへり。比呂伎は此嶋一孤嶋たれど。昔時穴門の續きたるよりつゝき嶋の畧語と思ふなり。後の人よく考てお。さて日向の義は字の如くなるが。日向の意義い前にも述たる如く。皇基の根幹神道の大則是より尊く大なる盛典なし。橘守部大人い立花を水の立走る泡の義なりといへり。檍い東雅に柾なり。今の山萩と訓たり。比呂伎此の言の葉のがゝり匂ひを考ふるに。此ぞ朝日夕日の照り匂ふ所にて。こゝゑ御志す所の望み立ちつるより。いさや穢を剝き祓はめと。御心を狹め所謂小心翼々と慎み給ひぬるが御心に契り通ふ名稱と考つるは。餘り理りに過たるにや如何ならむかも。言擧し給ひつらくのみわるなり。上つ瀨は瀨早し。下つ瀨は瀨弱し。於此中瀨におりかづき。御心を盡し給ふ甲斐ありて。此處は朝日の直さす中正なる處といたく喜ひ給ひしなるべし。これそ天津日に向ひまして。天地元氣衷和ずめる望の處を探り得。言あけ給ひし文勢なりける。誠ゑ是秡戸祭祀の式は。皇國無上至要の神式源緣にして。敎の由りて生ずる所なり。中古の宏儒と聞ゆる人々すら。徒に道は中和の道とのみいへれと。日に向ひて清め神威の尊きを專一と爲し給ふこそ。又殊にめてたく上なき尊き神業にして。本邦自然の惟神の道なりけれ。日向の事の由い。大和魂の源則なれば猶それにいへば幷せ見るかし。

かく言ひ以て往く時は。古事記を誤りにかと言ふに然にはあらず。聊か傳の紛れたるのみなるべきが。その事下に言ふべし。徒に豫母津國の穢をのみ秡潔ひ給はむとならば。何れの海邊いづれの川邊にても。禊除のわざは足ぬべきを。殊更に國々を求め撰ひまして。其の所を得て。いと懷に悅ひ。覺えず大呼し給ふ一聲のために天と長く地と久しさ。感格を萬生にあたひし餘響の。今に耳朶ゑ觸れ。迷夢の頓に覺ぬる比呂伎は心地して。驚ろ〳〵畏こくなむ。深き御謂れの有りてならじやは。次に祭典の事に。御心を盡し給ふことの。無上の御神業なるは申すまでもなく。その祭式も必ず二柱大御神の嚴重に執行せ給ふなるべきも。遠き神代の初の事實の。委しき事の漏れて傳はらぬこそ遺感なれ。天の石窟戸の祭式も神々深智を盡し給ふは元より論かけれど豈憑る所なからまじやは。大畧此時の神事の式禮を根據としたまひしや、うづながるべし。代々朝廷の祭式も素より此に基源し。確例とこそなし來にけめ。いでや其の神業を言むに。祭式は必ず神籬立て。榊木を根こじにこして。千座八百座に供物を置高なして。瓊鏡白青の和幣等を採

りしで給ふ事の神式なりけらし。古傳に伊邪那岐命曰吾御子雖多未有若此靈異之子不宜留此國也即其御頸珠之玉緒瑲々然取由良迦志而賜　天照大御神而詔之汝命者所知高天原矣事依而賜也故に其頸珠之名謂御倉板擧之神云々。さて此の頸珠の事は。下照姫の御歌に。阿妹奈屢夜乙多奈婆多廼汗奈餓勢屢とある歌の解に。契冲の説として。宇那加世流は所嬰なり。日本紀に。以其頸所嬰五百箇御統之瓊と云ふを。引證とせしも。其クビニウナガセルと讀ては當らぜ。頸所嬰三字を直ちにウナガセルと讀みつくべし。和名鈔に頂は頸とあるにて疑ひなし。汗奈餓勢屢と云ふにて。書紀の口訣にも頸に嬰る事なりと云はれき。故頸珠を宇奈賀勢多末と云ひて。和名の宇奈之とあるに當り。グビとしも云ふはこぶ物にて。ウナガセル玉緒と讀べきなり。さてウは心を指し。ナはノてふ互仁遠波に同じ。ジは後の義。即ち胸後より懸けて胸前に垂るゝ飾りを云ふ。其一例を擧れば萬事心に根刺し。動き促すを主として云ふ言辭なり。萬物皆心を根とし心化するより。活きてウネとも云ふなり。產根心根など。皆心に根さすより出でたる言辭なり。ウ音義の心情運用するは。有音は元來五聲の正中に位するより。自然ら中字の義となるのみかは。統てウカレ。ウレシ。ウレフ。ウトシ。ウラム。ウラメシ。ウルサシ。ウラ。の類にて內に心の隱れて外に見えぬ物なるよりの名にして。萬葉に心もとなしと云ふを。ウラモトナシとよめり。「春日さす藤のうら葉のうらとけて君し思はゝわれも頼まむ」と詠めるウラも心をさし。浦安國もこゝろ安の國と云ふ義。占も心合ふよりの名と知られたり。ウ音義心中の中正より動きそめて。其至るや大且盛なり。造化大元神の御心をとり動がし感格し得べきものは。此の胸懸の寶珠なり。主と榊木の上枝に取懸る神式と了るべきになむ。後に此の御珠を　皇大御神に懸け奉り給ひしも。一條傳統の神授の御璽にして。深き神理とこそしられけれ。此の靈珠を古史傳に師の説として。祖神の賜ひし重き御寶として。　天照大御神の御倉に藏め。その棚の上に安置し奉るを以て。祟祭りたまひし故の御名なるべしと。此説もあなかち賴みがたし、こは後の事を以て名に負せては違へればなり。總て神の御名は其神の功績の傳にて。神の運き御事業を以て。やがて御名に稱へ奉る國風なるは。前にも述べし如くにて。此大祭を執行ひ給ふにつき。千座八百座に種々の供物を置き足はし。幾棚となく整列せるが中に。主と奉るは此珠鏡なり。故に此頸珠の神運靈魂の活きに依りて。　皇大御神を感應醇化生產し給へる御馨德より。御倉棚神と奉稱る起源にして。魂は珠に同じき言葉の成立なりと悟るべし。珠の用たるや魂にて。造化大元神の御魂を此珠に奉托覺賜ひ。伊邪那岐の大神に授奉れる珠にして。大元神の御魂を祈奉る。感動主一の靈器にして。常の器にあらず。御招玉の解は橘守部大人の難語考に云れき。合せ見るべし。此を以て造化大元神の和魂の化生し坐しゝ　皇大御神なるを。代に表章示顯し諸神に嚴重に欽聽せしめむとして。母由良爾鳴り動かし。給へる御手振り也。後世號令の爲に用ゐて鈴を振り驚すも。蓋し是等に基因するならむ歟。是皆　天照大御神の

御上ゝ係る祭祀の神證なる事を伺奉るべきなり。次に榊木の中津枝に眞布津鏡を取つけ給ふ。マスミとは眞澄の義。明鏡を稱へ奉るなり。マフツは天神の和魂を分け下し賜ふ所の神理。止布神の釋と見合して知れ。登い心。布は心の用。振らむ振りの心の活用左に振りもらがしの義より。麻布津の鏡と名を負せしにて。二の活用たり。上に釋たる普き意をも了知すべし。或説ゝフツの言魂に切斷の音よりの義なりと言るい漢音にて。寔はフのふくみ。ツの續くにて。化生し給ふ一證なり　なほ其眞理を進めて言はゞ。造化大元神の御魂の玉に移り現顯まして。その靈鏡に凝り附き給ひし神蹤の。萬古に存在すべき神謀りにして。天石窟の段に。　皇大御神の御心の御鏡に憑托坐すべく。計り給へると同し御し業にて。天神の御魂の此珠の動くまに〳〵御神體のきらとめら〳〵現れ化醇生産せるを。此鏡に移し止め奉るの神業にて。化工妙用の神則になむ。書記の一説に。欲生御宙之珍子。乃左手。持白銅鏡。則有化出之神。是大日靈尊とあり。是即根こじにこじて奉る榊木の中津枝に。取り掛る御鏡を。左にさゝけ振り賜ふ祭式に生れ給ふ証文にて。嚴の御魂の御名の解などに云ふを見合せて知るべし。是ぞ諸册二柱の大神の丹誠感應の至れる處。遂に創化大元神の御魂の。祭祀に御生まします緊要なる神傳にて。則ち心化の　皇大御神にますを表證したる。神證神訣なる事よく〳〵了解すべくな

む。亦左りの眼に成り坐せりと有るにても悟るべきぞかし。そは如何にと言むに心化と氣化とありて。心化は性情の凝結勇進感通和應して。化生しませる事は神書の通理なれど。徒ゝ眼を洗ふに生産し給ふとのみ思ふは淺はかなり。大舜の彈琴して南風を化生し。齊婦怨を帶て六月飛霜も。皆心化の致す事。代に數ふ可にもあらず。　五臟六腑之精氣皆上注于目爲之精。又韓詩外傳に。目者心之府也。神相全篇にも。目は心田也など稱へる眼目なる所は心化に成れりと云に同しく。心に屬する事を了るべし。目と云ふも目は心の精華の所集なればなり。心を目にかけて云ふぞ古來よりの神訣の一例ゝして。美斗能麻具波比は或る説には心の相通ひあふに釋もあり思はざる可らず。此に形化は鼻に關する事なるは。こも亦神典の一例なれば。古事記鼻を洗ひませるによりて生れませる神の御名は。建速須佐之男命と稱す。本記一書に。廻首顧眄之間則有化出神。謂素盞嗚尊とあるは。專ら情と體とに因れるを。廻首顧眄の四字を當てたるに心を付くべし。所謂鼻と云ふは。妹妖婚交の形氣に生産し給へるを申す神訣にして。則揚子方言と申す書に。鼻始也。人所生謂之首。梁益之間謂鼻爲初。或謂之祖。又曰。人之胎胎。鼻先受形。故謂始祖爲鼻

中略

祖とあり。芥子園曰。凡人之百骸。未具鼻準先ッ生ス。和漢其理を同くす。形化ふ鼻と稱す。鼻のはは先に現はるゝ。花また、葉、齒、等の音義なり。扨は國津神猿田彦大神は。大土の御祖に坐すを。御鼻にかけて。神德を論ふ蜜訣に。心を潛めて考ひなば。自ら悟りも早かむめり。さて鼻は地氣の上りて。山の象を成し。動かざるは則形体の象。建速須佐男大神の御上是なり。此の大神は。自ら地球主宰たる神理靈奇の妙旨を始めより備へ給ひつれども。自ら退去し給ひし事は。また幽理の止む事を得ざるよりして。神典の綾に奇しく。皇孫の天降給ふ惟神の道あるを深く遠く仰かざらめや。かく言解き行かば眼と鼻とより化生し給へる差別は。易の化醇と化生と判ちたると同しく。二典の編者の古傳のまゝに移し書ける妙訣には有けり。さてまた左眼を洗ひ給ふに生産ませりと云ひ。又鏡を左ふ觸り給ふに化生すともいへるは。共に左に寄りたる言葉なりとして心附く人いと少けれど。畢竟左は皇國の殊に重みする所。神道の尊ぶ所是より基原せざるはなし。故にこは伊弉諾尊の。專ら先動勇進の精神に成りませる狀を。伺ひまつらるゝ文勢にして。右に成生し給ふ事は。伊弉冊尊の祐助保和の精神の先進するが主たるべき神訣也。然れど一神にて化生とな思ひ違ひそ。妹妹の御心の相和み通ひ逢て生ますやうづなし かくて左の言義を茲に言はゞ。比。

多。利。の意義は　天津日の東に生足り剛明晋上して。其御ふほひの滿ち足らひ行く。即日足の義ならむとぞ思ふなる。美岐利の釋に三ッの按へあり。一は朝日の足り匂ひ昇り給ふに。まゐ向ふを日むかしの言葉とせば。南の方は右手と成り。メミ唇音相通ひて和らぎうるはしく。中に仁慈溢れ。外にキ音の剛明晋上光溫發射して。リ音の活き助字に組ては。右の言詞と成り。天傳ふ日の南に射向ふ御影ふは。萬の物のまさやけく影に隱れを置ず。ミナミル言葉は万事整ふキ音と理會するを見れば。ミキと は稱すべし。東し又は日足の義に對しては。南は則ち右手の方なるより。ミギリの言魂と成るも知る可からす。又西の方は背後にて顧盼して見るへし。ミサカリのサカの約りキにして。又ミギリの言魂也。此れはた身を振り切て見るものから。身切の言魂と成りつるなむ。さらば諸冊二柱の大神の大婚禮式を。執り行ひ給つるをりに起れる。名稱言詞なるべし。二は伊佐那美の美。女の象にして。メと相通ひて陰の象。日に千頭を縊り殺すとある。クビリの約りキリとなる。　秋冬肅殺の氣を指して名づくるにて。陽の殖え行き足り榮ゆるに反して。切りそぎ行く天地の順環氣候上より起る。唐くさき說ぞもなり。三は月豫美のミ

にして。月日の旋廻より起る言魂にて。月は一月一たび回轉しながら。右にしそきつゝ　天津日を切り退く天象なれは。美切の言魂と成り立てるにや。とてもかくても自らもこちたき說事と考ひぬれど。別に思ひ當れる釋もなければ強てかくなむ。後の人考の端緒とも思ひて。試みに言ふにはあなり。さて何れにしても左右の序次は禮秩の基本にして。春ははり秋は明き。天地自然の象にして。聊かも移し換ふる事を許さゞるは。皇國の大典にして夫唱ひ婦和し。男女先後君臣の大別親子の秩序は。左は左とし右を右とし。君々たり臣々たるの法則は。些も差別を亂すことなきぞかし。斯く禮敬秩序有るが故に。國は萬千秋長五百秋の君子國なぞの美名もあるなり。夢にも自由主義など唱ふ類と齒すべからず。　さて古事記の身潔の段に。左眼を洗ひ給ふに成りませりと稱ふるは。いさゝか紛るゝやうなれど。祭祀は禊祓を本とする理義に基く。故ゝ如此傳へ來しならむ歟。又一說の祭祀執行の事は見ゐずして。只に白銅鏡を左右し化生し給ふと說くは。いとも言少にして。足はぬ心地はすれど。大御名の　撞榊木稜威御魂と奉稱る。如何にも御祭の狀なる事まさやかなり。よく〳〵心を付て見る時は。三典を集て一條の懇祈大祭事業を經營し給ふ勿

論いやちこなり。かく二柱大神の深く心を勞し厚く思ひを凝し給はでは。如何で無終の大主宰を化生し給ふべき。此の御鏡を左右すると有るを後來の遺風を以て推考するに。祭祀の原式に非ずして何ぞや。前にも言ひし事をかくいく度も重ね云はむは。予すら頭の痛む心ちのせらるれば。まして餘所目にはいかばかり五月蠅からむと思はるれども。皇道の基礎にして。萬古に宇宙を維持し。準て皇風を無窮に興起し給ふ。國粹の根さす所なれば。心にせきあへすて返す〳〵釋になむ。後に天石窟戸の大祭に。神實（ザネ）として鏡を造り獻るも。此時の式に準らへ給ふもうべな〳〵。大祓に千座置八百座に置足らはしと遺文のあるも。實は此の時の古實が濫腸なるべしと思ふ由あれども。事長ければ此にいはぬきつ。　抑天地無窮の大主宰神とます質性（ミタレヤニヤ）の。光輝無邊靈德徹裏の　皇大御神を化生し給ふは。容易ならさる至大樞要のことにして。化工自在の諸册二柱大神すら。禊祓祭禮懇禱して化生し給ふ神代の風の。今に著明（イチシル）きを伺ひ奉る事は。偏に古事記と書紀の二書の殘れりし餘恩なり。比呂伎嘗て皇典に種々異同の說あるを深く憂ひ。何れを眞とし何れを僞とせむと。千度百たひ胸突でと煩らひし事の有りしも。かく考ひの緒（ナ）を尋ね。綱手引はへ道知るべし。山口を得て搔き別け登るに。いかに麓の

道はおほくとも攀ぢ登りて視たらむには。一つ峯にこそ輻輳しつらめ。今や其が高峯より見晴らかしては。遠こちの隔なく。大かひ小かひも尾上に續き。同し峯に纏りて。雲も遮ぎらず霧も曇らず。あな面白くあなさやけくてなむ。

天祖御出生のことは古典中きはめてたふときところ。國民たるものよく考究せさるへからず。をのれ容易に君の說に從ふこと能はず。されと書紀の本書一書をよひ古事記の三傳をあはせてかれこれよくよく彌縫せられたるなと。感するにあまりあり。殊に神業は奇昆なりとて。義理のほかなるものにあらされは。神理神靈の上をもさとり得らるゝかきりは。論ひ見むといはれたるところ。古典を讀む人のためには。いみしき敎とやいふへからむ。

落合直文

かけまくも畏こき伊弉諾伊弉冉二柱の大神の。吾は已に大八洲國をよび山川草木を生みき。何ぞも天下の主たる神を生まざらめやと詔たまひて。吾が皇祖天照大御神を生れましゝことは。書紀の正書に傳ふる所にて。古傳の最も正しきものなるを。其が上に日向の橘の小門の檍原の大身滌は。其を天津神に禱りたまはむための大御祓まして。左の御手に白銅鏡を持ち給ひしは。やかて天津神に禱りたまひし。大御祭の神事なるを。古事記にも書紀の一書にも。おの〳〵其の片端のみを取りて。或は其の大身滌に生れまししさまに語り繼ぎ。或は其の御鏡によりて化りましゝさまに言ひ傳へたるものなりとは。是れなむ山本比呂伎翁が。此上なき卓見にて。まことに古人未發の卓說にはありける。是れにて古事記書紀の異しき傳へも。一筋につらぬきとほりて。また疑はしき隈もなし。世の古典を伺ひ讀まむ人等は。斯く明亮に讀み破りてこそ。千よろづ歲の神代の事實も眞實の狀は知るべかりけれ。但し其他の論の中よていかゝそやと思はるゝ節も有なれど。されど此の論のすくれたるに愛て。賛成の一言を書きつけて返し參らすになむ

明治廿六年六月一日

川合清丸拜評

第八章

皇大御神の御名を釋す

謹みて考ふるに。言卷も恐こき　天照皇大神と稱へ奉る大御名の意は。即字義の如くにして。古史傳に說れたると變る事なければ云ず。まづ　大日孁貴とも御祖二柱大神の賞め稱へ負ふせ奉り賜へる大御名の義を。約めて說きなば　大姫尊にして。御子の中にも綾ゝ尊く。珍くすしく御稜威のあてにけたかく。大御軀の光の勝れて。美麗。健剛靈奇天地のそこひのうらまて。射照り給ふ御馨を具ひ坐し。無盡の玄機を統括し。慈祥は萬生ことゝく恩賴に洩るゝ物なく。玆に造化主に代り賜ふ眞理は。下にも釋す可けれど。また音理上にも自ら備りふゝみぬるがその密理精義は一音毎の釋より。二音三音と組立つる言葉を。まさぐりて初めて概略をも知るべし。そも吾が神國は言魂の幸ふ正しき國にして。言詞の搆成は萬邦に比類なしと言誇らむも仲々に愚かなり。されど國語音義に疎き人の爲には言ざる事を得されば。今は一音に一義性質の備りつるを。曉き空のうすらゝ。夕づく星のまれゝに釋つるを。自負誇稱なりと人はそしれど。言魂の林にまた世になき花の薫りを知らずやと。指し示しつるを。老婆心として痛くな咎めそ、

そも大姫尊の六音中の(オ)は。阿行五元の第五位に在り。いと底津磐根に太敷く推し張り。萬物の基礎には有けり。今現に見放る大陽は上に仰き見るも。其所の位置は宇內の眞極中正に本位を居たり。（國底は地球の眞中をさすと同しけれはなり）故に五十連音中。蓋しオ音より底深く根蟠り剛邁なるはなし。オ音はウ音の萬物を含蓄し。諸音の父母と成るを親とし。イ音の平正直進の象と。エ音の橫ゝ蔓る象を帶ひ。底より生立ち。左右に推張る强勢は。即ち喉腹より力を籠めされば。產れざる音なれはなり。神字は(ヰ)如是にて自然たる神理より現れ出るなるべし。そが勢ひは立ちて撓まず。橫ゝ交錯し左右に山を推しひらく力を形象として鎭靜剛健なり。そが言葉の例は。親。奧。老。鬼。大。などにて。をぞましく。底意の强き理義を了るべし。空海は神字直昇の畫をゝの一點に代へなし。縱橫地を替。推し張る勢を(お)の草體に合せ作れる事論なし。片假名は漢字

の於の邊をとれども。於は方に從へば神字の傍らを取たるなるべし。片假名體中に折〳〵有り。今のは漢字より取たると思ふも當らず。

(ホ)は。ほがらかに輕く立ち昇る象に。皇大御神の御生質のまに〳〵。御光の火のけ秀(ホス)進み。鋒(ホコ)の先のするどなるがごと、大陽の光線一抄時間に。幾億萬里に射照する勢の温素を引て。如何成る礦物金鐵も。溶解凝結集散離合の活動を起すも。御光のホ音の作用に有けりホはまた隱顯出沒和して顯るゝや火の如く。星また螢のホにて其隱るゝや形質を見がたし。則ち和らかなる音なれど。何とかく底意の強く鋭(スルド)利き意義の含まりたるは。ホ音を發聲するには。口形のそほまりたるに成り立てばか。ホは母音オの強き性を帶び。プの含みふくるゝ父の性に引き伴なはるればなるべし。即ち神字(ㅎ)は斯の如くにして。現はれては。火。穂。秀。帆。の如く火の進み出る音聲となり。ほの〳〵は二音を重ねて薄赤く明行象を成し。晋(スス)むや彼の所謂炎(ホノホ)の象となれり

けり　空海は保の草体と。神字象を取りて。ほに作る論なし。榮花物語にほゝと笑と云ふ言も。輕く和き温(ホノ)を含みて。秀にづるなればなり。忠房卿の歌に「きゞす鳴く野邊を霞につゝめどもほろ〳〵もれて聲のきこゆる」是れ正しくほろうつ聲の和柔なるなり。故れ神字は中虛より起筆し。物質に結ひ燃昇る。火の理象を兩全するこそ驚ろけれ。　亦化學

にて究むれば。火(ホ)はエレキといへども。特に諸元素中にあり究めがたく。靈なる一元素たりといひ。又は三質ありとも云ひ。火の神の三段(ミキダ)に切られ給ふに基因するなるべし。その變象等の說區區(マチマチ)あり。蓋し其体象は。有無の間に存在しながら。物に就き適當の性を具ふるなり。見よ年時の同じき義なるト音と組合して。ホド(程)と云ふにても。始めより一定の適目有るにあらず。またその折にふれて適合する意を兼たり。事により物に就きて適中輻輳する　ホはヒの廣らなると靈奇なると。フ音義の理想なる事を。ホ音義の現象と知れたり。

の太く普き義を父として。オの底深く強きを母とせるが。故よ自ら在亡(アルナシ)の間にありて。一たび御身を隱し給ふ造化元神の。再ひ　皇大御神と現れ給ふ抔の。玄體靈機の活と成れる音理なり。

オホ二音義の組織したる言辭は。オの太しく強き義の自性なるより。大の義とも移して活くなり。ホ音はソ音に添ふ時ハ。ソポマリたる象となり。延るノ音に添りては立ノボル象となりて。活動明滅を本性とす。波比布等の父兄の性を帶て初めて大の義を成すと知るべし。　されども常に云ふ大の義と神訓の大(オホ)の義とは。聊か異りて物象の廣大に附きていふのみならず。萬象の根底に存在し。隱顯明滅不可測の象を帶ひながら強くも太くも聞ゆ。是則神理の然らしむる元には有りけり。オホと云ふ言葉は。惟

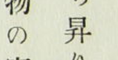
神太古搆成のまゝなれば音理上より言分け行ば　皇大御神の御上こそ語れ。漢國の文字渡り來て。大の字にオホの訓を當しより後は。ひたすら廣きことにも通したり。オホの義は全く剛且靈。御稜威のいがしく向ひ不可近。今ゝ仰て大陽を奉見るに。眼な眩(メクロメ)きて正眼にさに視がたくいと恐し。皇大御神の一たひ高御座に坐してより。萬生妙靈に浴し物各其生を遂るは。此の化工の妙機を採攬し給ふ。恰かも此のオホの二音義にくゝまりたるを皇國の眞傳には有ける。音義妙用言魂の玄機は知る人に存す。嗚呼。音理に關係する大且盛なりと可謂なり。恐こけれども　皇大御神の御上釋分け聊か言はゞ。弟の命をきため給ふ御たけびの勇力の嚴然なる。向ひ不可侵は更にも知る。又弟の命を善化し給むとには。身を言はず。さすがの武雄の弟の命も恐れ給ふにても知る。又弟の命を善化し給むとには。身を磐窟に隱し。自ら弟の命を本心より直し給ふ慈愛なるは。彼の大智と稱する舜の弟を叉め。やうやくにして姦りに到らざらしむるが如きの。類に非ざるにても知らるべし。

かくオホと御名を奉稱(ハタヾヘマツ)らむも最貴(イト)き事になむありけり。

扨て(ヒ)音義は。天津日の象にして。廣き現象を第一義となすなり。ヒ音はフ音の萬象をふくむを父とし。亦神氣を司る伊伎の二母音より生れ來りしゆゑに。生々化々あてにけ高く。あやにいづかしく。其が煦育の廣く大なる象。大陽より大なるものなきを以ても知るべし。其が廣大測るべからぬより。くしびなる活動きに推移り。第二義の靈奇のはたらきと成るなり。火の出沒隱顯火に似たるより通しては。火(ホ)をヒとも云ふになむ。氷をヒと云ふは。ヒの元來火の象体に非ずして。靈氣絶對の象なるが故に。氷の寒冷極度に至り。氷結して平面光りを生ずるより。唱呼となる歟と覺ゆ。人のヒは萬物の中に。殊に靈を占て廣く活動し。又よく其の止る所を知るのトと。組み合せたる言魂なり。或說に人の意義は。一をヒとし。十をトとして。人は一より十まで兼備りたる名稱と云ふは如何ゝあらむか考ふべし。ヒ音はコ音に組て。キの彦と成り。またメ音に組て。ミの姫なる言魂を生む。男たり女たるも。言魂の源理ハヒ音義より生せり。其の體たるや廣く。其の用たるや靈にして不可測を知る。

さて神字形象は(ヒ)斯の如くなり。ヒの片假名は其の神字の大體と。漢字比の片象によりしなるへし。故空海はいと巧にも神字形の漢字比草体と類似せるに思ひ合せて。中央の畫を右に移しひと作れる事論を俟ずして明なり。總て此僧は紛らはしき筋を好むくせありて。神佛を混合しぬるが。さては紫の朱を奪ふを惡むと云ふものなれこそ。噫

次に(メ)は。江の蕃茂發榮する勢氣を帶ひながら。麻行武の定りなき父の性を含み。その象や草又は木の芽などの出づる意に合せて知るべし。女をメと呼ぶの類。其意の活用也。眼は一身中の精氣の集り發勢するよりの名にして。即ち。感目珍(ソンジメ)の類推して知るべし。メはモエの約りなるより。根芽の發達を促がす理も。艸木の發芽象も。日の象も字形

とまた同じ。故に亦自然の象形も（乙）如斯なり。眼波の横斜するも則此象なれば也。そは下の點形は眼精または種子の形。立ち昇りながら屈立するは。實種横芽の延立る幹の象形なり。上の一點は若葉の象。さて物の實の（  ）如斯き象形の中に。既に萠芽するの形象を具ふ。是れこの種子の中にもとり分けて。楓胡桃はの神字象を形成し。空海は美の艸体とを混して。（み）と作りたるは論なし。太諄詞考に合せ見るべし　五穀其他の種實中。メは實の中に上圖の如き其象顯然たるものにて。神字は理象兩ながら悉く備はりて。原より人のわざにはあらずかし。其運用の妙を神の垂示し給へるものなる事。爭ふべからざる理になむ。あなかしこ實に其人を得て共に語るべく。言靈の神理を知らざる人に語るは。盲人に負せて色を辨せしむるが如き感あり。さて片假名は神字斜めに延立つ發芽する若芽の上なる點の。丶を中に移し。メと作りたるは。梵點涅槃の字形に混し。空海は女の物を生立義より訓により。女字の下畫メと混和し。作りたるや疑なし。片假名は吉備公の作なりと申せども。神字と同形するあり。いろは假名と何れが先なるや知るべからず。片假名神字形と同しき象の多くあれども。また後人の作りかひたるもありと想像する事もあり長けれバ此には畧きつ。　女の古字は「屯」の字に形も意も似て。出産母子の困難の情も思ひ合すべし。　女の古文「厄」如此。屯の字象に似たり。屯は說文に難也。象二艸木發生然而難。以ㄅ貫一。一は地也尾曲。周易曰。男女始交而難生と。屯の卦上に曰く。萬物發產之屯。這。根芽曲りくねる。メの母字「エ」の字即「乙」の如き首尾の曲を云ひ。說文の義と意を同するにても知るべくなむ。故に女の字義を空海の取りしは。女は物を產むこと芽の如き意を取れるにて。「女」字なること疑ひなし。古文字の屯、厄、の似たる出產の難きより。女、屯の字に作れる意上に向て求めなば。思ひ半ばに過ぎなむ。メは麻行撓曲るの象にして。武の父の萠えふくれ含む象の性をうけ。江の枝葉の横たはり榮ゆる字形を母となすなり。發芽の榮ゆむとする際の困難に腦むを斜に象り直進せず。なよやかに曲り出るものは。麻美武を親と成せばなりけり。或る說にメは面の草体めぐりぬる象と。音とに依るは。女字の訓に取るをきらふなるべし中畫の形直からず。字形を神作し給ふことも。仰げばいと工のものならずや。されどメはみに通ひて美麗はしく。愛惠等の義を帶て。御にはひの光華明彩の象をなせり。

ヒメの二音を組つる音義の漢字の「姬」に當たるは。大かたさる事ながら　皇大御神を。ヒメ神とたゝへ奉りつるも。通常の彥姬と唱るとはいたく殊にして。ヒの廣大無邊なる奇靈にして。例のイキ二音義に通ひ進みて萬斯不變に撓まず。いよ〳〵出でゝいよ〳〵靈しく。萬物の父母となりてメの慈祥なる衣食の大源までを萬民に授

け教へ給ふ事抔は更にも言はず。今に須臾の間も何物が恩澤に洩るなき恩惠は。大御軀より發射して千代萬代無終の御光りを放ち。萬物を涵養煦育し給ふ生成の化育は。恰も慈母の兒子を産生涵養するが如し故にヒメ大御神と奉稱る事なりけむ。古史に宜圖造彼神象あるは。御鏡なれば。神々の御上すら恐こくて御すがたの視定かたく。光彩の嚴しく坐す物から。目も眩きてたゞ〳〵圓らかに視放奉るも。日矛の象に御鏡の恰も似たると奉祝られていとも奇しき事ならずや。

(ム)はマ行の本性の虛靈輕實にして。亦母音ウの空裡有勢を帶るものから。含畜發音の勇壯にして。勢力の音となれるなり。しかして內に虛靈可指定もなき活氣を含めり。神字の原は蓋し(ん)の如くなりしなるべし。うちに寬澁して至妙にも外にあらはれず。故に古はん抔の定がたき休にかけるを。空海が武の艸體むに合せ。又片假字は略してンムとなし。字形を神字中に摸し略し活かせて作りけるにやあらん。扨(ム)の音義の活用は。本性の輕浮は鵞毛の如く。其靈妙は絕對なる物にして。無聲なるが如く。內に至妙なる神氣籠れるか。無の漢音を(ム)と呼ふも。自から絕對より呼び。無より有を生する漢臭氣に音を附したるにや。さらはいささか其の味を同せるは亦鹽

氣あるに似り。斯く(ム)は無の如くなるを以て。神字形もおのづから其理狀定かならざるなり。ムは即宇宙に森羅萬象を備へながらも。確と見定る象はなきより。おのづから疑辭と成れるなり。況てや母のウ音義の含まりて。外に現れず（麻行は唇音和き廻り美實にして虛。虛にして物の滿るさまあり。活氣中に含藏する象なり。）虛空なるを覺るべし。

(チ)は太行の津を父とし。母なる伊音を帶ひて緻密不究より。圓體ころゞ生動に從てふゝみ。自ら圓融自在又縮散なる象をなせり。試に知れ。水を火中に散すれば(チ)音生す。粒々圓形是れ自然の象。天地惟神の理体は構造設作に非ず又よく集散離合も其活用を欠かざるは。所謂圓滑の形。即ち神字は(〇)斯の如くなれはなり。故に血、乳、千、契、などの義を成し。又、散、少兒、などの義に活くは粒々細小の象あればなり。其音性の又自然に締り有りて。前に論ずる如く且圓らかなる地球をツチと神の名付給ふも。自ら集合則圓體となるは。恰も血の心臟に集りて復た粒々圓く滑らかに脈の中を流れ。千々に分れゆくも。其活動止らざるの象。所謂道血幸路等の言魂となれるなり。途を異にするもその歸を同するよや。智者動、智者樂、と云ふにも思ひ合すべし。さてこ

そ(チ)の單音義の活動の妙はげにまろかれたる意を含むを知るべきなれ。智に唐韻(チ)音を附たるは。實に感ゝ堪たり。智周二于萬物一と云ふは。用の廣きを云ふなり。蓋し智は禍(マガ)をも轉して福となし。天地覆載の間。生物皆こと〳〵新陳代謝化運循行して。かりそめにも此土に存するもの。一として此智音理に依らざるはなし。されば。かへす〴〵も智の神字形のまろらかに。孛環の端なく運化靈機の德をかねたるをも知るべきなり。是はた國常立尊の知にして。片假名の(チ)は太行の多き意象に取り。空海の假名は知字を草畧して。神字の圓勢に倣ひて(ち)とせしなるも。專ら漢の草體のみに寄るに非ざるを知るべし。

ムチ二音の言葉の組立。ムは絶對不可測。言語の及ぶ限にあらず。チは智光圓活障碍なく尊字よく當れり。大にして無際の恒星に光素を及ぼし。小にして海底の藻に到るまで溫素は蒙(カブム)り。洩すことなき無量智光。慈祥神力の勝れて高きをムチともいふべく。いと畏けれど此音義に　皇大御神の御稜威自ら顯れ。光輝照徹六合無上の至尊に坐して。萬物一として此神恩に漏るゝものなき事を。感せずんばあらすなむ、下の武智の釋に合せ考ふべし。然れは自餘の神々の御名にては。徒モチとのみ稱へ奉るべきなり。大名持を(オホナムチ)と云へるも正しからず。モチとのみ稱へ奉るべくなむ。故にムチは特り日の大御神に限る尊稱と心得べきものなり。さて言の葉の上又漢字の義より稱へ奉るときは。大姫尊と申すも深き謂なき樣に聞ゆれと。六音の言魂は自(ミヅ)から御名乘り給ふ。天榮向勝(アマサカムカツ)姫尊と全く意義更る事なく。和魂荒魂奇魂の三魂の毫も缺くるなく。充實全備し給ふ。御盛德の理由にまでひゞき渉り。神韻の音となひて。御祖二柱大神すら珍(カツ)の御子と驚き給ひしを。如何で翁か如き短才淺智を以て。五十鈴川源と遠き清き眞砂の其が一をも數ふ可き事かは。あなかしこ。

さて比留の(留)音は。言葉を確むるまでになむ。かゝれは　皇大御神の。御にほひは御生ながら御備り。靈光無盡六合の表裏に照徹し。言しらず尊くまします。紀に比屢(ヒル)賣と留音の添へるを。年まねく怪しく思ひつるに。さてしもルてふ添辭は。徒に助辭のみならず。原よりラ行は形狀等を定るものにして。語勢を確むる爲なれは。　皇大御神の御上の。天眞素靈の御性質(ミアレ)のまに〳〵。御稜威の充ち足らひ坐する。殊更其上に慥かむるル音の添りぬと思はえずてなむ。垂仁天皇二十六年。　皇大御神の倭姫

命に喩し給ふ處に。我朝御饌。夕御饌の御田作る田堰水仁波田蛭穢禮波我田爾波不住云々。蛭てふ虫は陰物にして。冷濕なる汚水に住みて。穢血を吸ふを忌みきらひ給ふなるべし。また稻の害を爲す艸を。ヒル藻（ソコナヒモ）といふ。ヒルはヒユルの約りと云ふ說なりさも有る可き歟。物部徂徠曰く。ひるこに。蛭をかき。ひるめに日をかけるは。本義にはあらざるなり。二柱ながら。ひるといひて。子と女とにて。男女を別たるまでなれば。元來の義おなじかるべし抔と事も無げにいふぞ。腹を抱て大笑すべし。男女のけじめは言まで も有ぬが。ひるめに日を書るは。本義に非すとは何事ぞ。また元來は義同しかるべしとい。大小及び神理を辨へぬ僻者にこそ。されとルと書けるより蛭子と同し義と心得たるが故にいで來つる誤と思へは。いと憐むに堪たり。原より　皇大御神は。大陽の大主宰に坐すに。陰冷物の名を負せ奉る。御名は如何ならむ。蛭子の神の御名の上に。忌嫌ひ給ひる神慮をも。思ひ合すべし。　皇大御神は。生産のまに〳〵教養なと。聊もかり給はぬを。　皇大御神にル音の形狀拘束なるル音を添へたるは。是れはた。　皇大御神の御匂ひの上に。おきて如何にぞや。恐れ多きものとぞ。比呂伎は思ふなる。かゝる言靈の玄義は。口授にあらざれば切に感得する事あたはさるを以て省きつ。　皇大御神の又の御名を　津伎佐加伎伊豆御魂天佐加留武加津姫尊と稱ふ。ヒメとのみ有りて。ル音の無きに心を潛めて可了なむ。

こゝに楠正成公のもしや君父を怨慕する念の生する時あらむには。必す　皇大御神の御名御德を思ひ奉るべし。天地の大おるも人猶怨むる所ありと申す事のいで來ぬればなり然すれば自ら煩はしく思ひ惱む念も消えゆくべしと言れしは。そも如何なる金言ぞ。深く神理の幽園に游優し給ふと稱べし。かゝる神理は。ま心の幾微難探き事なれど。今試に考ふるに人々怨慕するは情の或は不免る處にして。素來り心理學上より言持行ば。荒魂のはたらきなるにこそ。　皇大御神を念ずれは。やがて身禊懺悔の一にして。和魂よ復る緒なれば。其糸口に因りて。　伊勢大御神は日大御神則和魂に坐す物から。和魂はまた荒魂を兼たるは。大國主の和魂なる大物主神の荒魂を兼ね坐すに思ひ合せて知るべし。人々の和魂に復元するより。御光りの射照り通り。御稜威の調和につれて自然融暢して。怨慕の念の消行く理の語りにこそあれ。噫楠公は智勇勝れ坐すのみならで。神幽復元の學室に遊び給ふとおそましくまで恐こくてなむ。人々常に心の御柱を。下津磐根に太敷立高天の原に千木高知て。　天照皇大御神を初め八百萬神に祈念して。心身を忌み清め。神秘の太諄詞を心の底に唱へて。夢な忘れそ。さて　津伎佐加伎云云と　皇大御神の御自ら御名乘座る大御名

はしも上りたる代より今の世に至るまで。つぱらかに解き分けたりと覺ゆる說も見ゆさるに。況て麿が如き不才淺學のかにかくと說くはいと恐けれど。徒に畏みてのみいはざる時は。異學の輩がともすれば外教の敎理等に附會されて。彼の神道は祭天の古俗などいふ。いな醜めきいぎたなき僻學者抔の出む事を恐れて。稚學のものゝ爲にもと。次に自ら御名乘給ふ意義を釋むとす。

撞櫝木嚴御魂天佐加流向津比賣尊と。奉稱る御名の津伎は。付にて恐けれど譬へば接木の根と幹との。其性質を異にする如くならで。木は本性を其まゝ少しもかへず。根堀じにこじたる榊木の。そのまゝ生ひ茂りたる義と心同じくて。又續の義を兼て彌續々に皇統連聯の意にも合をべし。次の義とは異なりと知るべし。（神代よりの祭事に榊木を根堀して。そを神籠と植付け。鏡劍玉靑白の幣を垂でしは。かゝる因由によれるなり。是即祭式の典禮なり。）故創化大元神の御性質の隨意化生し給ふは。其が根こじ移し植たる榊の根生のまゝに成育するでと。祭典式の榊木に取り附る珠鏡に。至誠懇禱の功驗顯れ給ふ。神業を垂示する密訣にぞありける。さて伎の音義は。創化大元神則國常立大御神は伎音に約り。天御中主大神は伊音に約れり。伊と伎とは其本源を同くして。生氣の呼吸となる性命の一大元理たり。（國常立尊は。國土のまだしきに生產坐して。天御中主尊と實は御同神なる事。造化尊神の說に述べむとす。）伊と伎と同通の言葉もいと多し。伎の韻伊なる事を思ひ合すべし。即古史本辭經に所謂橫相通と云へる是なり。其本性を本紀にキサシ含むとありて。大元尊神の御魂を稱へ奉る義と知べし。素より此伎音を基礎に立て。伊佐那岐津伎榊木など　皇大御神の御名を伎音に重ね稱へ奉り。うを續き榮えます皇孫瓊々杵と稱へ奉る意義。代々の天皇を須女魯伎と奉稱り。又齋宮調貢抔の名稱の伎音義たる者は。天地の敬禮神人の秩序。定りあるさまりのキにして。皇統の基礎純粹剛健中正の神氣。萬理を統轄し衆物よ首出し。萬物を光照し給ふ。生きとし生ける者其德化を蒙らざる事なく。其が恩賴に洩るゝことなき。至大至公無上なる盛德をキ音義と了るべきなり。さらばキ音は音義中眞粹たる一音にして。即ち大元神の性を約言すれバキ音に歸る。是に依りても單音の蘊奧は不知るべからず。こゝをもて音格の活動は言靈の一證にて。諸册二柱大神と造化大神一體一魂絪蘊醇化生產し給ふ　皇大御神に坐し。其本性なる伎音の開闔して。御魂の續き榮ひ

出坐せる故に。御名を津伎と奉稱る事いと〳〵かしこき事にぞりけり。然してキ音は男の稱。此の皇大御神は女神に坐しながら。男神を兼ましして宇内の大主宰にまし坐故に。是より前々の天津神は。皆日少宮に鎮り座すがもゑに。古事記に隱身矣とある神訣にして。自是己後伊弉諾大神も功績を終へ坐して。萬づ統御の大權ゝ。皆悉く　皇大御神に事依し奉りて。こもまた日少宮に御身を隱し給ひて。天地の化育を輔祐し給ふ事と成りにけり。

次に。榊木伊豆御魂とは。諸册二柱大神の懇禱し給ふ。神籬成す榊木は四時衰枯有ることなき。常磐木に招き玉鏡に感格まし坐して。いづさかき御いで生産ますを兼ね。また大元尊神と御同魂に坐して無隔く。天上に嚴然御榮坐しますをかけこめて。御名乘り給ふ大御名と聞きて。　皇大御神の諸册二柱大神の至誠祭禮の大典に。生産し給ふ神密緊要の靈傳なり。一音單義にかけてこそ知るへけれ。疎異に見る可らず。さて一柱の御名の中に。魂と稱へ尊と稱へたるに。心をつけて見るへし。同し事のやふにはあれど。聊か異なり。大國御魂の神顯見國魂の神の魂と神とを指し分けたるに心を注ぐべし　此は皇大御神の御名ながら。創化大元神の大御魂。則和御魂の化成し給ふを知らせたるものよて。下の尊は主と　皇大御神の惣體を稱へ奉る御名の義と。さし分けて辨ふへくなむ或人問ふ諸册二柱の天神の御寄しは。此地球の浮漂旋轉大空に根の係る所なき地球を。修理固成せよと瓊矛を賜ふ大詔なるが。天上の主宰もやがて天地の月星球より地球まで。洩るゝ事なき大權は如何と問ふに答けらく。かく天神の詔の外に天上の主宰の進退權利を計畫し給ふを仰き見れば。正に是天神の授與し給ふ瓊矛にて。皇大御神を天上に送りあげ。主宰と高御位に坐さしめまつり。天神親授相傳の御統の頸玉を懸け奉り給へるにて。正しく創化大元神の化生を感通洞達識得します事の代に顯れし神理と聞えて。益す皇道緊要の大證明には有けり

御魂の義は。胸懸珠即ち御倉棚之神靈。大元神の和御魂皇大御神の御魂と一魂なる事を垂示せる要訣なるべきを。古人の徒に御倉に藏め。その棚の上に安置奉り。崇祭するよりの名とのみ云れしは。委しからぬ說にと前に述たる如くこは極めて　皇大御神の常に左右を放ち給はで。御胸に懸け給ひ。高御位を遠永に知し食す眞澄の鏡と明けき證據の珍の寶玉たりしなるべく。皇上の三神器と神理は同しかるべければ。皇上に三神器の在るは。天上にも其基礎素より在りしが故に外ならず。

次に天佐加留武加津姫尊と奉稱るを。平田大人の古史傳に。此國土より天日を瞻仰し奉る意の御名とありと。師の說を引れしはいかならむかも。こも賴みがたし向津姫を此國土より向ふ義と云れつるは相對して向ひ奉るにて。國土人民よりの義となり。こは決めて御身自にかく詔り給ふなれば。御盛德御稜威を他より云ふ意とは聞えずてなむ。比呂伎恐み考るに。天佐加留は。天照と同義にて。天上に常磐に御榮ゆ

給ふ御にほひの稱言にて。光溫運化し水火燥濕風雨穀菜に至るまで。萬物を生々化育し給ふ何の隈か塞殘るべき。煦育の大慈祥の。天榮ゆるの義と見たらむこそ公義ならめ。古典の照徹六合の文意に合せ見れば。最簡短よ聞ゆめり。

次に武加のムは神靈不可測ムケのムにして。向ふの義のみならで。混一の元音本性玄體を指し。カは神風の伊勢の靈光剛强のさがを指し。津は附く義の助辭の如くに聞ゆれど。其が音義は。太元より連聯たる稜威のツに等しく。チ音よ通ひムチの勝の義と成り。カは神のカまてかゞやき堅强なる義のカにして。知音の圓融生動なるに。カ音に織添はる時は。上なき明且靈の詞となれば。圓轉流れて止まざる水の象を含み。光り燄々圓球して。火の象を帶ひ。加知加津と活きては。勝の意義となる。皇大御神の男健給ふやうのかみ素盞嗚尊は萬古を遮斷し。宇宙を獵涉して類ひなき大勇猛に坐し。其の天に昇り給ふ時は大海もゆるきたゞゆひ。山岳も鳴りほへぬる御勢なるも。皇大御神の雄たけびころひを奮り起し給ふに逢ひては。さすかに嚴の御顏と畏縮し坐し黑き心なしと誓び給へるとまた。皇大御神の堅庭を踏み給ふに沫雪の如くくゑはらゐし。岩屋戸にさし籠り坐しては。八百萬神の力もて開く事も得せられぬ神力には。如何なる神も面勝ちならぶべき物かは。あなくすしあやあやしの御稜威ならすや。古語拾遺に孰能敢抗哉とある。抗の言義勝の解釋と心得べきなり。されば古典に御功德を天照と稱し。光華明彩照徹六合と稱し。惟祖惟宗尊無與二。自餘諸神者乃子乃臣孰能敢抗哉と。古來より神典に稱へ奉るは。取も直さず天佐加留武加津の明釋にて。皇國は古へより行事の功德によりて。其名を負ふ名實一致言行一貫せる國風なり。論語てふ書に。名不正則言不順。言不順則事不成。事不成則禮樂不興。禮樂不興則刑罰不中。刑罰不中則民無所措手足とあり。皆名のうとからぬ實の基たる言にぞある切要の擧言なり。假りにも虛飾せず。國体と皇統と共に天壤無窮に坐して。萬千秋君臣位定り粹然たる眞秀國と稱へ來りしもうべなゝ。姫の義は已に大姫の解よいへり。美古止は御言といふ說もあれど。猶神名の正しき御事實の意なるべき歟。

抑此皇大御神の御名の二十有餘音を言葉よ綴り簡譯せば。造化大元神の諸册二祖の至誠懇祈なる。祭典の榊木に感應座しまして。其本性の其儘に榊木に掛添へる

珠鏡に化醇現出せる和魂に坐して常磐に天上に御榮え給ふ御功德には勝る物なき神の御上と稱へ奉らるゝ大御名の釋言になむ。日球に鎮坐も伊勢の大宮に鎮坐も隔てなし。此の大御名義解に神字をも添へて解くべきなれども。餘り長きは見る人の飽き厭ふらむも。皇大御神等に恐れあれば畧きぬ。偖は理りに過ぎて最と畏き事にはあれど。尚ほ約めて之を釋むに抑も天地の未だ闢けざる以前は固より萬象ともに一大混塊にて中に神性（カムサカ）即ち精氣を含み其が萌え出るにつれ恒星五星天王海王地球と破裂分離し清濁輕重の質より大陽を元眞とし各も各も其が賦性配質のまにま遠近にタナヒキて其位置を定め茲に彼の蒼々たる天體を成し此の團々たる地球を形づくることゝはなれりけり。霞雲說地質學等の詳說に大同小異なる事。第六章に釋けると合せ考ふべし形象の歸する所既に斯の如くなれば性理も亦た一條一慣して相戻らざるを知るべし。神性即ち精氣の延び廣がりて萬物に賦性せるや我等も固より其の一部分なれば釋迦の天上天下唯我獨尊と誇稱せしも後には一切衆生具足如來智惠德相と言あげしも草木國土に迄佛性ありと大悟せるが如き又た孟軻氏の人々有尊於己者と論ずるが如き何れ總て生物には我れ人共に造化の一部分正に配賦せる眞理を達觀したるものなりかし。又彼の創始に含まりたる神性即ち精氣は萬象の分裂に伴はれて各其の國魂と分生せし事は天國魂などゝ稱するにても炳焉なり只この生物は一視同仁博愛主義其の

情勢より後來に相爭ふを免れざるものから諸册二柱大神畏くも造化の大御魂を乞ひ受け　皇大御神あれまし給ひては化工の御璽と受續き賜へりし天の瓊矛以て彼の元眞なる大陽球に送り奉り。後世に將軍を拜するに節刀を授くる蓋し例の如し。亦天授の御倉棚の神靈を大御軀に奉掛り及ひ眞澄鏡を奉添りて宇宙の大主宰と定め給ふは實に惟神の大律天地の盛業にぞありける皇孫の天降り給ふも地球上の競爭を鎭め其の蕃殖を計り給ふにて彼の大律と一貫なる御手振の事理にこそあれ勿論造化は元來性質とも萬物に別れ〳〵に具はり行きたること既に述べしが如く其の本體は無我無心なれば褒貶毀譽いつれも關係なく所謂る無聲臭無形象の自然を指すに外ならざるより皇典には隱御身焉と神訣せられたるものなるべし故建國以後も別に造化主を祀らず高く尊く　皇大御神を唯一無上と齋き奉るは斯る最と深き緣由あることともなり尚ほ委しくは追ふて物すべき大元神國常立尊の釋義に就きて知りぬかしかくて名たゝる古學の大人達のみが中昔より譯き難げに傳ひ來りし說を己れ獨り知り得顏にかくいふはいとおほけなく恐こからぬにもあらねど。

全く比呂伎の力としもいふにあらず。自らなる神運にひかれ又皆悉く　皇大御神の御恩賴と言靈の幸に依る事になむ。されど猶思ひ誤れるふしも有りぬべし。後の人神典の說の區々なるも。菊理姫の代々のもつれをくくる御魂に倣ひ神理言魂に賴りて大成し。一言單音の性質を深く心に留め。一言主神の一言に言放ち。言魂の正しく助くる原義を推し廣め。萬理を一貫きに我國の事業は。能く天眞なる公道に則り。國光を宇內に輝さむ事こそ。天の益人等が可務本分なりけれ。これなむ道の御祖なる猿田彦大神の率先して導き給ふ恩賴なり。天晴諸人よ。克こそ神習ひて。神風の伊勢の大宮を千町田稻の諸伏に奉齋るは大日本男兒のこよなきほいにはありけり「五十鈴川流れ絕ねは水莖の跡さへ涙のいやさやかなる」或人の祝ぎ寄さられしをうれしく覺えて。此文のとぢめとなすにぞあなる。此書は講錄のまゝなるを。こたび思ふ主ありて急きいりぬれば。重複も多く語格も不整を。覽者幸に許してよ

皇國は天象地義のまに〳〵。惟神なる道に準據し。伊佐奈伎伊佐奈美二柱大神の。天の瓊矛を國中の御柱と衝立て。皇大御神の高天原に統御まし坐ては。久方の天と高く。荒かねの地と豐けく。皇統は萬斯無疆たり。君子國の外稱を博くするに至るも。その淵源に遡り然る理由をまさくりさやけく釋き起すに。天象音義皇典の神韻に依り。金聲玉振世に鳴りとゞろかしぬる。蓋し師翁の功しに越るものなきなり。天晴今しも神風に日章の萬國に輝く折の遠くもあらぬ前祥と。之の御文の代に顯れてけりといとうれしくて。返す〳〵も祝きまつるになむ。

瓊矛の道の草むら苅り拂ひまさしき跡を君そつけける

天地のそこひのうらに匂ふまて言葉の花を咲しつるかな

明治二十餘り七年六月

山田裕足謹白

慨世之經　憂國之緯　機杼整然　成大和錦　其勞可謝　其功可期

彼醉洋漢　亦應慙死　滔々時弊　豈不可矯　有山本翁　幸强我意

辱知磯邊館親愛拜識

伊吹五十鈴の川波　終

紀元二千五百五十四年夏六月下浣

廣告

佐々木伯題字
伊吹の（ささり）天津太詞諄考

此書は高天原より傳授の太詞諄とにして　天照皇大御神を奉始り八百萬神に己が犯せる罪穢を拂ひ給へと願ふ事を詳に釋したり日本人民は不可不捧讀の書なり

東京市神田區猿樂町三丁目三番地
大取次兼賣弘人　安田恭吾

副島伯勝伯題字　諸先生評
氣噴狹霧五十鈴の川波

此書は　天照皇大御神の御盛德を奉稱る釋なり萬國は造化を主一と祀れど皇國は　皇大御神を無上至尊と奉齋るは天地の眞理にして國體の維持大和魂の所發揮の元則も此に基因す神民たるもの宜しく服膺熟讀すべき書なり

ひふきの（さきり）さなが田の垂穗　近刻

此書は國津神猿田彦大神の萬生の慈母教師と成りて天成の神律を敎養し給ひ及ひ地球の元大神として地上に生息するものに大に關係あるを釋く書なり

理上史　二巻

此書皇國造化元神より伊弉諾伊弉冊大神までを實理眞證に寄り釋き起したる珍書たり著者下谷徒士町二丁目十八番地武居保先生編述

明治二十七年七月十四日印刷
明治二十七年七月十七日出版

版權所有

定價三拾五錢

編輯兼出版人　新潟縣北魚沼郡小千谷町　山本比呂伎

印刷者　東京市京橋區築地二丁目十七番地　曲田成

印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

賣弘所　東京市神田區表神保町　中西屋邦太

同　東京市淺草區　文淵堂

同　新潟縣新潟市　小林次郎

同　同縣北魚沼郡小千谷寺町　野口俊策

同　京都市三條寺町　田中治兵衞

同　大坂市東區北久太郎町四丁目　柳原喜兵衞

五十鈴延川波
五百円